ルドルフ・シュタイナー
バガヴァッド・ギータとパウロ書簡

GA142

Die Bhagavad Gita
und
die Paulusbriefe

yucca訳
神秘学遊戯団発行

第１講

１９１２年１２月２８日、ケルン

今日私たちは狭義の人智学協会設立のいわば出発点に立っており、まさにこのような機会にこそ、私たちの問題の重要さと意義を今一度思い起こすことが許されると思います。人智学協会が新たな文明のためにあろうとする姿は、私たちがこのグループ内部で神智学として営んで参りましたことと、なるほど原理的にはまったく区別されるべきではないかもしれません。それでもこうして新たな名称をつけ加えることは、私たちの魂に誠実と尊厳を思い起こさせるにじゅうぶんかもしれません、この誠実と尊厳をもって私たちはこの精神潮流の内部で活動していきたいと思います、そしてこの連続講演のテーマもこの観点から選ばれました。ひとつのテーマを私たちの問題の出発点において論義したいと思いますが、これは、私たちの精神潮流の、現代の文化生活にとっての重要さと意義を示唆するのに、きわめて多種多様な意味でふさわしいものでしょう。

二つの一見かけ離れたものと見える精神潮流、一方は偉大な東洋の詩篇バガヴァッド・ギーター（☆１）において、他方はキリスト教の基礎固めにあれほど親密に関係した使徒パウロの書簡において語られているものですが、このような二つの精神（霊）潮流が組み合わされていることに、もしかしたら驚かれた方もいらっしゃるかもしれません。きょうはひとつ導入として、一方では偉大な詩篇バガヴァッド・ギーターに関連するものがいかにこの現代に入り込み、他方ではキリスト教の出発点に設立されたもの、つまりパウロ主義がいかに入り込んできているかを私たちが指摘すれば、この二つの精神（霊）潮流の近しさをもっとも良く認識できるでしょう。とは言え、この現代の精神生活においては、比較的そう遠くない以前の時代とも、多くが異なっています、そしてまさにこの、まだ少し前に過ぎ去りつつある過去の精神生活と現在の精神生活が異なっているということが、神智学的あるいは人智学的な精神潮流であるものを是非とも必要としているのです。

ひとつ考えてみましょう、比較的近い過去の時代の人間が、現在の精神生活へと飛躍したとき、すでにバーゼル及びミュンヘンでの連続講演（☆２）において強調いたしましたように、三千年、つまり紀元前の千年とまだ終わりきっていない｛紀元後の｝二千年、キリスト教的な精神潮流に浸透され、貫かれたこの三千年といったいどう関わり合ったかを。少し前、つまり今日私たちが言うような神智学的あるいは人智学的精神潮流の認可について語ることができなかったときに、人類の精神生活のさなかにいた人間は自らに何を言うことができたでしょうか。こう言うことができたのです、現代に入り込んできているのは本来、キリスト紀元に先行するせいぜい一千年に探究され得たものだ、と。と申しますのも、いわば個人（パーソナリティ[Persoenlichkeit]）としてのひとりひとりの人間が精神生活に意味を持ち始めるのは、この紀元前一千年より前ではないからです。以前の時代の精神潮流のなかにはそれほど途方もなく大きく力強く私たちを照らし出すものがあり、個人（パーソナリティ[Persoenlichkeit]）、個（インディヴィジュアリティ[Individualitaet]）というものが、精神潮流の根底にあるものから際立って見えることはありませんでした。現在のような狭い意味ではなしに紀元前の最後の千年に私たちが加算することができるものを振り返ると、つまり古エジプトあるいはカルデアーバビロニアの精神潮流を振り返ると、私たちはいわば、互いに連関した精神生活を展望します。突出して、すなわち個そのものが私たちの眼前にまったく霊的に生き生きと登場するのは、ギリシアの精神生活においてようやく始まることなのです。偉大な、力強い教え、宇宙のはるかかなたまで達する力強い展望を、私たちはエジプト時代に、カルデアーバビロニア時代に見出します。ギリシア時代においてはじめて、私たちが個々の人物、ソクラテス（☆３）やペリクレス（☆４）、フェイディアス（☆５）、プラトン（☆６）、アリストテレス（☆７）、といった個人（パーソナリティ）を見る、という事態が始まったのです。個人（パーソナリティ）そのものが生じてくるわけです。これがこの三千年の精神生活の独自性です。私は単に有名な人物たちのことを言っているのではありません、精神生活が個々の人物ひとりひとりに及ぼす印象のことを言っているのです。こう言ってよろしければ、個人（パーソナリティ）というのはこの三千年に出てきた問題なのです。そして、個々人が精神的生活に参加する要求を持つことによって、個々人が精神的潮流を通じて内なる慰め、希望、安らぎ、内なる至福を見出すことによって、精神的潮流が意味を持つようになります。

そして比較的最近まで、主として人々の興味の対象は、個人から個人へと経過する限りでの歴史であっ

たために、この三千年の前にあったものに対しては、それほど深く徹底した理解は得られませんでした。つい最近になってからのみ理解できる歴史は、ギリシア精神（グリーヒェントゥムGriechentum）とともに始まります、そして最初の千年と次の千年の転換期に、キリスト・イエスという偉大な存在に結びつくものが入ってきます。

最初の千年には、ギリシア精神が私たちにもたらしたものが突出しています。そしてこのギリシア精神は独自に突出しています、つまりギリシア精神の出発点には秘儀があるのです。そこから流れ込んできたものーーしばしば指摘しましたようにーーは、あらゆる分野の偉大な詩人や哲学者、芸術家たちに入り込んでいます。と申しますのも、正しいしかたでアイスキュロス（☆８）、ソフォクレス（☆９）、エウリピデス（☆10）を理解したいなら、私たちはその理解のための源泉を、秘儀から流れ込んだもののなかに探さなければならないからです。ソクラテス、プラトン、アリストテレスを理解したいなら、私たちは彼らの哲学の源泉を秘儀のなかに探さなくてはなりません。ヘラクレイトス（☆11）のような傑出した人物についてはまったく語ることができません。ヘラクレイトスについて皆さんは、私の『神秘的事実としてのキリスト教』という書物のなかで（☆12）、彼がいかに秘儀に立脚していたかを見ることができるでしょう。

さらに私たちは、次の千年とともにキリスト教的な衝動が精神進化のなかに流れ込むのを見、そしてこの第二の千年が、このキリスト教が次第次第にギリシア精神を受け容れ、ギリシア精神と一体化する、というふうに経過していくのを見ます。この第二の千年全体は、ギリシア精神から生きた伝統、活き活きとした生全般のなかにもたらされたものと、力強いキリスト衝動が一体化していく、という経過を辿ります。したがって私たちは、たいへんゆっくりと徐々に、ギリシア的叡智、ギリシア的感情、ギリシア的芸術家精神がキリスト衝動と有機的に結合していくようすを見るのです。これが第二の千年の経過です。

次いで、個人文化の第三の千年が始まります。この第三の千年のなかに、別のしかたでギリシア精神が作用を及ぼしているのが見えると言ってよいかもしれません。たとえば、ラファエロ（☆13）、ミケランジェロ（☆14）、レオナルド・ダ・ヴィンチ（☆15）、といった芸術家たちを見るとき、私たちにはそれがわかるでしょう。第三の千年においてはもはや、第二の千年の文化におけるようにギリシア精神がキリスト教とともにさらに生き続けるのではありません。第二の千年において人々はギリシア精神を、歴史的に偉大なもの、外的に観察されるものとして受け容れたのではありませんでした。第三の千年において、人間は直接ギリシア精神に向かわなくてはなりません。ふたたび明らかになる偉大な芸術作品を、レオナルド、ミケランジェロ、ラファエロが自らに作用させ、ギリシア精神がますます意識的なしかたで受け容れられるのを、私たちは見ます。第二の千年にはそれは無意識に受け容れられましたが、第三の千年においては、いっそう意識的に受け容れられるのです。

私たちは、このギリシア精神が世界観のなかに意識的に受け容れられるのを見ます、たとえばトマス・アクィナス（☆16）の哲学形成において、彼はキリスト教哲学から流れ出すものをアリストテレスの哲学と組み合わせることを余儀なくされたのです。ギリシア精神はここでも意識的に受け容れられ、その結果、ここで意識的なしかたで、ギリシア精神とキリスト教が哲学的な形態をとって合流します、ラファエロ、ミケランジェロ、レオナルドの場合は芸術的な形態をとって合流するように。そしてこの動向全体が精神生活を貫いてさらに上昇し、ジョルダーノ・ブルーノ（☆17）、ガリレイ（☆18）において、ある種の宗教的な敵対として現われます。にもかかわらず、いたるところに、ギリシア的理念と概念が、とりわけ自然観と関連して浮上してくるのが見出せます、つまりギリシア精神の意識的な吸収です！

けれども、これはギリシア精神より以前には遡りません。あらゆる魂のなかに、たとえば学識があったり高い教養を身につけた人たちばかりでなく、きわめて素朴なひとたちにいたるまで、あらゆる魂のなかに、このような精神生活、ギリシア精神とキリスト教が意識的に合流して入り込んだ精神生活が広がり、生きているのです。大学から農民の小屋のなかにまで、キリスト教的表象をともなったギリシア的表象が、概念とともに受け容れられます。

十九世紀になって、ある独特なものが生じます、根本的に、これを形成し行なうには神智学あるいは人智学が適任であるようなものです。どんな力強いことが起こっているかは、ここで個々の現象において見られます。バガヴァッド・ギーターというすばらしい詩篇がはじめてヨーロッパで知られるようになったとき、この詩篇の偉大さによって、深遠な内容を意味する精神によって、心を奪われるのが見られます。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトのようなあれほど深い精神の持ち主が、バガヴァッド・ギーターを知ったとき、これは自分が目にしたもっとも深遠な哲学的な詩篇である、と言い得たのは忘れがたいことで

しょう。そしてフンボルトは、バガヴァッド・ギーターを、太古の聖なる東洋から響いてくる偉大な精神の歌を知ることができたので、これほど長生きしたかいがあった、という名言（☆19）を発することができたのです。

そして、まだそれほど広範囲にわたってではなくとも、十九世紀において東洋の古代から多くのものが、まさにこのバガヴァッド・ギータからゆっくりと流れ込んだ、というのは何とすばらしいことでしょう。と申しますのも、このバガヴァッド・ギーターは実際、東洋の古代からこちらにそびえる他の文献のようなものではないからです。他の文献は、東洋的な思考と感情を、あれこれの観点から私たちに告げるのを常としています。ところがバガヴァッド・ギーターにおいては、私たちがこれについて、これは東洋の思考と感性と感情のあらゆるさまざまな方向と観点の合流である、と言うことができる何かが現われてくるのです。これがバガヴァッド・ギーターの重要なところです。

ひとつ古代インドの奥底を見てみましょう。あまり重要でないものを度外視しますと、私たちはまずインドの遠い太古の時代から、いわば三つのニュアンスを帯びた精神潮流がわき上がってくるのを見出します。すでに最初期のヴェーダ（☆20）において私たちに姿を現わし、次いでのちのヴェーダ文学においてさらなる発達をみたこの精神潮流、これは非常に明確な精神潮流でありーー後ほどすぐ特徴づけていきますがーー、私たちがこう言ってよろしければ、これは一面的な、しかしまったく明確な精神潮流です。さらに、サーンキヤ哲学（☆21）における第二の精神潮流が私たちに姿を見せます、これもまた明確な精神の方向性を有しています、そして最後に現われるのは、ヨーガにおける東洋の精神潮流の第三のニュアンスです。これで、私たちの魂の前に、三つのきわめて重要な東洋の精神潮流が置かれたわけです、ヴェーダの流れ、サーンキヤの流れ、ヨーガの流れです。ここで私たちにカピラのサーンキヤ体系として現われてくるもの、パタンジャリのヨーガ哲学（☆22）とヴェーダにおいて私たちに現われてくるもの、これらは、明確なニュアンスを持つ精神潮流であり、この明確なニュアンスを持つがゆえにいわば一面的ではありますけれども、ほかならぬその一面性においてその偉大さを示している精神潮流です。

バガヴァッド・ギーターのなかには、これら三つの精神潮流すべてが調和的に浸透しています。ヴェーダ哲学が語り得たことが、バガヴァッド・ギーターからも私たちに輝いてくるのがわかります、カピラのサーンキヤが与えることができたもの、私たちはこれをバガヴァッド・ギーターのなかに見出します。そして私たちにはたとえば、これが寄せ集めのように私たちに現われる、というのではなく、これらが、あたかももともとは合体していたかのように、三つの分岐のように調和的にひとつの有機体へと流れ込む、ということがわかるのです。バガヴァッド・ギーターの偉大さは、この東洋の精神生活には一面においてはヴェーダから、別の面においてはサーンキヤ哲学から、第三の面においてはパタンジャリのヨーガからの流入が見られることを、このように包括的なしかたで叙述していることです。

ヴェーダの流れは、きわめて明白な意味において、一元哲学[Einheitsphilosophie]、考えられ得るきわめてスピリチュアル[spirituell]な一元論（モニスムス [Monismus]）です。一元論、スピリチュアルな一元論、これはその後ヴェーダンタ（☆23）においてその完成を見るヴェーダ哲学です。私たちがヴェーダ哲学を理解しようとするなら、まずは私たちの魂の前に、次のようなことをとどめておかなくてはなりません、つまりこのヴェーダ哲学が出発点とするところは、人間は自分自身のうちにその本来の自己（ゼルプスト[Selbst]）であるきわめて深遠なものを有しているということ、そして人間が通常の生活においてまず把握するものは、この自己の一種の表現あるいは刻印であるということ、人間は自らを展開させうること、そしてその展開は魂の奥底から、ますますいっそう本来の自己の深遠さを引き出してくるということなのです。高次の自己はつまりまどろんでいるかのように人間のなかに休らっています、そしてこの高次の自己は、現代の人間が直接知っているものではないけれども、人間のなかで働いているものであり、人間がそれを目指して進化していくところのものです。いつか人間が自らのなかに高次の自己として生きているものに到達したあかつきには、ヴェーダ哲学によれば、人間は気づくことでしょう、この自己は、あまねく全てを包括する宇宙の自己とひとつである、人間はその自己とともに、このすべてを包括する宇宙自己[Weltenselbst]のなかにまったくもって休らうのみならず、この宇宙自己とひとつなのだ、と。そして人間がこの宇宙自己とひとつである、というのは、人間はその本質とともに二重のしかたでこの宇宙自己に関係している、ということです。身体的に息を吐いたり吸ったりするように、ヴェーダンティストはこの人間の自己の宇宙自己に対する関係をたとえばこのように表象する、と私たちは言わなければなりません。息を吸ったり吐いたりするように、そして、外部に普遍的な空気があって内部に私たちが吸い込んだ空気の

一部があるように、外部には普遍的包括的な、すべてを貫いて生き活動する自己があり、宇宙のスピリチュアルな自己の観察に身を捧げるとき、ひとはそれを吸い込みます。この自己について感じ取るたびごとに、ひとは霊的にこの宇宙自己を吸い込みます、その魂のなかに取り込むすべてとともに、これを吸い込むのです。あらゆる認識、あらゆる知、あらゆる思考と感情は、霊的な呼吸です。そして、私たちが宇宙自己の一部ーーとは言えこれはこの宇宙自己との有機的なつながりをとどめていますーーのように私たちの魂のなかに取り込むもの、これがアートマン[Atman]です、呼吸（アートメン [Atmen]）は、私たち自身に関しては、私たちに吸い込まれても普遍的な空気から切り離され得ない空気の一部のようなものです。このように、アートマンは私たちのなかにありますが、すべてを統べる宇宙の自己であるものからは切り離され得ないのです。そして私たちが身体的に息を吐くように、魂の三昧[Andacht]というものがあります、三昧を通じて魂は、自らの持つ最良のものを、祈りのように捧げつつこの自己に向けます。これは、ブラフマン[Bbrahman]は、霊的な呼気のようです。吸気と呼気のようなアートマンとブラフマンは、私たちを、すべてを統べる宇宙自己に参加する者にします。

同時に宗教でもある一元論的ー霊的な哲学がヴェーダ精神（ヴェーデントゥム）において私たちに現われてきます。そしてこのヴェーダ精神は、普遍的な、宇宙を貫いて支配し活動する自己、一なる宇宙の本質とひとつである、というあのあれほど人間を至福にする感情に、最も内なるもの、最高のもののなかに休らう感情に、花開き結実しています。人間と宇宙の一性とのこの関連、人間が大いなる霊的全宇宙のなかにあることをヴェーダ精神は語ります、これを語るのはーーヴェーダの言葉とは言えません、ヴェーダというのがすでに言葉だからですーー与えられた言葉ヴェーダです、ヴェーダ的表象によればあらゆるものを統べる一なる存在から吐き出され、人間の魂を認識の最高の完成形態として自らのなかに受け容れることのできる言葉です。

ヴェーダの言葉が受け容れられるとともに、あらゆるものを統べる自己の最良の部分が受け容れられ、個々の人間の自己がすべてを統轄する宇宙自己と連関しているという意識が獲得されます。ヴェーダが語るのは、神の言葉です、それは創造的であり、宇宙を貫いて生き活動する創造的な原理に人間の認識をあのように引き合わせつつ、人間の認識のなかにふたたび生まれる神の言葉です。ですから、ヴェーダに書かれたものは、神的な言葉とみなされ、そしてこれに精通した者は、神的な言葉の所持者とみなされました。神的な言葉は、スピリチュアルなしかたで世界にやってきて、ヴェーダの書物のなかに置かれました。これらの書物に精通した者は、宇宙の創造的な原理に加わったのです。

サーンキヤ哲学においては事情は異なります。伝承されたこの哲学がまず最初に私たちに登場するとき、そのなかには一元説[Einheitslehre]とは真反対のものがあります。私たちがサーンキヤ哲学を比較したいと思うなら、これをライプニッツ（☆24）の哲学と比較することができます。サーンキヤ哲学は多元論的な哲学です。私たちに向かって現われる魂のひとつひとつ、人間の魂と神々の魂、これらは、サーンキヤ哲学においては一元的な起源まで追求されるのではなく、個々の、いわば永遠によって成り立つ魂、あるいは少なくともその出発点は一元性には求められない魂として受け容れられます。魂の多元論[Pluralismus]がサーンキヤ哲学において私たちに現われてきます。個々の魂ひとつひとつの独立性が非常に強調され、個々の魂は宇宙においてそれ自体その存在と本質のなかに完結して進化するのです。

そして、魂の多元論に対峙しているのは、サーンキヤ哲学においてプラクリティのエレメントと呼ばれるものです。私たちはこれを現代の物質[Materie]という語で現わすことはできません、この語は唯物論的な意味を持つからです。けれどもサーンキヤ哲学においてプラクリティは実質的なものという意味ではなく、これは魂の多元性に対立し、しかも一元性に帰せられるのでもありません。

まず最初に魂の多元性があり、そして、私たちがマテリアルな[materiell]基盤と呼ぶことができるもの、いわば宇宙を空間的時間的に貫いて流れる源流[Urflut]、魂が外的に存在するためのエレメントをそこから取り出す源流のようなものがあるのです。魂はこの物質的（マテリアル）なエレメントをまとわなければなりませんが、このエレメントは魂そのものとの一元性に還元されることはないのです。

そして注意深く研究すれば、サーンキヤ哲学において、主として私たちに現われてくるのはこのマテリアルなエレメントです。サーンキヤ哲学においては、個々の魂にはそれほど視線は向けられません。個々の魂は、現実に存在する何か、マテリアルな基盤と絡み合い結びつき、このマテリアルな基盤の内部でさまざまな形態[Formen]をとりそれによって自らを外に向かってさまざまな形態（フォルム[Form]）で示す何か、として受け入れられます。魂は、いわば個々の魂のように永遠性から思考された基本エレメントを身

にまといます。このマテリアルな基本エレメントのなかに、魂的なものが表現されるのです。それによってこの魂的なものはさまざまな形態をとります。そしてこのマテリアルな形態の研究が、とりわけサーンキヤ哲学において私たちに現われてくるものなのです。

ここでまず、このマテリアルなエレメントのいわゆる原初的な形態は、魂がまず最初に沈潜する一種の霊的な源流のように現われます。つまり私たちが進化の最初の段階に眼差しを向けるとしますと、マテリアルなエレメントのいわば分化されていないものが得られ、そして、さらなる進化を遂げるために沈潜してゆく魂の多元性が得られるでしょう。つまり、私たちに形態として現われてくる最初のものは、源流という一元的なものからまだ分離されず、進化の出発点にあるスピリチュアルな実質そのものなのです。

さらに登場してくる次のもの、魂が個的に身にまとうことのできるものは、ブッディ[Buddhi]です。私たちが源流実質をまとった魂を考えるとき、この魂の現われはまだ、あまねく波打つ源流のエレメントからまだ分離されていません。魂が、あまねく波打つ源流のこの最初の存在にのみ包み込まれるのではなく、次なるものとして生じうるものに包み込まれることで、魂はブッディに包み込まれることができるのです。

形を取ってくる第三のエレメント、魂はこれによってますます個的になることができるのですが、この第三のエレメントはアハムカーラ[Ahamkara]です。これは原質（ウアマテーリエ[Urmaterie]）が、さらにいっそう低次に形成されたものです。つまり、原質、その次の形態であるブッディ、そしてさらに次の形態であるアハムカーラがあります。その次の形態はマナス、その次の形態は感覚器官、その次の形態はより精妙なエレメント、そして最後の形態が私たちの周囲にある物質的エレメントです。

こうしてサーンキヤ哲学の意味でのいわゆる展開ライン[Evolitionslinie]が得られます。上にはスピリチュアルな源流の超感覚的なエレメントがあり、そしてこれがどんどん濃密化していって、私たちの周囲の粗雑なエレメント、粗雑な人間の肉体もこのエレメントから構築されているのですが、このエレメントのなかにあるものに至るのです。その中間にあるのはたとえば私たちの感覚器官を織りなしている実質、それに私たちのエーテル体あるいは生命体を織りなしているより精妙なエレメントです。よろしいですね、サーンキヤ哲学の意味においてはこれらすべては魂の覆いです。すでに最初の源流に由来するものからして魂の覆いです。魂はここで始めて再びその内部にあるのです。そしてサーンキヤ哲学者がブッディ、アハムカーラ、マナス、感覚、より精妙なおよびより粗雑なエレメントを研究するとき、それは魂がそのなかで自らを現わすよりいっそう粗雑な覆いのことなのです。

私たちははっきりと理解しておかなくてはなりません、私たちにヴェーダ哲学が、そして私たちにサーンキヤ哲学が現れてくるしかた、これらはそのようにしか私たちに現れてきようがないということをです、なぜなら、少なくともある程度までは太古の霊視がまだ存在していたあのいにしえの時代にこれらは完成されたからです。

ヴェーダとサーンキヤ哲学の内容は異なったしかたで成立しました。ヴェーダは徹頭徹尾、根源的な、まだ生来の素質のように原人類のなかに存在するインスピレーションに基づいていて、いわば人間がその本質全体において、準備をするという以外のことをそのために行ったりせずに、自己からやってくる神的なインスピレーションを平静に受け容れるよう促しました。サーンキヤ哲学の成立においては事情は異なります。ここではすでにいわば、今日私たちが学ぶ場合と似たような状態でした、ただ、今日の場合は霊視力に貫かれていない、というだけです。当時サーンキヤ哲学は霊視力に貫かれていました。サーンキヤ哲学は、霊視的な科学、恩寵によってのように上から与えられたインスピレーションだったのです。今日私たちが科学を探究するように探究されていたけれども、まだ霊視力が身近なものであった人々によって探究された科学、これがサーンキヤ哲学でした。

したがってサーンキヤ哲学も、本来魂的なエレメントをいわば手つかずのままにとどめます。サーンキヤ哲学はこう語ります、超感覚的外的形態（フォルム）のなかに研究することができるもののなかに、魂は自らをはっきりと打ち出す、けれども私たちが研究するのは、外的形態、魂が形態を身にまとうというかたちで私たちに現れてくる諸形態である、と。したがって私たちは、宇宙において私たちに現れてくる諸形態の作り上げられた体系を見出しますーー私たちが私たちの科学のなかに自然事実の総計を見出すようにーー、ただ、サーンキヤ哲学においては、事実の超感覚的な観照に到るまで観ぜられるのですが。サーンキヤ哲学は、霊視力によって獲得されたにもかかわらず、外的諸形態についての科学にとどまっていて、魂的なものそのものにまでは進入しない科学です。魂的なものはある意味で研究されないままにとどまります。ヴェーダに没頭したひとは、徹底して自らの宗教的生活が叡智生活とひとつであると感じます。

サーンキヤ哲学は科学であり、魂がそのなかに自らを刻印する諸形態の認識です。そしてこれに加えて、信奉者においては、サーンキヤ哲学に加えて魂の宗教的帰依もまったくもって成立することができます。そしてこのときこの魂的なものがいかに諸形態のなかに組み込まれていくかーー魂的なものそのものではなく、いかに魂的なものが組み込まれるか、ということがですがーー、これがサーンキヤ哲学において追求されるのです。

魂が魂自身の独立性を守ることが多いか、それとも物質のなかに沈み込むことが多いか、サーンキヤ哲学においてはこれが区別されます。なるほど沈み込んではいるけれども、マテリアルな形態のなかで自らを魂的なものとして保持している、そういう魂的なものが扱われます。このように外的形態のなかに沈められてはいるけれども、自らを魂的なものとして告知し開示する、そういう魂的なものはサットヴァーエレメント[Sattvaー Element]のなかに生きています。形態のなかに沈み込んでいるけれども、いわば形態によって覆いつくされ、形態に逆らわない魂的なものは、タマスーエレメント[Tamas-Element]のなかに生きています。そして、魂的なものがそのなかで形態の外的なものといわば平衡を保つもの、これはラジャスーエレメント[Rajas-Element]のなかに生きています。サットヴァ、タマス、ラジャス（☆25）という三つのグナ（構成原理[Guna]）は、私たちがサーンキヤ哲学と呼ぶものの本質的な特徴のひとつです。

ヨーガとして私たちに語りかけてくるあの精神潮流はさらにまた異なっています。ヨーガは魂的なものそのものに向かいます、この魂的なものに直接向かい、直接的な霊的生活において人間の魂を把握する手段と方法を探求します、こうして魂は宇宙のなかで位置する点から、魂的存在のますますいっそう高次の段階へと上昇するのです。このように、サーンキヤは魂の覆いの考察であり、そしてヨーガは、内的体験のますます高次の段階へと魂的なものを導いていくものです。ヨーガへの帰依はしたがって、魂の高次の力がしだいに目覚めることであり、したがって魂は、日常的な生活では魂がそのなかにいることはない何か、存在のますます高次の段階を魂に明らかにすることのできる何かに習熟していきます。ヨーガはしたがって霊的世界への道、外的形態から魂を解放する道、その内部での独立した魂生活への道です。サーンキヤ哲学のもう一方の面がヨーガなのです。ヴェーダにまだインスピレーションを与えていた、あの恩寵のように上から到来するインスピレーションがもはやそうあることができなくなったときに、ヨーガは大きな意味を獲得しました。ヨーガは、のちになってからの人類期に属する魂たち、もはや自ずから開示されるものは何も持たず、低次の段階から霊的存在の高みを目指して上昇していかねばならない魂たちに用いられなければなりませんでした。

このように、太古のインド時代において、三つの明確なニュアンスの違いを持つ精神潮流が私たちに現れてきます、ヴェーダの流れ、サーンキヤの流れ、そしてヨーガの流れです。そして今日私たちは、これらの精神的（霊的）な潮流をいわばふたたび相互に結びつけるよう呼びかけられます、これらの潮流を、魂と宇宙の深い奥底から、正しいしかたで現代のために取り出してくることによってです。

皆さんは、三つの潮流のすべてをこの精神科学のなかに見出すこともできます。私が『神秘学概論』（☆26）のなかで、第一章で、人間の構成について、眠りと目覚めについて、生と死について記述しようと試みましたことをよく読んでいただければ、私たちが今日的な意味でサーンキヤ哲学と呼ぶことができるものが得られます。さらに、土星から現代までの宇宙進化について語られていることをお読みになれば、現代のために打ち出されたヴェーダ哲学が得られます。そして、人間の進化が取り上げられている最後の章をお読みになれば、この現代のためのヨーガが打ち出されているのがおわかりでしょう。このように三つの明確なニュアンスの違いを持った精神潮流となって古代インド精神からヴェーダ哲学、サーンキヤ哲学、ヨーガとして私たちに輝きを発してくるものを、私たちのこの時代は、有機的なしかたで結びつけなければなりません。

ですから、詩的に深遠なしかたで三つの方向の合体のようなものを含むバガヴァッド・ギーターという驚くべき詩篇もまた、きわめて深遠なしかたでまさにこの現代に触れるはずなのです。そこで私たちは、バガヴァッド・ギーターの深い内容に釣り合うような私たち自身の精神志向といったものを求めなければなりません。この今日の精神潮流は、単に全体としてだけではなく、個別的にも古代の精神潮流と相通ずるところがあるのです。

皆さんは、私の『神秘学概論』において、ものごとをまったくそのものごと自体から引き出してこようとする試みがされていることに気づかれたことと思います。歴史的なことを拠りどころとしている箇所は

どこにもないのです。語られていることを真に理解するひとは、土星、太陽、月についてのいずれの主張に関しても、歴史上の情報からものごとが語られたところがあるなどと考えることはできません、これらはその事柄そ自体から引き出されたのです。けれども奇妙なことに、この現代に刻印されたものが、決定的な箇所で、古代から私たちに響いてくるものと共鳴し合うのです。これについてはささやかな証拠があります、私たちはヴェーダのある特定の箇所で宇宙的進化について読みます、これはたとえば以下のような言葉をまとわされています。太初において闇は闇に覆われていた（☆27）、これらすべては分かちがたい流れであった。力強い空[Leere]が生まれ、それは至るところで熱に浸透されていた。ーーさて土星の構成についてその事実自体から引き出されたものは何か、どこで土星の実質について熱実質として語られているか、どうか思い出してください、そうすれば皆さんは、神秘学におけるいわばこのもっとも新しいものと、ヴェーダのこの箇所で語られていることが調和して響き合っているのを感じられるでしょう。次の箇所はこうです、それから、まず最初に、意志が生じた、思考の最初の種子であった、存在するものと存在しないものとの連関である。それらはこの連関を意志のなかに見出した。ーーさらに思い出してください、意志の霊たちについて、いかに新たに刻印付けられて語られるかを。私たちが現代において語らねばならないことすべてにおいて、古きものへの共鳴が求められるのはではありません、まったくおのずから調和的響きが生じるのです、なぜなら、そこでは真理が探求され、しかも真理は私たち独自の基盤に立って探究されるからです。

さて今や、バガヴァッド・ギーターにおいて、まさに特徴づけしたばかりの三つの精神潮流のいわば詩的な称揚が私たちに姿を現します。世界史の重要な瞬間においてーーその古代にとって重要なのですがーー、私たちにもたらされるのは、クリシュナ自らがアルジュナに伝える偉大な教えです。この瞬間は重要です、それは古い血の絆[Blutbande]がゆるんでくる瞬間だからです。皆さんは、バガヴァッド・ギーターに関してこの連続講義で私がお語ししようとするすべてにおいて、いつもいつも強調されていたことを思い出してくださらなくてはなりません、つまり、血の絆、民族の連帯、種族の連帯が、太古の時代において特別な意味を持っていたこと、そして次第次第にその意味が弱まっていったことを。私の著書『血はまったく特別の液汁（ジュース）だ』（☆28）で語られているすべてのことを思い出してください。

この血の絆がゆるむとき、まさにこのゆるむことによって、バガヴァッド・ギーターをその一挿話として含んでいるマハーバーラタのなかで私たちに描写されるような大きな闘いが起こります。私たちはここに、二人の兄弟の後裔、つまりまだ血縁者である者たちが、その精神の方向性に関して互いに分かたれ、以前は血が統一的な見解としてもたらしていたものが解消するありさまを見ます、そしてこの境目において闘いが起きなければならないがゆえに、ここで闘いが起こるのです、このとき血の絆は、霊視的な認識に対しても意味を失い、これを境として、後の霊的な編成が起こります。古い血の絆に意味を見出さないひとたちにとって、クリシュナは偉大な教師として登場します。クリシュナは、古い血の絆から抜け出した新しい時代の教師でなければなりません。クリシュナがいかにして教師となるか、私たちは明日特徴づけていきます。けれども、バガヴァッド・ギーター全体が私たちに示していること、つまりクリシュナが今特徴づけしました三つの精神潮流をその教えのなかにいかに取り入れているかは、お話しすることができます。有機的な統一のなかでクリシュナはこれを弟子に伝えます。

この弟子は私たちの前にどのように立たなければならないでしょうか。彼は一方では父を見上げ、他方では父の兄弟を見上げます。従兄弟同士は今や、もはや親密であるわけにはいかず、互いに分離しなければなりません。今や別の精神潮流が、一方のそしてもう一方の家系をとらえなければなりません。このときアルジュナのなかで魂が大きく揺れます、血の絆を通じて保たれていたものがもはやなくなると、どうなるのだろう？この精神（霊）生活がもはや以前のように、古い血の絆の影響のもとに流れていくことができないなら、魂をどうやって精神（霊）生活のなかに据えるというのだろう？すべてが破壊してしまうほかない、アルジュナにはそう思われます。そして事態は変わっていかなければならないということ、事態はそのままではないということ、これが偉大なクリシュナー教理の内容です。

さて、クリシュナは、ある時代から別の時代へと生きていくべき弟子に、魂を調和的にしようとすれば、魂はこれら三つの精神潮流のすべてから何かを受け容れなければならないことを示します。私たちはクリシュナの教えのなかに、ヴェーダ的一元説と同様、サーンキヤ論の本質的なもの、ヨーガの本質的なものをも正しいしかたで見出します。と申しますのも、私たちがここでさらにバガヴァッド・ギーターについて知るであろうすべての背後にあるのは、そもそも何なのでしょう。その背後にあるのはたとえばこのよ

うなクリシュナの告知です。いかにも、創造の原理そのものを内包する創造的な宇宙言語がある。人間が語るとき、その音が空気を貫いて波打ち揺れ活動するように、そのようにあらゆる事物は波打ち揺れ活動し、存在を生み出し秩序づける。このようにヴェーダ原理はあらゆる事物に吹き渡っている。それはこのように人間の認識によって人間の魂生活のなかに受け容れなければならない。働きかけ活動する創造の言葉があり、働きかけ活動する創造の言葉がヴェーダ古文献に再現されている。言葉は宇宙を創造するものである、ヴェーダのなかにはこの言葉が顕現している。これがクリシュナー教理の第一の部分です。

そして人間の魂は、この言葉がいかに存在の形態のなかで生を全うするかを理解することができます。存在の個々の形態が法則にのっとって霊的ー魂的なものを表現しているのを、人間の認識が理解することによって、人間の認識は存在の法則を知るようになります。宇宙の形態についての、存在の法則的な形成についての、宇宙法則[Weltengesetz]とその作用のしかたについての教理、これが、サーンキヤ哲学であり、クリシュナー教理の別の一面です。そして、クリシュナが彼の弟子に、あらゆる存在の背後には創造的な宇宙言語があることをはっきりと理解させるように、クリシュナはまた、人間の認識が個々の形態を認識できること、つまり宇宙法則を自らのうちに受け容れることができることを、弟子に理解させます。ヴェーダのなかに、サーンキヤのなかに再現された宇宙言語、宇宙法則、これをクリシュナは弟子に啓示します。

さらにクリシュナは、再びそこで宇宙言語の認識に加わることができるよう弟子のひとりひとりを高みへと導く道についても語ります。つまりヨーガについてもクリシュナは語るのです。クリシュナの教えは三重になっています、つまりそれは、言葉についての、法則についての、霊への敬虔な帰依についての教えなのです。

言葉、法則、および三昧、これらは魂がそれによって進化を遂げていくことのできる三つの流れです。この三つの流れは、常に何らかのしかたで人間の魂に作用します。とはいえ私たちがまさに今見てまいりましたのは、新たな精神科学は新しく刻印づけられたしかたでこの三つの流れを求めなければならないということでした。けれども時代が異れば、三つに形成された宇宙観であるものも、きわめて異なったしかたで人間の魂にもたらされます。クリシュナは、宇宙言語、創造する言葉について、存在の形成について、魂の三昧による深化、ヨーガについて語るのです。

この三つのものが、別の形をとって再び私たちに姿を見せます、ただ、いっそう具体的な、いっそう生き生きとしたしかたで現れるのです、創造する神的な言葉が受肉し、地上を巡り歩くと考えられた存在のなかに。ヴェーダは、抽象的に人類にもたらされました。ヨハネ福音書が私たちに語る神的ロゴスは、生きている創造の言葉そのものです！そしてサーンキヤ哲学において宇宙の形態の法則的な把握として私たちに現れてくるものは、歴史的なものに置き換えられ、古代ヘブライの啓示においてそれは、パウロが律法[Gesetz]と呼ぶものです。そして第三のものが、パウロの場合復活したキリストへの信仰として私たちに現れます。クリシュナにおいてヨーガであるものが、パウロにおいては、律法に変わるべき信仰なのです、ただし具体的なものに移行した信仰です。

このように、このヴェーダ、サーンキヤ、ヨーガという三つ組は、のちに太陽として登って来るものの曙光のようなものです。ヴェーダは再び、キリストの直接的存在そのもののなかに姿を現します、今度は具体的に生きて歴史の展開のなかに現れるのです、空間と時間のかなたに抽象的に自らを注ぎ出すのではなく、ひとつの個として、生きた言葉として。法則は、サーンキヤ哲学において、マテリアルな基礎、実在的なものがどのように粗雑な物質へと下降して形成されていくかを私たちに示すもののなかに現れてきます。これは、古代ヘブライの律法論のなかに、モーゼの教え（ユダヤ教[Mosaismus]）であるものすべてのなかに姿を見せます。パウロが一方においてこの古代ヘブライの律法を指す場合、パウロはサーンキヤ哲学を指しているのです。パウロが復活した者への信仰を示す場合、彼は、ヨーガのなかにその曙光が輝いていた者の太陽を示すのです。

ヴェーダ、サーンキヤ、ヨーガとして第一の要素のなかで私たちに現れてくるものは、このように独特なしかたで成立します。ヴェーダとして私たちに現れてくるものは、新しい、しかし今や具体的な姿をとって、生きた言葉として現れます、それによってすべてが創造され、それなしには生成したものから何ものも創造されず、しかも時の流れとともに肉となった生きた言葉として。サーンキヤは歴史的記述として、エロヒムの世界からいかにして現象界が、粗雑な物質性の世界が生成したかということを法則的に記述す

るものとして現れます。ヨーガはパウロにおいて、「私ではなく、私のなかのキリスト」（☆29）という言葉となったものに変化します、すなわち、キリストの力[Christus-Kraft]が魂を貫き、受け容れるとき、人間は神性の高みへと上昇する、ということです。

このように、世界史における統一的なプランが存在し、東洋的なものが準備を整え、パウロ的キリスト教のなかでこれほど注目すべき具体的な形をとって私たちに現れてくるものは、いわば抽象的な形をとって存在している、ということがわかります。私たちはさらに見ていきますが、まさにバガヴァッドギーターという偉大な詩篇とパウロ書簡との関係を把握することによって、極めて深遠な秘密、人類の全体教育における霊性の支配と名づけうるものの秘密が私たちに明かされることでしょう。このような新しいものを近代において感じ取らなければならないがゆえに、近代は単なるギリシア精神（グリーヒェントゥム）を越えて、紀元前の最初の千年より前にあるもの、私たちにヴェーダ、サーンキヤ、ヨーガとして現れてくるものに対する理解を育てなければなりませんでした。そして、ラファエロが芸術において、トマス・アクィナスが哲学において、ギリシア精神に立ち戻らなければならなかったように、この私たちの時代においては、現代が達成しようとするものと、ギリシア精神よりさらに遡るもの、東洋古代の深みにまで入り込んでいくものとの間に、意識的な宥和が生まれなければならないことがわかるでしょう。私たちがあのさまざまな精神潮流をすばらしい調和的統一のなかに見るとき、私たちは、これら東洋古代の深みを残らず私たちの魂に近づけることができます、素晴らしい統一のなかでそれらは私たちに姿を現します、フンボルトが言いますように、最も偉大な哲学的詩篇、バガヴァッド・ギーターにおいて。

□編者註

☆１　偉大な東洋の詩篇バガヴァッド・ギーター：「崇高な歌」ーー偉大なインドの民衆叙事詩「マハーバーラタ」の第六巻（ビーシュマの巻）のなかに挿入された18章の詩篇で、後代においてその意義はヴェーダに匹敵するとみなされた。マハーバーラタの規模はイーリアスとオデュッセイアを併せたものの約七倍。

☆２　バーゼル及びミュンヘンでの連続講演：ルドルフ・シュタイナー「マルコ福音書」（1912バーゼル GA139)及び「イニシエーションについて。永遠と瞬間について。霊の光と生の闇」（1912　ミュンヘン GA138）

☆３　ソクラテス：Sokrates von Athen　紀元前496ー399

☆４　ペリクレス：Perikles　紀元前500頃ー429　アテネの政治家。

☆５　フェイディアス：Phidias　紀元前500頃ー423　アテネの有名な彫刻家。

☆６　プラトン：Plato von Athen　紀元前427ー347

☆７　アリストテレス：Aristoteles von Stageira　紀元前384ー322

☆８　アイスキュロス：Aischylos von Eleusis　紀元前525頃ー456　悲劇作家。

☆９　ソフォクレス：Sophokles von Kolonos　紀元前496ー406　悲劇作家。

☆10　エウリピデス：Euripides von Salamis　紀元前480頃ー406　悲劇作家。

☆11　ヘラクレイトス：Heraklit von Ephesos　紀元前540頃ー480　哲学者。

☆12　私の『神秘的事実としてのキリスト教』という書物：『神秘的事実としてのキリスト教と古代密儀』（1902　GA8)

☆13　ラファエロ：Raffaello Santi　1483ー1520

☆14　ミケランジェロ：Michelangelo Buonarroti　1475ー1564

☆15　レオナルド：Leonardo da Vinchi　1452ー1519

☆16　トマス・アクィナス：Thomas von Aquino　1227ー1274
　　ルドルフ・シュタイナー「トマス・アクィナスの哲学」（1920　ドルナハ　３回の講義　GA74）参照。

☆17　ジョルダーノ・ブルーノ：Giordano Bruno　1548ー1600

☆18　ガリレイ：Galileo Galilei　1564ー1642

☆19　…という名言：ヴィルヘルム・フォン・フンボルトWilhelm von Humboldt（1767ー1835）1823年6月21日のシュレーゲル宛の手紙及び1828年3月1日ゲンツ宛の手紙。

☆20　ヴェーダ：Vedaすなわち聖なる「知識」は、サンスクリット語で著された、ヒンドゥー最古の宗教的文書の全体を指し、そこにおいてはなお超感覚的な源泉が体験されていた。つまり膨大な文献であり、

その内容（テクスト）はかつては口頭によってのみ伝えられていた。多種多様な伝承は主として、サンヒター[Sanhita]、ブラーフマナ[Brahmana]、アーラヌヤカ[Aranyaka]、ウパニシャッド[Upanishad]に分類される。しばしば、サンヒター（「本集」の意）の四つの部分が簡略に四つのヴェーダとみなされる。これは歌詠、祭詞、呪句の集成であり、これらのうち、もっとも古い歌と讃歌の主集成がリグ・ヴェーダである。
☆21　サーンキヤ哲学：サーンキヤ（数、列挙の意）経典（スートラ）は5世紀になってようやく書き留められたとは言え、この体系の起源は「マハーバーラタ」と同様仏教以前に遡る。その創始者カピーラは紀元前800年から500年の間生きたとされる。
☆22　ヨーガ哲学：ヨーガ（くびき、結びつけることの意）として統一される禁欲と沈潜の道は、すでにヴェーダとマハーバーラタにおいても存在していた。紀元前150年頃、パタンジャリが八段階の道の実修法と伝統をヨーガ・スートラにまとめた。
☆23　ヴェーダンタ：ヴェーダンタ（ヴェーダの目標、終極の意）が最初に表出されたのは、バーダラーヤナ（紀元前200頃）のブラフマ・スートラであり、主にウパニシャッドに基づき、ヴェーダの教理に体系的な構成を与えた。この体系はシャンカラ（788ー820）によって最も重要な註釈を与えられた（第二講の註も参照のこと）。
☆24　ライプニッツ：Gottfried Wilhelm Leibniz　1646ー1716　1714年のフランス語による小論（もとは無題）である『単子論（モナドロジー』を参照のこと。
☆25　サットヴァ、ラジャス、タマス：第２講参照。
☆26　『神秘学概論』：ルドルフ・シュタイナー『神秘学概論』（1910　GA13)
☆27　闇は闇に覆われていた：リグ・ヴェーダX-129. 有名な創世の歌。
☆28　『血はまったく特別の液汁（ジュース）だ』：1906年10月25日の講演に基づく単行本（1982ドルナハ)。「現代における超感覚的なものの認識と今日の生活にとっての意味」（GA55)に所収。
☆29　「私ではなく、私のなかのキリスト」：ガラテア人への手紙II-20.

第２講

１９１２年１２月２９日、ケルン

■概要

・バガヴァッド・ギーターの認識の基礎：
　太古の霊視の名残に浸透されていた前仏教的なインド文化の認識段階
・サーンキヤ哲学と初期神智学運動の用語
・サーンキヤ体系におけるプラクリティ原理：
　形態（＝霊的ー魂的なものがまとう覆い）の原理の展開
・アハムカーラとマナス：統一的内感覚としてのマナスから個々の感覚の基礎が生じる
・プルシャ（＝個々の魂モナド）は個々の形態（＝プラクリティ、覆い）のなかに下降展開していき、
　それを克服しつつまた上昇し、純粋なプルシャとなるためにプラクリティから解き放たれる
・魂的なもの（プルシャ）と覆い原理（プラクリティ）との関係：
　三つのグナ、サットヴァ、ラジャス、タマス
・アリストテレスにおけるサーンキヤ体系の名残り
・ゲーテによるサーンキヤーアリストテレス的色彩論の新たな復興
・外的形態の原理と形態と魂の関係のみに向かう科学としてのサーンキヤ哲学、
　霊的高みへの魂の進化のための指針としてのヨーガ
・ヨーガの帰依の行は外的形態の根底にある霊的なものへと導く
・血によって人間の本性に霊視的な力が結びついていた時代から
　血縁に支配されない時代への移行、この移行期における指針としてのバガヴァッド・ギーター
・バガヴァッド・ギーターにおけるクリシュナのアルジュナへ教示：
　血縁を抜け出した時代への新たな教示が単に理念的にではなく
　直接心情のなかに働きかけるように語られる

インド人の崇高な歌であるバガヴァッド・ギーター、これはーーすでに昨日申し上げましたようにーーしかるべき人物たちに、人類の最も重要な哲学的詩篇と呼ばれました。崇高なギーターに沈潜するひとは、この呼びかたにまったく異存はないでしょう。この連続講義にあたって私たちは、ギーターの高度に芸術的な美点についてさらに指摘することができるでしょう、けれどもまずさしあたっては、その根底にあるもの、力強い思考、この詩篇を育てた力強い宇宙認識、まさにこれを讃え、広めるためにこの詩篇は生み出されたのですが、この宇宙認識に注目することによって、この詩篇の意義が私たちの眼前に見えてくるようにしなければなりません。

ギーターの認識の基礎となっているものにこのように眼差しを向けることがとくに重要なのは、実際この歌の本質のすべて、とりわけ思考内容、認識内容に関するすべてが、前仏教的[vorbuddhistisch]な認識段階を私たちに伝えるからです、すなわち、私たちはこう言うことができます、偉大なブッダを取り巻きブッダを育てた霊的地平、この霊的地平の特性がギーターの内容を通して私たちに示される、と。ーーつまりギーターの内容を私たちに作用させるとき、私たちは前仏教的な時代の古代インド文化の霊的組成を覗きこむのです。

すでに強調したことですが、この思考内容は三つの精神（霊）潮流の合流であり、有機的なもの、生きたものとして、これら三つの精神潮流を単に互いに溶け合わせただけではなく、生き生きと互いのうちに織り込まれたもので、したがってこれら三つの精神潮流はギーターからひとつの全体として私たちに現れてきます。ここでひとつの全体として、太古のインドの思考と認識の霊的流出として現れてくるもの、これは、偉大なすばらしい智の立場であり、スピリチュアルな智の巨大な総和です、まだ精神科学（霊学）に近づいていない現代の人間は、こういう智の深み、認識の深みに対する何らかの観点を獲得する可能性がないゆえに、こういう智の深み、認識の深みに疑いの目を向けるしかないのですが。と申しますのも、

通常の現代の手段をもってしては、ここで伝えられているあの智の深みのなかに入り込んで行けないからです。せいぜいのところ、ここで語られていることすべてを、かつて人類が夢見た美しい夢とみなすことができるくらいです。単なる現代的見地からこの夢を賛美することはできるかもしれませんが、この夢にとりたてて認識価値が置かれることはないでしょう。けれども精神科学を自らのうちに取り入れたなら、ギーターの深みを前に驚きつつたたずみ、こう言わざるをえないでしょう、太古の時代、人間の精神（霊）は、私たちがスピリチュアルな認識方法を徐々に制覇していってやっとまた獲得できる認識に浸透されていたのだ、と。こうして、過ぎ去った時代に現にあったこの太古の洞察への賛嘆の念が生じます。この洞察を宇宙内容そのものから再び見出すことができ、そうしてその真実さを確認することができるがゆえに、私たちはそれを賛美することができるのです。私たちはこれを再び見出し、その真実を認識しつつ、こう言うのです、いやはや驚くべきことだ、あのような太古の時代に人間がこれほどの霊の高みに飛躍することができたとは！

さて、とはいえ私たちは、あのいにしえの時代において人類はとりわけ、太古の霊視の名残がまだ人間の魂のなかに生きていたことによって恩恵を受けていたことを知っています、しかも特別な、修行によって達成されたスピリチュアルな沈潜のみが霊界へと通じていたのではなく、あの古い時代の科学そのものも、古い霊視の名残が理念、認識のかたちで生み出したものになおもある種のしかたで浸透され得た、という恩恵を受けていたのです。

私たちは自らにこう言い聞かせなければなりません、私たちが今日、私たちに伝えられることの正しさを知るのは、まったく別の理由からだ、と。私たちは、あのいにしえの時代においては人間の本質に関する精緻な区分が、別の手段で獲得されたことを理解しなければなりません、人間が知ることができるものから、精緻で鋭い概念が取り出されたのです、鋭い輪郭を持ち、霊的現実にも外的感覚的現実にも精確に適用できる概念がです。こうして、場合によっては、今日私たちが変化した立場に対して用いている表現を変化させるだけで、あのいにしえの時代の立場をも理解できる可能性が出てきます。

私たちは、神智学的智の営みにおいて、次のように物事を示そうと試みてきました、現代の霊視的認識に明らかになるように、すなわち、霊人[Geistesmensch]がまさに今日、霊人自身の、霊人によって獲得されるべき手段で達成することができるものを、この精神科学の方法が示すようにです。神智学の告知の初期においては、このように隠された学から直接取り出された手段をもって行われることは稀であり、東洋において通常用いられている名称、概念ニュアンス、とりわけ東洋においてギーター時代からこの現代まで長い伝統を経て植え付けられてきた名称、概念ニュアンスが用いられました。したがって、神智学の展開のより古い形では、私たちはこれに現代の秘学的研究を付け加えなければならないのですが、この古い形においては、伝統として守られてきた古い概念、とりわけサーンキヤ哲学のそれの方がよく用いらていたわけです。ただ、東洋においてさえこのサーンキヤ哲学が次第に別種の東洋思想によって変形されていったように、神智学の告知の初期においても、人間の本質について、その他の秘密についてそのように語られました。物事はとりわけ、ヴェーダの智とその他のインドの智の八世紀における偉大な改革者、シャンカラチャルヤ（☆１）によって用いられた表現によって叙述されたのです。

神智学運動の始まりにおいて、どのような表現が選ばれたかについてはあまりかまわず、ギーターの智および認識の基礎を得るために、きょうはむしろ太古のインドの叡智の宝とは何かということに注目してみることにいたしましょう。すると、いわばこのいにしえの時代の科学そのものを通じて得られるもの、とりわけサーンキヤ哲学を通じて獲得されるものがまず私たちに現れてきます。

サーンキヤ哲学が人間の本性と性質をどのように観ていたかについて、最もよく理解できるのは、私たちがまず最初に次のような事実を目の前に置いてみるときでしょう、つまり、人間の全存在の根底には霊的な核心[Wesenskern]がある、という事実です、この核心を私たちはいつもこう言って魂の前に導き出しました、人間の魂のなかにはまどろんでいる力がある、未来の人類進化に伴ってますますはっきりと現れてくる力がある、と。

私たちがまず最初に仰ぎ見ることができ、人間の魂が連れていかれるであろう最高のものは、私たちが霊人と名づけるものでしょう。いつか人間が存在として霊人の段階まで上昇したときも、人間は自分のなかに魂として生きているものを、霊人そのものからなおも常に区別することができるでしょう、ちょうど今日私たちが日常生活において、私たちの最奥部の魂的核心と、この核心を覆うもの、つまりアストラル体、エーテルあるいは生命体、及び物質体（☆２）とを区別することができるように。そして私たちが、

この後の方の体を覆いとみなし、これらを本来の魂的なもの、私たちが今日の人類周期において、感受魂、悟性あるいは心情魂、意識魂という三つに分けているものから区別しているように、このように魂的なものを覆いのシステムから区別しているように、将来、本来の魂的なもの、これは未来の段階において現在の感受魂、悟性魂、意識魂に対応するふさわしい区分が与えられるでしょうが、この魂的なものと、私たちの言葉で霊人と呼ぶことのできる段階に達した覆いの性質とを考慮することができるでしょう。未来においていわば人間の霊的ー魂的核心を包む覆いとなるもの、つまり霊人は、なるほど将来はじめて人間にとっていわば有意義なものでしょう、けれども、広大な宇宙においては、ある存在がそれを目指して進化していくものは常にそこにあるのです。私たちがいつの日か自らを包むことになるであろう霊人の実質[Substanz]、これはいわば、大いなる宇宙のなかに常に在ったのであり、現に今も存るのです。私たちは、ほかの存在たちは、いつか私たちの霊人が形成するであろう覆いを今日すでに有している、と言うことができます。つまり宇宙には、いつの日か霊人が生じてくるであろう実質が現にあるのです。

私たちの学説の意味で語りうることは、すでに古代のサーンキヤ説において語られています。このようにまだひとつひとつ分かたれず、いわばひとつの霊的水流のように分化されないままに時空を満たしつつ宇宙に存在するもの、かつてこのように存在し今このように存在しこれからもこのように存在するであろうもの、あらゆる形成を引き起こすもの、これをまさしくサーンキヤ哲学は実質の最高の形態（フォルム）と呼びました。これは、サーンキヤ哲学において永遠から永遠へとみなされるあの実質の形態です。そして私たちがたとえばこう語るようにーー私がかつてミュンヒェンで創世記の精神科学的根拠づけについて行いました連続講義（☆３）のことをここで考えてみてくださいーー、地球進化の出発点において、地球進化となったものはすべて、霊存在として霊のなかにまだ実質としてに存在していたということについて語るように、このようにサーンキヤ哲学はその原質[Ursubstanz]について、その源流[Urflut]について語ってきた、と言うことができるでしょう、他のあらゆる形態が、形而下的にも、形而上的にもそこから展開してきた源流についてです。今日の人間には、この最高の形態はまだ考慮されるに至っておりませんが、今議論いたしましたように、将来考慮されることでしょう。

この実質の源流から展開してくる次の形態として、私たちが人間の上から二番目の構成部分として知っているものを見なくてはなりません、私たちが生命霊と呼んでいるもの、あるいは東洋的な言い方でブッディと呼ぶことができるものです。ご存じのように私たちの学説でも、人間は通常の生においては未来においてはじめてこのブッディを発達させるだろうとされています。しかしブッディは霊的な形態原理として、他の存在たちにおいては超人間的にいつも存在していたのであり、存在していたがゆえに、これは最初の形態として根源的な源流から分化されてきたのです。サーンキヤ哲学の意味において、実質的現存の、魂の外部にある現存の最初の形態から、ブッディが生じるのです。

私たちがこの実質の原理のさらなる進化に注目するなら、第三の形態として、サーンキヤ哲学の意味でアハムカーラ[Ahamkara]と呼ばれるものが登場してきます。ブッディがいわば分化原理の境界に位置して、ある種の個別化を最初に暗示しているのに対し、アハムカーラという形態はすでに完全に個別化されて現れてくるので、私たちがアハムカーラについて語るなら、私たちはいわばこう想定しなければなりません、ブッディは独立した、本質的な実質的な形態、それゆえ世界のなかで個別的に存在する形態へと下降しつつ作り上げられる、と。この進化について私たちがイメージを得たいなら、実質的源流として均等に分散されていた水が、次いで沸き立ち、個々の、完全な水滴にまでは分離されない形態を形作る、共通の実質から小さな波頭（水の山）のように少し隆起しているけれども、その底の部分は源流の内部で共通しているような形態を形成する、というふうな想定をしなくてはならないでしょう。これがブッディと言えます。さらにこの波頭が水滴へと、独立した球体へと分かたれると、アハムカーラという形態となります。このアハムカーラ、つまりすでに個別化された形態、一つ一つの魂形態がある種の濃密化をすることで、マナスと呼ばれるものが生じます。

ここで私たちは、私たちの名称に対してある種の、もしかしたら不均衡と呼ばれるべき問題が生じてくる、と言わなければなりません。私たちの学説に従って人間の進化を上から下へと辿りますと、私たちは生命霊あるいはブッディのあとに霊自己(ガイストゼルプスト[Geistselbst]）を置きます。この命名は、今日の人類周期にとってはまったく当を得たもので、この連続講義を進めていくなかでなぜこれが正当なのかさらに見ていきましょう。私たちは、ブッディとマナスの間にアハムカーラを入れるのではなく、私たちの概念ではアハムカーラとマナスを一致させ、これを一緒に霊自己と呼びます。あのいにしえの時代にあ

ってはこれらを分けるのはまったく当を得たことでした、その理由を今日は暗示するだけにしておきますが、後日さらにお話しいたします。[アハムカーラとマナスを]分けることが正しかったのは、今のこの時代に理解できるように語ろうとすれば、今日私たちが与えなければならないあの重要な特徴づけ、一方ではルツィファー原理の影響、他方ではアーリマン原理の影響から来る特徴づけを、当時はまだ与えることができなかったためです。この特徴づけがサーンキヤ哲学にはまったくもって欠けていました。この両原理を眺めることに至らなかった構成にとっては、ブッディとマナスの間に、この個別化する形態を加えることはまったく正しかったのです。つまり私たちがサーンキヤ哲学の意味でマナスについて語るなら、私たちは、シャンカラチャルヤの意味でマナスとして語られるものと厳密に同じものについて語っているわけではありません。シャンカラチャルヤの意味ではマナスとガイストゼルプストをまったく同一とすることができますが、厳密にサーンキヤ哲学の意味ではそうできないのです。けれども私たちは、サーンキヤ哲学の意味で本来マナスとは何なのかを厳密に特徴づけることができます。

ここで私たちは初めて、人間がいかに感覚世界に、物質的生存に生きているかということを出発点とします。物質的生存において人間はまず、その感覚で環境を知覚し、その触覚器官、手足により、つかみ、歩き、さらには話すことを通して逆にこの物質的環境に働きかけます。人間はその感覚を通じて環境を知覚し、物質的な意味で触覚器官を通じて環境に働きかけるのです。サーンキヤ哲学の意味でこれもまったくそのように語られています。けれども人間はどのようにして感覚によって環境を知覚するのでしょうか。さて、私たちは眼で光と色を、明るさと闇を見、物の形も見ます。私たちは耳で音を知覚し、臭覚器官で匂いを、味覚器官で味の印象を感じ取ります。どの感覚もそれぞれ、外界のある特定の領域を知覚します、視覚は色彩と光を、聴覚は音を、などなど。私たちは、私たちが感覚と呼ぶこのこの存在の門を通して環境と関わり、私たちを環境へと開きます、けれども個々の感覚を通じて私たちが接近するのは環境のまったく特定の領域なのですが。

さて、私たちの日常言語からしてもう、私たちが内部に、感覚が志向するこれらさまざまな領域を統合する何かを原理として持っていることを示してくれます。私たちはたとえば、暖色と寒色について語ります、これはさしあたり私たちの状況にとって単に比喩的なものにすぎない、私たちはやはり感情の感覚を通して冷たさと暖かさを、視覚を通して色彩を、明るさと闇を知覚するのだ、と感じるにしてもです。つまり私たちは、暖色と寒色について語り、私たちが感じるある種の内的な親和性から、ある感覚が知覚するものを、別のものに適用するのです。私たちがこのように表現するのは、私たちの内部で、ある種の視覚が、私たちの熱感覚によって知覚されるものと溶け合っているからです。繊細に感じ取る人々、鋭敏な人々は、ある種の音を聞いて、ある種の色彩を内的に思い浮かべさせられるように感じることができます、ですから、彼らのなかに赤の色彩表象を呼び起こすある音について、あるいは彼らのなかに青の色彩表象を呼び起こす別の音について語ることができるのです。つまりわたしたちの内部には、個々の感覚領域を統合する何か、魂にとってのひとつの全体を個々の感覚領域から形成する何かが生きているのです。

鋭敏であればさらに進むこともできます。たとえば、ある町に行くと、この町は私には黄色い町という印象だ、と言い、また別の町に行くと、この町は赤い町という印象だ、また別の町は白、あるいは青、と言う、こういうふうに感じる人々がいるのです。私たちは、私たちに働きかけるものの総計を私たちの内部で色彩表象に置き変えます、私たちは個々の感覚印象を私たちの内部でひとつの全体感覚[Gesamtsinn]と統合します、感覚領域ひとつひとつに向けられるのではなく、私たちの内部に生き、私たちが感覚印象のひとつひとつを加工することにより、ひとつの統一的知覚で満たすように私たちを満たす、そういう全体感覚と統合するのです。私たちはこれを内感覚と呼ぶことができます。私たちが通常、苦しみと喜び、激情と情動において単に内的に体験するものすべてをも、この内感覚が与えてくれるものと一緒にすることができるので、私たちはそれだけいっそうこれを内感覚と呼ぶことができるのです。私たちはある激情を暗く冷たい激情と呼ぶことができ、また別のそれを暖かい、光に満ちた、明るい激情と呼ぶことができます。

つまり私たちの内部は、内感覚を形成するものに作用を返している、私たちはこう言うこともできます。私たちが外界の個々の領域へと向ける多くの感覚に対して、私たちの魂を満たすこのようなひとつの感覚について語ることができます、これについて私たちは、この感覚は個々の感覚器官とは関係ない、私たちの人間存在全体がその道具として用いられるのだ、ということを知っています。この内感覚をマナスと呼ぶことはまったくサーンキヤ哲学の意味においてです。この内感覚を実質として形作るもの、これは、サ

ーンキヤ哲学の意味において、後の形態所産としてアハムカーラから展開してくるものです。したがって私たちはこう言うことができます、最初に源流、次いでブッディ、次いでアハムカーラ、次いで、私たちの内部に内感覚として見出されるマナス、と。この内感覚を観察したいと思うとき、私たちは個々の感覚を取り上げ、個々の感覚による知覚が内感覚のなかで互いにつなぎ合わされているということによってどのような想定ができるかいわば確かめてみるということによって、この内感覚を今日私たちは明確に理解します。今日私たちがそうするのは、認識の方向が逆転しているからです。私たちの認識の展開を眺めるとき、それは個々の感覚の差異から出発し、共通感覚へと上昇することを目指す、と言わざるを得ません。けれども展開は逆なのです。宇宙生成においてまずアハムカーラからマナスが展開し、次いで原物質[Ursubstanzen]が、私たちの内部に感覚として備わっている個々の感覚を形成する力が分化しました、ただしこれは物質的感覚器官ーーこれは物質体の一部ですがーーのことではなく、まったくもって超感覚的な形成力[Bildekraefte]として根底にある力のことですが。つまり私たちが展開形態の階梯を降りていきますと、私たちはサーンキヤ哲学の意味で、アハムカーラからマナスへと至り、そしてマナスが個々の形態に分化して、私たちの個々の感覚を構成する超感覚的力を生み出すのです。

このように、私たちが個々の感覚を見るとき、魂がこれらの諸感覚に参加するので、サーンキヤ哲学が今与えてくれるものを、私たちの学説の内容でもあるものに対比することが可能です。と申しますのも、サーンキヤ哲学は次のように語るからです、マナスが諸感覚の個々の宇宙力へと分化しうることで、魂はこれら個々の形態に沈潜するーー私たちが知っていますとおり、魂はこれらの形態から区別されますーー、けれども、魂がマナスのなかへと沈潜するように、魂がこれらの個々の形態のなかへと沈潜することで、魂的なものは、これらの感覚力を通じて作用し、これらの感覚力と編み合わされ織り合わされる。そうすることによって魂的なものは、その霊的ー魂的な本質から外界との結び付きを得、外界を好むことができるようになり、外界に喜び、共感を感じることができるようになる。

つまりたとえば、眼を構成する力実質はマナスから分化したのです。以前の段階においては、つまり人間の物質体がまだ今日のような形態をとっていなかった頃ーーサーンキヤ哲学はこのように表象しますーーには、魂はまさに、眼を構成する単なる力のなかに沈潜していました。私たちが知っていますように、今日の人間の眼は、なるほど土星段階においてもうその素地を与えられてはおりましたが、今日松果腺のなかに萎縮して私たちの前に姿を見せている熱器官が後退したあとにようやく、つまり比較的後になってから発達しました。これを発達させた力は、超感覚的にはすでに存在していたのであり、魂はそのなかに生きていたのです。サーンキヤ哲学はさらに語りますーー魂がこれらの分化原理のなかに生きることにより、魂は外界の存在 [Dasein]に愛着し、この存在への渇きを生み出すのだ、と。感覚力を通じて魂は外界と関わりを持ちます。存在への愛着が、存在への欲求が生まれます。魂はいわば、感覚器官を通じてその触覚を送り出し、外的な存在と力的[kraftmaessig]に関わりを持つのです。諸力の総体として、諸力のリアルな総体として捉えられたまさにこの力的な関わりを、私たちは人間のアストラル体のなかで統合します。サーンキヤ哲学は、マナスから分化されてきた個々の感覚力のこの段階における共同作用について語っているのです。

この感覚諸力からさらにまた精妙なエレメントが生じます、人間のエーテル体はこれらから作られていると私たちが考えているものです。これは比較的後になってからの産物です。私たちは人間のなかにこのエーテル体を見出します。

つまり私たちはこのように思い描かなければなりません、展開[Entwickelung]にともなって、源流、ブッディ、アハムカーラ、マナス、感覚実質、精妙なエレメントが形成されてきた、と。外界、自然界にも、これら精妙なエレメントはエーテル体ないし生命体として存在していますね、たとえば植物の場合です。ここで私たちは、サーンキヤ哲学の意味で、この進化[Evolution]全体の根底にあるものは、植物の場合、上から下へと源流から下降してくる展開なのだ、というふうに思い描かなければなりません。ただ、植物の場合、このすべてが超感覚的なもののなかで起こり、植物のエーテルないし生命体のなかに生きている精妙なエレメントへと濃密化してはじめて物質界において現実（リアル）となるのですが、他方人間の場合は、現在の進化においてすでに、より高次の形態と原理がマナスから物質的に顕現しています。個々の感覚器官が外的に顕現させられているのですが、植物の場合、あの後になってからの産物が、感覚実質が精妙なエレメントへ、エーテル的なエレメントへと濃密化してはじめて生じます。そして、エーテル的なエレメントがさらに濃密化して、粗雑なエレメントが生じます、物質界で私たちが出会うすべての物質的な

ものはこのエレメントからできています。つまり私たちが下から上へと進むと、サーンキヤ哲学の意味で、人間を次のように分けることができます、粗雑な物質体、精妙なエーテル体、アストラル体ーーこの言い方はサーンキヤ哲学では使われず、代わりに諸感覚を構成する力体という表現がされますがーー、そして内的感覚つまりマナス、そしてアハムカーラ、つまり人間の個の根底にあり、単に人間が個々の感覚領域を知覚する内感覚を持つだけでなく、人間が自らを個別の存在そして、個として感じることができるようにする原理。アハムカーラはこういうことを引き起こすのです。さらに人間のなかに素質として備えられているさらに高次の原理が来ます、ブッディと、通常の東洋哲学でアートマンと呼び慣わされているもの、私たちが特徴づけたように、サーンキヤ哲学により霊的源流として宇宙的なものと考えられているものです。

このようにサーンキヤ哲学においてはいわば、人間の構成が完全に描き出されているのがわかります、この人間が、過去、現在、未来において、魂として実質的な外的自然原理をいかに身にまとうか、その際、自然のもとでは単に外的なもの、可視的なもののみではなく、不可視のものに至るまで自然のあらゆる段階が理解されていたのですが、そのようすが描き出されているのがわかるのです。このようにサーンキヤ哲学は私たちが今述べました諸形態を区別します。

そして、形態あるいはプラクリティのなかに、つまりあらゆる形態を粗雑な物質体から上は源流にいたるまで包括するこのプラクリティのなかに、プルシャ[Purusha]が、霊的ー魂的なものが生きています、ただしこの霊的ー魂的なものは個々の魂のなかにモナド的に表わされるので、個々の魂モナドは、この物質的（マテリアルな）原理であるプラクリティーー物質的というのは今日の唯物論的な意味ではありませんがーーが始めもなく終わりもないと考えられるのと同様に、いわば始めもなければ終わりもないものと考えられます。この哲学はつまり、魂の多元論[Pluralismus]を表象しています、魂がプラクリティ原理のなかへと沈んでいき、魂が包まれていた最高の、分割できない源流の形態から、粗雑な物質体への受肉へと下降展開していき、それからまた逆行を始め、粗雑な物質体を克服したのち再び上昇発展していって、再び源流へと帰還し、自由な魂として純粋なプルシャへと入っていくためにこの源流からも自らを解き放つ、そういう魂の多元論です。

私たちがこのような認識を私たちに作用させますと、いわばこの太古の叡智の根底にあるものは、私たちの魂的な沈潜が与えてくれる手段によって私たちが今日ふたたび獲得するものだということがわかります。さらにサーンキヤ哲学の意味で、この形態原理のそれぞれと魂がいかに結び付けられうるか、そのしかたへの洞察も存在していることがわかります。魂はたとえば、魂がいわばその完全な独立性をブッディの内部でできるかぎり保つ、つまり、ブッディではなく、魂的なものが優勢に働く、というふうにブッディと結びつくことができます。逆の場合もあり得ます。魂がいわば眠りのようなしかたで、なげやりで怠惰にその独立性を覆うこともあります、すると、覆いの性質が全面に出てきます。これは、粗雑な物質から出来ている外部の物質的自然においても当てはまることです。私たちはここで人間を観察してみさえすればよいのです。もっぱら魂的ー霊的なものが表面に出ていて、そのため粗雑な物質体を通じて伝えられるあらゆる動き、あらゆる身振り、あらゆる眼差しが、霊的ー魂的なものがそこに現れているという事実に対して後退している、そういう人がいます。私たちの前にひとりの人間がいて、彼の粗雑な物質体が私たちの前に立っているのを見ます、その人の動き、身振り、眼差しのなかで何かが私たちに示され、私たちはこう言うのです、この人は、まったく霊的ー魂的であり、彼は物質的原理を、この霊的ー魂的なものがそこで生きるためにのみ用いる、と。物質的原理は彼をうち負かすことはなく、彼はいたるところで物質的原理に対する勝利者なのです。

魂が外的な覆いの原理[Huellenprinzip]をうち負かしているこの状態はサットヴァ状態です。このサットヴァ状態については、魂のブッディ及びマナスに対する関係の場合にも、精妙なエレメントと粗雑なエレメントから成る体に対する魂の関係の場合にも、語ることができます。と申しますのも、魂がサットヴァのなかに生きている、と言うとき、これは魂の、魂を覆うものに対するある特定の関係、当の存在における霊的原理の自然原理に対する関係、プルシャ原理のプラクリティ原理に対する関係のことを意味しているに他ならないからです。

けれども私たちはまた、粗雑な物質体にまったくうち負かされているひとーーと言っても今このことに道徳的な性質を付与する必要はありません、サーンキヤ哲学の意味における純粋な特徴づけであって、私たちの霊眼の前に現れるにしても、何らかの道徳的性格づけということではありませんーーを見ることも

できます、いわば自分の物質体の重みの下に歩き、肉をたくさん付け、あらゆる身振りに物質体の物質的重みがかかっていて、魂的なものを外的物質体のなかに表現したくてもなすすべを知らない、そういう人が私たちの前に登場することもあるのです。

魂が語るとおりに私たちが顔の筋肉を動かすとき、サットヴァ原理が支配します。顔の脂肪の塊が私たちに特定の相貌を刻むとき、魂的原理が外的物質的な覆い原理に圧倒され、このとき魂は、自然原理に対するタマスの関係のなかで生きます。そして両者の間で均衡が支配するとき、サットヴァ状態の場合のように魂的なものが優勢なのでもなく、タマス状態の場合のように外的に覆い的なものが優勢なのでもなく、両者が均衡を保っているとき、このときはラジャス状態について語られます。これらはとくに重要な三つのグナ[Guna]です。

つまり私たちは、プラクリティの個々の形態、分けられない原質の最高の原理から、下は粗雑な物質体に至るまでの特徴づけを区別しなければなりません、これはひとつの特徴づけ、覆いの原理のみの特徴づけです。覆いの性質のなかのどんな形態であるかに関係なく、魂的なものの覆いに対する関係を特徴づけるべくサーンキヤ哲学が有しているものを、私たちはこの[覆いの原理の]特徴づけから区別しなければなりません。この特徴づけは、サットヴァ、ラジャス、タマス、という三つの状態によって与えられます。

今、いわばこのような認識が深く入り込んでいくものを正しく目の前に導き出してみましょう、あらゆる存在するもののこのように包括的な特徴づけを与えることができた、あのいにしえの時代の認識、科学が、存在の秘密をいかに深くのぞき込んでいたか、ひとつ見ていこうではありませんか。ここでまさしくあの驚きが私たちの魂に近づいてきます、これについてはもう語られましたが、私たちはこう言うのです、人類の進化史においてもっとも驚嘆すべきことのひとつは、暗い霊の深みから今日精神科学のなかに再び現れてきたものが、すでにあのいにしえの時代に存在していたことだ、と。それは当時別の手段によって達成されたのですが。これらすべては、かつて存在していたひとつの智だったのです。私たちが霊の眼差しを特定の太古の時代に向けるとき、この智が目にとまります。さらに私たちはそれに続く時代に目を向けます。私たちは、古代ギリシア時代においてさまざまな時期の霊内容として通常私たちに紹介されるものを見ます、また、古代ギリシアに続く時代つまりローマ時代において、またキリスト教中世の時代において。私たちは、より古い文化が近代まで与えてきたもの、精神科学が人類の原初の智[Urwissen]に劣らない何かを再びうち立てた時代になるまで与えてきたものを見ます。私たちはこのすべてを見渡し、こう言うことができます、これらの時代にはしばしば、あの原初の智への単なる予感さえもが欠けていた、と。存在のあの壮大な領域の認識に代わって、超感覚的、包括的な古い認識に代わって、単なる外的物質的存在の認識が脚光を浴びるようになってきました。実際のところ、三千年にわたる進化の意味とは、古い原初の智の代わりに、物質的物理的な場の外的な智がますますいっそう場所を占めるようになったということだったのです。

そして、物質的な領域にのみ残っていたということーー皆さんにこう述べることを差し控えたくないと思いますーーギリシアの哲人の時代にもまだ、古いサーンキヤの智の名残りのいくばくかが残っていたということを見るのは興味深いことです。本来の魂的なものに対しては、アリストテレスはなるほどまだいくらかの名残りを有していましたが、その名残りはもはや、完全な明晰さという点で古いサーンキヤの智と一緒に並べることができるものではありません。アリストテレスはそうしばしばこれに言及しませんが、彼においてもまだ、人間の本質の粗雑な物質体への区分（☆４）が見出されます、ただこの区分をする際、アリストテレスは自分は魂的なものを与える、と考えているのですが、サーンキヤ哲学は、これらが覆いにすぎないことを知っています。私たちには、植物の[vegetative]魂が、サーンキヤ哲学の意味での精妙なエレメント体と一致するであろうことがわかります。アリストテレスはこれで何か魂的なものを与えていると考えていますが、単に魂的なものと体的なものとの間の関係、つまりグナの特徴を述べているのであり、特徴づけとして与えられるもののなかに、彼はまさに覆いの形態のみを与えているのです。次いでアリストテレスは、感覚領域のなかにまで延びてくるもの、私たちがアストラル体と呼ぶものに対して、彼が魂的原理として区別する何かを与えます。つまり彼はもはや、魂的なものを、体的なものからはっきりと区別していないのです、彼にとって魂的なものが、すでに体的に形態をとったもののなかに沈み込んでいるからですが、彼はアイステティコン[Aisthetikon]を区別し、さらに魂的なもののなかで、オレクティコン[Orektikon]、キネティコン[Kinetikon]、ディアネティコン[Dianoetikon]を区別します。これらはアリストテレスの意味における魂的な諸段階ですが、アリストテレスにおいてはすでにもはや、魂的なものと覆い的

なものとがはっきりと区別されているとは言えません。アリストテレスは、魂を区分すると信じていますが、他方サーンキヤ哲学は、魂をそれ自身の本質においてまったくモナド的に把握し、魂を細分化するものをすべて、覆い原理のなかへ、プラクリティ原理のなかへ、いわば外部へと移し替えたのです。

つまり魂的なものにおいては、アリストテレスの場合でさえすでにもう、私たちがサーンキヤ哲学のなかに発見するあの太古の学への追想を語ることができるたような状況ではないのです。けれども、物質的（マテリアル）な領域とでもいうものにおいては、アリストテレスはまだ、三つの状態の原理が響いてくるような何かを語るすべを心得ています、彼が色彩における光と闇について語るとき（☆５）がそうです。彼は言います、自身のうちに闇をより多く持つ色彩と、より多く光を持つ色彩と、その中間に位置する色彩がある、と。ーーアリストテレスの意味では、次のように言うときがそうなのです、つまり、青と菫色に向かう色彩の場合、暗さが光を凌（しの）いでいる、そして闇が光を凌ぐということによって、色彩は青及び菫色になる、さらに、両者の間に均衡が保たれていることによって色彩は緑あるいは黄緑色になり、光原理が闇を凌ぐとき、色彩は赤みがかった色あるいはオレンジ色になる、と。

サーンキヤ哲学においては、この三つの状態の原理は宇宙（世界）観を全体的に包括するためのものです、霊的なものが自然的なものより優勢であればサットヴァが得られます。アリストテレスは、色彩について語るときにはまだ、この同じ特徴づけを有しています。彼はこの言葉を用いてはいませんが、こう言うことができるでしょう、赤と黄赤は光のサットヴァ状態を示しーーアリストテレスの場合もはやこの表現法は用いられませんが、彼の場合にはまだ古いサーンキヤ原理が存在しているのですーー、緑は光と闇に関してラジャス状態を示し、闇が優勢である青と菫色は、光と闇に関してタマス状態を示している、と。アリストテレスがこういう表現を用いないとしても、サーンキヤ哲学において宇宙（世界）状態の霊的把握から私たちに姿をみせる思考方法が、まだ入り込んできているように見えます。

つまり、アリストテレスの色彩論のなかに、古いサーンキヤ哲学の余韻がみとめられるのです。けれどもこの余韻は失われてしまいました。そして私たちが、色彩世界の外的領域における、サットヴァ、ラジャス、タマスというこの三つの状態の最初の輝きを体験するのは、ゲーテが行った厳しい闘いにおいてです。と申しますのも、色彩世界をサットヴァ、ラジャス、タマス状態へと区分する古いアリストテレス的分類がまったく埋葬されてしまった後、同じものがふたたびゲーテにおいて現れるからです。今日まだ現代の物理学者たちにはそしりを受けていますが、ゲーテ的色彩論は、まさに霊的叡智の原理から引き出されてくるのです。今日の物理学がこの問題においてゲーテを認めないとしても、その立場からすれば正しいのですが、これは、今日の物理学はこういう事柄においてまさしくすべての良き神々から見捨てられている、ということを示すにすぎません。今日の物理学にとっては当然のことですが、そういうわけで物理学はゲーテの色彩論を罵ることができるのです。

しかし今日の真の科学を隠された（オカルトの）原理と結びつけようとするなら、今日ほかならぬゲーテ的色彩論を支持せざるを得ないでしょう。と申しますのも、ここでふたたび、私たちの科学文化のさなかから、かつてサーンキヤ哲学における霊的原理として優勢であった原理が浮かび上がってくるからです。愛する友人の皆さん、私がなぜたとえば何年も前に、ゲーテ的色彩論の物理学としての真価を、ただしオカルト的原理に基づいた物理学ですが、真価を再び発揮させることを課題としていたか（☆６）、ご理解いただけるでしょう。と申しますのも、ゲーテはサットヴァ、ラジャス、タマスという三つの状態にしたがって描くことで色彩現象を分類する、と、まったく事実に即して言うことができるからです。このように、新たな手段によって研究されて霊の闇から新たな精神史のなかへと出現してくるように、かつて人類にまったく別の手段を通じて獲得されていたものが現れてきます。

このサーンキヤ哲学は、前仏教的なものであり、これは実際ブッダ伝説を手に取るようにありありと私たちの眼前に見せてくれるとでも申し上げたいものです。と申しますのも、インド的教義が、サーンキヤ哲学の祖はカピラだと語るのは正しいからです。ブッダはカピラヴァストゥ（☆７）のカピラの居住地で生まれました、このことはブッダがサーンキヤ学説から育ってくることを示唆しています。ブッダ自身がその誕生を通じて、この偉大なサーンキヤ哲学を初めて集大成した人がかつて影響を与えた場所に置かれたのです。

このサーンキヤ説の、私たちが語ってきました他の精神潮流への関係を思い浮かべてみなければなりません、今日の西洋の東洋学者たちの多くが描いているようにでもなく、イエズス会士ヨーゼフ・ダールマン（☆８）が描いているようにでもなく、これら三つの精神潮流が形成された当時は人類進化の一番最初

の原初状態はもはや存在していなかったために、古代インドのさまざまな分野に異なった人々が生きていたことをです。

そうですね、インドの北東地域においては、人々の性質は、サーンキヤ哲学において与えられているように表現しようとする衝動を感ずる、というようなものでした。そこから西部に行くと、人間の性質は、世界をヴェーダ説の意味で表そうとする衝動を感じる、といったものでした。つまり個々のの霊的ニュアンスは、インドのさまざまな地域におけるさまざまな素質の人間性質から発し、ヴェーダンティストが手を加えることによって後になってはじめて挿入されたものもあり、その結果、今私たちの前に姿を現すヴェーダのなかには、サーンキヤ哲学から多くが挿入されていることがわかります。そして、第三の精神方向であるヨーガーーもうすでにお話ししましたがーーが登場します、なぜなら、原初の霊視は徐々に消え去り、霊の高みへの新たな道を探さなければならなかったからです。サーンキヤの考察が本来真正の科学であり、外的形態めがけてゆく科学であり、これは本来これらの形態と、さらには人間の魂のこれら形態への相互関係を把握するのみである、ということによって、ヨーガはサーンキヤの考察から区別されます。霊的高みに至るために魂はどのように進化してゆくべきか、ということに対しては、ヨーガが指針を与えるのです。

そして私たちが次のように問うならば、つまり比較的後の時代に、あるインドの魂が、一面的に進化を欲したのではなく、単なる外的な形態の観察によって前進することを欲したのでもなく、恩寵に満ちた光明によって根源的にヴェーダに与えられていたようなものを再び展開させるために、魂的な存在そのものをも上昇させようとしたあるインドの魂が、どのようにふるまわなくてはならなかっただろうか、と問うならば、崇高な歌のなかでクリシュナが弟子のアルジュナに与えるもののなかに、私たちは答えを得ます。

このような魂は、次のような言葉で表現できるように進化していかなければならなかったでしょう。そうだ、お前は外的形態のなかに世界を見る、そしてサーンキヤの智に浸透されるとき、お前は個々の形態がいかに源流から展開下降してくるかを見るのだ。けれどもお前は、いかに諸形態が入れ替わり立ち替わり移り変わっていくかも見る。お前の眼差しは形態の発生と消滅を追い、お前の眼差しは形態の誕生と死を辿る。けれどもお前が、いかに形態から形態へと移り変わっていくか、いかに形態が生じ滅するかを徹底的に考え抜くなら、お前の省察はこれらすべての形態のなかに自らを表すものを指し示すのだ、お前の徹底的な省察は霊的原理を指し示すのだ、これらの形態のなかに生き、これらの形態の内部で変転し、あるときはサットヴァに従って、あるときは他のグナに従って諸形態と結びつくけれども、これらの形態からまた自らを解き放つ霊的原理を。このような徹底的な省察は、諸形態に対して不変の、移ろわない何かをお前に指し示す。なるほど物質的原理も不変である、しかしお前が見ている諸形態は不変ではない、それらは生成し、生じまた滅し、誕生と死を通過していく。しかし魂的ー霊的エレメントは不変である。これにお前の眼差しを向けるのだ！けれどもお前がこの魂的ー霊的なものそのものを体験することができるためには、お前がこの魂的ー霊的なものを、お前のうちにもお前の周りにも、お前とひとつであると感じつつ体験することができるためには、お前は、お前の魂のなかにまどろんでいる力を発達させねばならない、お前はヨーガに帰依しなければならない、存在[Dasein]の魂的ー霊的エレメントへの敬虔な眼差しをもって始まり、特定の行を用いることによりまどろんでいる諸力の開発に導くヨーガに。こうして弟子はヨーガを通じて段階を追って上昇していくことになるのだ。霊的ー魂的なものへの敬虔な崇拝、これが魂そのものを前へと導く別の道である、変転する諸形態の背後に一なるものとして霊的なものとして生きているもの、かつてヴェーダが恩寵に満ちた光明によって告げ知らせたもの、魂がヨーガを通じて、形態のあらゆる変転の背後に探し求められるべきものとして再発見するであろうものに導く別の道である。

このように進むがよいーー最高の師は弟子にこう語ることができたでしょうーー、このようにサーンキヤ哲学の、形態の、グナの智を通って進むがよい、サットヴァ、ラジャス、タマスについての観察を、最高の物質性[Stofflichkeit]から最も粗雑な物質性までの観察を通って進むがよい、このように理性にのっとって通過して行き、こう言うがよい、不変のもの、一なるものが存在するはずだ、と。そうすれば、お前は思考しつつ永遠に至る。けれどもお前は魂において帰依から出発することもできる、このときお前はヨーガを通じて段階を追って突き進み、あらゆる形態の根底にある霊的なものへとこうして突き進んで行く。二つの面からお前は永遠のものに近づくことができる、宇宙（世界）を思考しつつ観察することを通して、そしてヨーガを通じてである、両者はお前を、偉大なヴェーダの師たちが一なるアートマンーブラフマンと名づけたものへと導く、外部に生きるとともに魂の内部にも生きているもの、一なるものとして宇宙の

根底にあるものへ。お前はこれに向かって突き進む、一方ではサーンキヤ哲学を通して思考しつつ、他方ではヨーガを通じて帰依しつつ歩むことによって。

このように私たちは古い時代を振り返ります、当時はいわばまだ、『血はまったく特別の体液だ』という著作に示しましたように、血を通じて人間の本性に霊視的な力が結びついていました。けれども人類は、進化にともなって徐々に、血に結びついたあの霊視的原理からより魂的ー霊的原理へと前進して行ったのです。

けれども、種族と民族の血縁関係のなかで素朴に獲得されていた魂的ー霊的なものとの関係が失われていないがゆえに、この関係が失われていないがゆえに、血縁関係からもはや血縁関係が支配しない時代への移行に際して、新たな方法が、新たな指針が与えられねばなりませんでした。新たな方法へのこの移行にあたって、私たちを導くのがこの崇高な歌、バガヴァッド・ギーターです。そしてギーターは、クル族とパーンドゥ族出身の王族の兄弟の後裔たちがいかに互いに闘うかを物語ります。私たちは一方で、ギーターの内容が始まる過ぎ去った時代を仰ぎ見ます、いにしえのインドの人間の智慧と行いがこの智慧の意味でまだ存在していた時代です。私たちはいわば、、クル族出身の盲目の王ドリタラーシュトラにおいて古い時代から新しい時代へと入り込んできたひとつの線を見ます。そして私たちはドリタラーシュトラを御者との対話において見ます。彼は闘う者たちの側に立ち、他方には、古い時代から新しい時代への過渡期にあるがゆえに、彼の血縁でありながら戦闘状態にある者たち、つまりパーンドゥの息子たちが立っています。そして御者は王に物語ります、王が盲目と叙述されているのは私たちにはじゅうぶん特徴的なことです、なぜなら霊的なものはこの種族のなかでは受け継がれていかず、物質的なものだけだからですが、この盲目の王に御者は物語ります、向こうのパーンドゥの息子たちのところで、より霊的ー魂的なものとして後世に伝わるべきものはここに移行していくべきなのですが、そこで何が起こっているかを。さらに、闘う者たちの代表であるアルジュナが、偉大なクリシュナから、人間の教師から、向こうで何を教わったかを御者は物語ります、御者は語ります、私たちが今お話ししましたすべてのことにおいていかにクリシュナが弟子アルジュナを教え導くかを、人間がサーンキヤとヨーガを用い、思考と帰依を発達させ、人類のかつての偉大な師たちがヴェーダのなかに書き留めたものへと上昇していくとき、人間はどこまで行くことができるかを。そして、哲学的であると同時に詩的な言葉のなかで壮大に、クリシュナを通じて、血縁関係から抜け出した新たな時代における人類の偉大な師を通じて、私たちに教えが語られるのです。

このように私たちは、ここで何か別のものがなおも古い時代から輝きを発してくるのを見ます。『血はまったく特別の液体だ』という著作の根底にあるあの考察、そしていくつかの同様な考察において私たちは、人類進化がいかに血縁関係の時代から発して後の細分化に至ったか、そしてそれと共にいかに魂的な苦闘が変化したかを示唆しました。そして崇高な歌、バガヴァッド・ギーターにおいて、私たちは直接この移行に導かれます、クリシュナによるアルジュナへの教えのなかで、血に結びついた古い霊視をもはや身につけていない人間がいかに移ろわぬものへと上に突き進んでいかなければならないかが示される、というかたちで導かれるのです。私たちがしばしば人類進化の重要な移行として観察してきたものがこの教えのなかで私たちに姿を現します。このように私たちにとってこの崇高な歌は、私たちが事物そのものから観察してきたものを描き出す図[Illustration]となるのです。

そしてこのバガヴァッド・ギーターにおいてとりわけ私たちを引きつけるのは、ここで人間の道について強く訴えかけるように語られるその語られかた、移ろうものに対する移ろわぬものへの人間の道についてありありと語られるしかたです。ここで最初アルジュナは深い懊悩に満ちて私たちの前に立っていますーーこのことを私たちは御者の語りから聞きます、なぜなら語られることは、盲目の王ドリタラーシュトラの御者の口から発しているからですーー、ここでアルジュナは懊悩を抱えて私たちの前に立っています。彼は、クル族と、彼の血縁の者たちと闘いつつ、自らを見つめます、そして今や彼はこう自問します、ここでわが血縁の者たちと闘う定めなのか、父たちの兄弟の息子たちと。近親者に対して武器をふるう定めにある英雄たちも我らのなかにいる、そしてまたあそこにも我らに対して武器をふるう定めにある賞賛すべき英雄たちがいる、と。ーーここで彼は重い魂の苦悶を感じます、この闘いで勝利することができるのか、この闘いで勝利することが許されるのか、兄弟に向かって剣を挙げることが許されるのだろうか、と。ここでクリシュナが、偉大な師が彼の前に進み出て、彼にこう語ります、まずは思考しつつ観察することによってお前の眼差しを人間の生に向けるがよい、そしてお前自身が今そうである状況を見るがよい。お前が制圧するであろうクル族出身の者たちのこの肉体のなかには、すなわち移ろう形態のなかには、これ

ら形態のなかに自らを表現するのみの移ろわぬ魂的な本性が生きているのだ、お前の戦友たちのなかには、外界の諸形態のなかに自らを表現するのみの永遠の魂が生きているのだ。お前たちは闘わねばならないであろう、お前たちの法則がそのように望み、お前たちの宇宙法則が、人類の外的進化の法則がそのように望んでいるからだ。お前たちは闘わねばならないであろう、ある時代からまた別の時代へと移行を示す瞬間がそのように望んでいるのだ。けれども悲しむには及ばない、なぜなら形態が形態と、変転する形態が変転する形態と闘うだろうか。これらの形態のどれが他の形態を死へと導くだろうかーー死とは何か、生とは何か。形態の変転は死であり、生である。そして今勝者となるであろう魂も同様であり、今死へと赴くであろう魂も同様である。そして、サーンキヤの思考しながらの観察がお前を導いていくものに対して、対峙し合う永遠の魂に対して、この勝利とは何であろうか、この死とは何であろうか。

アルジュナがその存在の最も内奥で魂の苦悶を堪え忍ぶことがあってはならない、今アルジュナを闘いへと招喚する義務にのみ仕えさせたい、なぜなら、闘いに巻き込まれている移ろうものから、彼が勝者であろうと敗者であろうと生き続けるであろう永遠のものへと、彼の眼差しを向けさせなければならないから、ということが、壮大なしかたで、状況そのものから描写されます。そしてこのように独特のしかたで、崇高な歌バガヴァッド・ギーターにおいて大きな音が打ち鳴らされます、重要な人類の進化上の事件に対する音、移ろうものと移ろわぬものの音が。そして、私たちが抽象的な思考を把握するのではなく、事柄の感情内容を私たちに作用させるとき、私たちは正しい道を歩んでいるのです。私たちがクリシュナの教示を次のように考察するとき、私たちは正しい道を歩んでいます、つまりクリシュナはアルジュナの魂を、そこにいれば移ろうものの網のなかに絡め取られてしまう段階から上昇させようとしている、たとえこの移ろうものが、勝利と敗北、死をもたらすことと死を被ることにおけるように、直接の人間の魂にとっては苦悩に満ちたしかたで目の前に現れるとしても、移ろうものすべてに対して魂が自らを崇高と感じるより高い段階へと上昇させようとしている、と。

崇高な歌バガヴァッド・ギーターにおいて私たちに現れてくるようなこの東洋の哲学に関連して、かつて誰かがこう言ったことがほんとうであるとわかります、この東洋の哲学は、あのいにしえの時代にあって、同時に宗教である、そのひとりに、たとえ彼が高度の知者であったとしても、きわめて深い宗教的情熱が不足することなく、また単に感情宗教のなかにのみ生きていたきわめて素朴な人間であっても、一定量の叡智に欠けることはなかった、という意味で同時に宗教である、と。私たちはそう感じます、偉大な師クリシュナが単に弟子の理念を捉えるのみではなく、直接心情のなかに働きかけ、その結果弟子は移ろうものを眺め、移ろうものを苦悩しつつ私たちの前に立ち、そして彼の魂はこのような意味深い状況において、あらゆる移ろうものを超え、あらゆる苦悩を超え、移ろうもののあらゆる悩みと苦痛を超えて魂をそびえさせる高みへと上昇してゆく、その様子を見て私たちはそう感じるのです。

□編註

☆１　シャンカラチャルヤ（通常シャンカラ　紀元後788ー820）：インドの重要な叡智の教師。ヒンドゥー教ではシヴァの化身として崇拝される。仏教の敵対者。バガヴァッド・ギーターを含むきわめて重要な宗教的文書の注釈者であり、古典となったヴェーダ体系の確立者。

☆２　アストラル体、エーテルあるいは生命体、及び物質体；感受魂、悟性あるいは心情魂、意識魂：ルドルフ・シュタイナー『神智学』（1904 、GA9）「人間の本質」の章参照。

☆３　創世記の精神科学的根拠づけについて行いました連続講義：「創世記の秘密。モーゼ第一書の第６日の仕事」（ミュンヘン1910）GA122。

☆４　人間の本質の区分：アリストテレス『デ・アニマ』、特にII冊１ー３章；アイステティコンは感覚によって刺激され感受する魂の部分；オレクティコンは魂の欲望する部分；キネティコンは魂の運動する部分；ディアネティコンは魂の思考する部分。

☆５　彼が色彩における光と闇について語るとき：アリストテレスにおける色彩論に関するさまざまな箇所（『魂について』II,7；「感覚的知覚について」第２章及び『自然科学小論集』）がゲーテによって『色彩論の歴史』にまとめられた。『ゲーテ自然科学論文集』５巻（ルドルフ・シュタイナーによる編集、注解、キュルシュナー『ドイツ国民文学』1884ー97に所収）、GA1a-e ドルナハの遺稿 1975：IV『色彩論についてII』28-37頁「アリストテレス」参照。それに続くペリパトス的論集も。

☆６　私がなぜ…ゲーテ的色彩論の…真価を再び発揮させることを課題としていたか：ルドルフ・シュタ

イナー『わが生涯』（1923ー1925　GA28 ）V章及び索引参照。R・シュタイナーは1882年以来、キュルシュナー『ドイツ国民文学』の『ゲーテ自然科学論文集』の編集を委託されていた。1890年から1897年、彼はワイマールのゲーテーシラー文庫においてゾフィー版のためにこの論文集の編集を行った。
☆７　カピラヴァストゥ：インド北部、ヒマラヤの麓に位置する。この場所は19世紀に、ネパールのPadeire村付近で考古学者たちに再発見された。
☆８　ヨゼフ・ダールマン：1861ー1930　サーンキヤ説の他の精神潮流への関係については彼の著作『叙事詩にして法律書としてのマハーバーラタ』（ベルリン1895）225ー233頁参照。

第３講

1912年12月30日、ケルン

■概要
・バガヴァッド・ギーターにおける二つの世界観ニュアンス
（サーンキヤ哲学とヨーガ）と運命：
一面的にサーンキヤ哲学に帰依するひとと一面的にヨーガに帰依するひと
・パウロ書簡の背後に見出せる世界観と運命：
恩寵と正しい信仰に対する信頼
・バガヴァッド・ギーターとパウロ書簡の外面的な違い：
ギーターの詩的な言葉の崇高さと個人と日常を超越した静謐さ、
パウロ書簡の熱狂的・プロパガンダ的、個人的な語調
・古代と現代における命名、名づけのしかたの持つ意味の違い：
古代において人間はその本質にしたがって名づけられていた
（マナスの担い手＝マヌ、というように）
・人間の最高の本質を顕現させた存在がある時代に指導者として
現れる可能性。
・人間一般、人類そのもの、ひとつの本質としてのクリシュナの教え：
クリシュナは人間の最高の本質、最高の自己Selbstであるが、
素質としてはどの人間にも見出される。
・クリシュナ：宇宙期に一度だけ、人類進化のなかに肉体をもって現れる
神的ー人間的な最高の本質。
・ヨーガ、帰依の行により、自分の内面を高め、一切へと上昇する
（サーンキヤとは別のもうひとつの）魂進化の面。
・賢者の理想：行為しつつ、行為に関与せず行為を超越し、
知識・認識そのものからも自由であること。
・外的形態への関係＝三つのグナ（タマス、ラジャス、サットヴァ）から
順次自由になり、三つのグナそのものから脱することとき、
ひとは自身の本質＝クリシュナに対峙する。
・ギーターにおいて、恩寵により人類進化のなかでクリシュナがアルジュナに
その本質を現す時点が語られる：人類に与えられた最も偉大な叙述のひとつ
（バガヴァッド・ギーター第11歌）
・クリシュナを前にしたときの圧倒的感情の秘密。
・自身の高次の本質に対して、通常の日常的感覚で近づくことの危険性。
・宇宙の秘密：ギーターに語られることが、血に結びついた古い霊視が途絶え、
人間が、永遠の移ろわぬものに至る新たな道を模索しなければならなかった
重要な時点で語られたこと。
・宇宙の秘密に近づくためには、謙虚に敬いつつ近づく正しい感情が不可欠
であること。

バガヴァッド・ギーターにおいて私たちに与えられるこのような哲学的詩篇の意義全体を正しく評価できるのは、そのひとにとってバガヴァッド・ギーターあるいはそれに類する世界文学の作品に書き記されている事柄が、単に理論のみではなく運命であるような、そういうひとのみです、そして人類にとって世界（宇宙）観はひとつの運命であり得ます。

先日来の議論において、第三のヴェーダの方向のほかに、二つの世界観ニュアンス

[Weltanschauungsnuancen]、つまりサーンキヤ哲学とヨーガが私たちの前に姿を現しましたが、この二つの世界観ニュアンスは、私たちがこれに正しく目を向けるなら、世界観が人間の魂にとってまさに運命でありうることを、きわめて繊細な意味で私たちに示すことのできるものです。知識、理念における認識、魂的生が表れてくる世界の諸現象についての洞察というかたちで人間に与えられうるものすべてを、私たちはサーンキヤ哲学の概念に結びつけることができます。そして、そのような認識、科学的な形で理念のなかに表現できるそのような世界観のうち、標準的人間のためにいわばこの現代に残されてるものを、たとえそれがサーンキヤ哲学よりもはるかに霊的に低い位置にあるとしても、私たちがそれをこのような認識ニュアンスとみなすなら、私たちはこう言うことができるでしょう、サーンキヤ哲学に対して運命的に感じ取られうるものは、この現代においてすら、なおも運命的に感じ取られうるのだ、と。ーーとはいえ運命的に感じ取るのは、このような世界観ニュアンスに一面的に帰依するひと、私たちがそのひとについて、彼は一面的なしかたで学者あるいはサーンキヤ哲学者だ、とある意味で言えるようなひとのみでしょう。ーーこのようなひとはどのように世界に向き合うでしょうか。彼は魂においてどのように感じることができるでしょうか。これは結局のところ経験的にのみ答えられる問いかけです。ある魂がある世界観ニュアンスにこのように一面的に帰依するとき、いま特徴づけられた意味で保持されてきた世界観を持つことに全力を尽くすとき、このような魂に何が起こるかを知らなければなりません。このときこういう魂は、世界（宇宙）の諸現象の形態のひとつひとつにまで入っていくことができ、宇宙のなかに力として姿を現し、宇宙のなかで形態として流転しているすべてに対して、いわばきわめて豊かな理解をすることができます。ある魂がこのようにのみ宇宙に帰依するとしたら、そうですね、ある受肉において自分の能力とカルマを通じて、霊視的な力がそれを貫き輝いているにせよいないにせよ、とりわけ理知[Vernunftwissen]をもって世界の諸現象に精通する機会のみを見出すとしたら、こういう魂の方向はどんな場合にも、魂生活全体のある種の冷たさに通じていくでしょう。さらに魂の気質の作られようによって、こういう魂は多かれ少なかれ世界の諸現象に対して満足されないイロニーの性格を帯びるか、あるいは、現象から現象へと歩んでいくこのような知に対する全般的な無関心、不満足といった性格を帯びるか、であることがわかります。単に学者的なしかたでのみ刻印づけられた知識が近づいてくるとき、このように現代でも多くの魂が感じることのできる冷たさ、このとき魂を襲う不毛さ、心情における不満足、これらすべてが、今示されたような魂方向に目を向けると私たちの魂の前に現れてくるのです。自分でもそれとわからず、このような魂は自らを荒廃したように感じるでしょう。全宇宙を手に入れても、自らの魂について何も知らず、何も感じず、何も感受せず、何も体験できないとしたら、そのなかがからっぽのままだとしたら、私は何を持っているのか！ーーそのような魂はこう言うでしょう。宇宙の全き知識を詰め込みながら自分自身の中は空虚である、というのは辛い運命でしょう、これは宇宙の現象を失っているような、内部においてそれ自身価値あるものとなりうるものすべての喪失のようなものでしょう。

ある種の博識さ、抽象的な哲学を携えて私たちの前に登場する多くの人たちのなかに、私たちはたった今描写されたことを見出します。これらの魂が、自足せず自らの空虚を感じつつ、自分の多くの知識に興味を失い、悲しげにやってくることによって私たちはこれを見出します、あるいは誰かが抽象的な哲学を携えてやってきて、神性や宇宙論（コスモロギー）、人間の魂の本質について抽象的な言葉で私たちに情報を提供することができるときに私たちはこれを見出し、そしてやはりこう感じるのです、頭でっかちだ、心が加わっていない、心情がからっぽだ！と。ーーこのような魂に向き合うと、うすら寒い風が吹いてきます。サーンキヤ哲学はこのように運命となり得ます、自分自身としては失われた存在、自らに関して何も持たず、その個について宇宙が何も持つことができないような存在であることに人間をなじませるような運命となることができるのです。

今度は逆に、一面的にヨーガを通じて進化することを求め、いわば世を捨てていて、何かを外界から認識することを退ける魂を考えてみましょう。そういう魂は言います、宇宙がどのように成り立っているかを経験することなど私にとって何になろう。私はすべてを私自身から求めたいのだ、私の力を開発することで自分で前に進みたいのだ、と。ーーこういう魂はもしかすると自分の内部で暖かく感じるかもしれませんし、しばしば、何か自分のなかに閉じたもの、自足しきったものに思われるようすで私たちの前に登場するでしょう。そうかもしれません。長い間にはこういう魂にとってもそういう状態は続かず、結局こういう魂は孤立にさらされます。隠遁状態になったこのような魂が魂生活の高みを目指し、それから世界へと歩み出て行っていたるところで世界の現象に突き当たり、それでも、こういう世界の現象すべてが私

に何の関わりがあろう、ともし言うとすれば、ーーそして顕現のすばらしさによそよそしく対峙し、それを理解しないがゆえに、やはり孤立を感じるとしたら、この一面性もまた悲惨な運命となるでしょう。何としばしばこういう魂にお目にかかることでしょう！あらゆる力を自分自身の存在の進化に用い、まるで一切共有するのはごめんだとばかりに冷淡に無関心に同胞の傍らを通り過ぎるような人たちと、何としばしば知り合うことでしょう。こういう魂は自分は世界を失なっていると感じますが、こういう魂は他の魂にとって極端にエゴイスティックに思えるでしょう。

このような生の関連に注目してはじめて、世界観から運命的なものが感じられます。そして私たちがギーターのなかにもパウロ書簡のなかにも見出すこれほど偉大な表明、これほど偉大な世界観の背景に、この運命的なものが姿をみせるのです。ギーターの背後にも、パウロ書簡の背後にも、わずかに私たちがその背後を覗いて見さえすれば、私たちにとって直接運命的となるものが私たちを見つめている、と言えるかもしれません。パウロ書簡からはどのように運命が私たちを見つめているのでしょうか。

パウロ書簡においてしばしば私たちは、魂がキリスト衝動との結び付きを見出し、正しく理解されたキリストの復活を魂が自らのうちに受け容れるとき魂にもたらされうるものによって、いわゆる信仰の正しさにおける魂進化の至福は、外的な営みの価値のなさに屈することはないのだ、と示唆されていることに気づきます。パウロ書簡において私たちがこれに向き合うとき、他方で私たちは、このとき人間の魂がいわば自分自身のなかに追い返されるのを感じます、このとき人間の魂は外的な営みから遠ざかり、信頼できるのはまさに恩寵と信仰の正しさのみだと感じます。次いで外的な営みが来ます。それは世界のなかに現にあるのであって、私たちがそれをないものと宣言することによってそれを遠ざけるわけにはいきません。私たちは世界においてこれにぶつかります。そして運命はまたもその途方もない大きさのすべてで私たちに向かって鳴り響きます。事態をこのように把握するときにのみ、このような人類への啓示の強大さが目の前に現れるのです。

さて、この二つの人類への啓示、バガヴァッド・ギーターとパウロ書簡は、外面的には互いにまったく異なっています。そしてこの外面的な違いが、これらの作品のどの部分においても魂に働きかけてくる、とでも申し上げたいのです。

私たちが驚嘆しつつバガヴァッド・ギーターの前に立つのは、単に少し前に議論しました理由からだけではありません、バガヴァッド・ギーターが詩的にこれほど偉大に力強く私たちを引きつけ、人間の魂の気高さがどの詩節からも私たちに向かって輝きを放ち、ここでクリシュナあるいは彼の弟子アルジュナの口から発せられることすべてのなかに、人間の日常的な体験を越え、あらゆる熱狂的なものを越え、激情と関わるもの、魂を動揺させるものすべてを超越して在るもののような何かを感じるがゆえに、私たちは驚嘆しつつその前に立つのです。たとえギーターのほんの一部分でも私たちに作用させるなら、魂の平安、清澄、平静、冷静及び落ち着きの領域、叡智の雰囲気のなかに引き入れられます。そして私たちはいたるところで、ギーターを読むことでもう私たちの人間性がまるごと高い段階に引き上げられるように感じます。私たちはいたるところでこう感じます、ギーターのなかの崇高な神的なものを正しく私たちに作用させようと思うなら、私たちはあまりに人間的なもののいくつかから自らを自由にしていなければならない、と。

パウロ書簡の場合はすべてが異なっています。詩的な言葉の崇高さが欠け、ギーターの冷静さすら欠けています。私たちはこのパウロ書簡を手に取り、これを私たちに作用させます、すると、パウロ書簡から、パウロの口から、起こったことについての熱狂的に憤激したありようが私たちにむかって吹きつけてくるのをさまざまに感じます。時折その語調はひどくやかましいと言えるほどです。パウロ書簡においては、あれこれのことがさまざまに非難され咎められ、罵られます。そして、キリスト教の偉大な概念について、恩寵、律法性、ユダヤ教（モザイスムスMosaismus）とキリスト教の違い、復活、これらについてここで述べられている事柄、これらはすべて、いわば哲学的であろうとし、哲学的定義であろうと欲しながら、どの文にもパウロの特性が入り込んで響いているためにそのようにならない語調で述べられているのです。私たちはどの文においても、興奮している人か、あるいはあれやこれやのことをしでかした他のひとびとについて義憤にかられてまくし立てる人が話しているということを忘れることはできません、あるいは、彼は個人的に参加（アンガージュ）している[engagieren]、彼はこの理念のプロパガンディストだという印象のもとにいる、と私たちが感じるようにキリスト教の最高の概念について話しているということを。

パウロの書簡において彼があれこれの教区民に書いていることを私たちが読むとき、そのパウロによく

似た個人の性格の心情が語っている、というようなことがギーターを読む場合どうやって私たちに起こりうるでしょうか、パウロは書いています、私たちはが何とキリスト・イエスを支持したことか！　思い出しなさい、私たちはいかに誰にも苦労をかけなかったか、誰にも苦労をかけないためにいかに私たちが日夜働いたか、と。これらはすべて何と個人的であることでしょう！　個人的なものの息吹がパウロ書簡を貫いています。ギーターにおいては、すばらしく純粋な領域、いたるところで超人間的なものと境を接していて、時おり超人間的なもののなかにも入り込んでゆくエーテル領域が見出されます。

つまり外的に見て顕著な違いがあるのです、それで私たちはこう言うことができます、かつてヒンドゥー教に運命の力に満ちた世界観の合流を与えた偉大な歌を通じて、このギーターを通じて、気高く純粋な何か、個人的でない何か、平静な、熱狂と激情を離れたものがヒンドゥー教徒たちに与えられた、一方、キリスト教の原典、パウロ書簡が私たちに見せるものは、まったく個人的でしばしば激情にあふれ、あらゆる平静さを欠いた性格を持っている、このことを認めたくないとしたら、それはきわめて盲目的な偏見だろう、と。真理の前に心を閉ざしてこういう事柄を認めないことによってではなく、これを理解し、正しい意味でこれを把握することによってひとは認識に至るのです。したがって私たちはこの対比を青銅の板のように以下の考察の前にずっと立てておくことにいたしましょう。

すでに昨日注意を向けましたように、ギーターにおいてはクリシュナによってアルジュナへの重要な教えが与えられます。さてそもそもクリシュナとはいったい誰なのでしょうか。この問いはとりわけ私たちの興味をひくに違いありません。すでに私がおりにふれてあちこちでお話ししましたこと、つまり、以前の時代においては命名や名づけのしかた全体が今とは異なっていた（☆１）、ということをよく知っていなければ、クリシュナが誰であるかということも理解できません。現在は根本的に、あるひとを名づけるやりかたは何かきわめて恣意的なものです。と申しますのも、あるひとがあれこれの市民的な名前であること、ミュラーあるいはシュルツェという名前であることを知っても、今日の時代ではそのひとについて結局多くを知ることはないでしょうから。また、あるひとが宮廷顧問官か枢密顧問官か、あるいはこの種の何かであることを知っても、結局そのひとについて多くを知っているわけではありませんーーこれも誰しも認めることでしょうけれども。つまりこのような社会的序列の名称を知ったところでこの人物について多くを知っているわけではないのです。さらにまた、あるひとを、「閣下」あるいは「猊下」を付けて呼びかけるべきか、あるいは単に「様」とのみ呼びかけるべきか知っているとしても、やはりそのひとについて多くを知っているのではありません、要するに、こういう呼びかけすべては、当の人物について多くを語っているわけではないのです。そして、私たちが今日選んでいる他の名称にしても、とりたてて多くを意味しているわけではないことは、皆さんにも容易に納得していただけるでしょう。古い時代においては違っていました。私たちがサーンキヤ哲学の名称を取るか、私たち独自の人智学的名称を取るか、私たちはこの両者を出発点として、以下の考察を試みることができます。

サーンキヤ哲学の意味において、人間は粗雑な物質体、精妙なエレメント体ないしエーテル体、諸感覚の規則正しい力を含む体、マナスと呼ばれるもの、アハムカーラ等々から成り立っている、ということを私たちは聞きました。その他の高次の部分を考察する必要はありません、一般的にはそれらはまだ形成されていないからです。けれども今、いずれかの受肉において私たちに姿を見せる人間を考えてみますと、こう言うことができます、人間は互いに異なっている、そのためある人間の場合には、エーテル体のなかに現れてくるもののみが強く現れ、また別のひとの場合は諸感覚の規則正しさのなかにあるものがより多く現れ、第三のひとの場合は内感覚が、第四のひとの場合はアハムカーラが多く現れる、と。あるいは私たちの用語で言うならば、私たちは感受魂の力が優勢に働いている人間を見出す、悟性魂あるいは心情魂の力が優勢に働いている別の人間を見出す、意識魂の力が前面に出てきているまた別の人間を見出す、そして、マナスその他によってインスピレーションを与えられることにより何か別のものが働きかけているさらにまた別の人間を見出す、ということです。これらは、ひとりの人間が示すありよう全体によって与えられる差異です。この差異によって人間の本質そのものが示唆されます。

現代にあっては、容易に理解できる理由から、人間の名づけがこのような意味で現される本質にしたがって選ばれるということはありません。と申しますのも、今日人類の広く行き渡った心情において、たとえば、現在の人類周期において人間が到達しうる最高のものは、アハムカーラのかすかな兆しである、と言われるとしたら、誰もが、自分はその本質においてきわめてはっきりとアハムカーラを表している、と信じて疑わないでしょう、そして、まだそうではない、そのひとの場合は低次の部分が優勢なのだ、と言

葉で表現されるとしたら、そのひとの気持ちを傷つけることでしょう。古代においてはそうではありませんでした。当時、人間は本質的なものにおいて名づけられていました、とりわけそのひとを他の人類から引き上げ、もしかすると指導者の役割さえ与える、というときは、まさにその特徴を与えられた本質を考慮するというかたちでその人間の名づけが行われたのです。

古代において、次のような人間が登場したとしましょう、包括的な、真に包括的な意味でマナスを発現させ、なるほど自らのうちでアハムカーラを体験したけれども、これを個的な要素としていっそう後退させ、外部への効果のために、内感覚を、マナスをよく働かせた、そういう人間がです。古代のより短い人類周期の法則にしたがって、こういう人間はーーこのような本質を示すことができた人間はめったにいなかったでしょうがーー偉大な立法者、大きな民族の指導者であらねばならなかったでしょう。それで人々は彼を他の人間と同じ名で呼ぶことに満足せず、その突出した特性にしたがって彼をマナスの担い手[Manas-Traeger]と呼び、他のひとを単に感覚の担い手[Sinnes-Traeger]と呼んだのです。人々はこう言ったでしょう、このひとはマナスの担い手、このひとはマヌ[Manu]だ、と。ですからあのいにしえの時代における名づけに向き合うとき、私たちはそのなかに、人間を成り立たせているもの[Organisation]のうちきわめて突出した部分、まさにそのひとにあってしかるべき受肉のなかに現れている部分にしたがってその人間を特徴づける何かを見なければなりません。

ある人の場合、とりわけ次のようなことが現れていたとしましょう、そのひとは自らのうちに神的なインスピレーションを感じ、認識や行為をなすにあたって外界が感覚を通じて与えるものや脳に結びついた知性が語ることにしたがってのみ決定するのを拒み、いたるところで彼に語りかける神的な言葉に耳を傾け、彼から語りかける神的実質の預言者となった、ということが。こういう人間は神の子[Gotessohn]と呼ばれたでしょう。そしてヨハネ福音書においてはなお、その最初の章の冒頭でただちに、かつてそうであったひとたちが神の子らと呼ばれています（☆２）。

けれども本質的なことは、こういう重要なことが表現されるとき、ほかのことはすべて無視されたということです。つまり、ふたりの人間に出会ったとしましょう、ひとりは感覚を通して世界を自分に作用させ、脳に結びついた知性で世界について熟考していたふつうのひとであり、もうひとりは神的な叡智の言葉が輝き入っているようなひとであったとしましょう。すると古代の心情の意味でこう語られたことでしょう、ひとはこう言った、こちらの人間は人間である、彼は父と母より生まれ、肉により生み出された、と。もうひとりの人間、神的な実質の告知者であった人間の場合は、感覚と脳に結びついた知性で世界を観察する最初の人の場合のように通常の伝記に入り込んでくるようなものは考慮されなかったでしょう。このような伝記を書くなどということは、後者の場合愚かしいことだったでしょう。と申しますのも、彼が肉の体をまとっている、ということはたまたまのことにすぎないのであって、人々が注目していた本質的なことではなく、いわば他のひとたちに姿を表すためのものにすぎなかったからです。ですからこう言われるのです、神の子は肉によりて生まれない、神の子は純潔に、霊より直接生まれた、と。ーーすなわち、神の子の場合重要なこと、人類にとって価値があることは、それが霊に由来する、ということです。古い時代にはこのことだけが強調されました。ある種の秘儀参入の弟子たちの場合には、人間の性質の高次の要素を有するために重要であると認められた人物に対して、通常の日常的状況ばかりに留意するような通俗的な意味での伝記を書くなどということは最大の罪であったことでしょう。まだわずかなりともあのいにしえの時代の心情のいくばくかを残しているひとは、今日たとえばゲーテ伝に書かれているようなことはきわめてばかげたことだと思うのです。

さて、古代の人類がこのような感受性、このような感情を持って生きていたと想像してみますと、内部で主としてマナスが生きているマヌのようなひとはめったに現れない、そういうひとは登場することができるまで非常に長期間待ち続けなければならない、という感情にこの古代の人類が浸されていたであろうことも理解できます。

今、私たちの人類周期において人間における最も深い本質として生きることができるものを眺めてみるとき、自らを魂の高みへと上昇させてゆくことのできる秘密の力についていかなる人間も予感しうるものを眺めてみるとき、ほかの人間の場合素質としてのみ存在するものが、非常にまれなケースにおいて、一度ある人間存在の本質的な部分となる、つまりその時々に登場し、他の人間たちの指導者となり、あらゆるマヌたちより高く、その本質にしたがってどの人間にも入り込んでいるけれども、現実の外的な人格としてはある宇宙期[Weltenalter]にただ一度だけ出現するような、そういう人間存在の本質的な部分になる、

ということを見はるかし、思い描いてみるとき、そしてつまり私たちがこのような概念を作り出すとき、そのとき私たちはクリシュナの本質に近づいていくのです。

クリシュナは人間一般です、彼は人類そのもの、ひとつの本質と解される、ほとんどこう言ってよいでしょう。けれども彼は抽象ではありません。今日、人々が人類一般について語るとき、彼らは抽象論者としてそれについて語ります。通常はまったく感覚世界に捕らわれている今日にあって、私たちにとって抽象的存在は普遍的な運命となっています。人間一般について語られるとき、まったく生きていないぼやけた概念が持たれます。クリシュナについて人間一般についてのこととして語るひとたちは、これは今日それについて語られるとき目につくあの抽象的な理念だ、とは言いません、そうではなく、そうだ、この存在はなるほどその素質にしたがってあらゆる人間のなかに生きているけれども、ひとりの人間としてもどの宇宙期にも一度出現し、人間の口を通して語るのだ、と言います。ただし、この存在において重要なのは、外的な肉的なものではなく、精妙なエレメント体でもなく、諸感覚器官の力でもなく、アハムカーラ及びマナスでもありません、この存在において重要なのは、ブッディとマナスのなかで、大いなる普遍の宇宙実質、宇宙を貫いて生き生きと活動する神的なものと直接関わり合っているものなのです。

私たちがアルジュナの偉大な師クリシュナのなかに見出すことのできる存在たちは、人類の指導のためにその時々に出現しました。クリシュナは最高の人間的叡智を、最高の人間性（メンシェントゥム[Menschentum]）を教えます、しかもそれを彼自身の本質として教え、逆にまた、それがどんな人間の性質のなかでも親和性をもって琴線に触れるように教えます、なぜならクリシュナの言葉のなかにあるすべては、素質においてはどんな人間の魂のなかにも見出されるからです。このように人間は、クリシュナを仰ぎ見ることで、同時に自分自身の最高の自己[Selbst]を見上げました、しかし同時に別のものも見上げます、別の人間のように彼の前に立つことができ、そのなかで彼が別のもののなかでのように、その素質においては彼もそうであるけれどもやはり彼とは別人であるものを同時に尊敬する、そういう別のもの、神が人間に関わるように彼と関わるものをも見上げるのです。私たちは、クリシュナとその弟子アルジュナとの関係をこのように思い描かねばなりません。すると、ギーターから私たちに向かって響いてくる基調音も発せられます、あたかもいかなる魂をもとらえ、いかなる魂のなかにも響き入ることができるかのように鳴り響き、まったく人間的な、親しく人間的な、いかなる魂も、偉大なクリシュナの教えに耳を傾けるという憧れに親しみを感じないなら自責の念にかられざるを得ないと感じるほど親しく人間的であるあの基調音が。

他方では、かくも平静に、かくも激情も熱狂もなく、かくも気高く聡明に、すべてが私たちに現れてきます、なぜなら、どの人間の性質のなかにもある神的なものであるけれども、人類進化のなかに神的ー人間的な本質として一度肉体をもって現れる最高のものが語っているからです。

そしてこれは、この教えは、何と崇高であることでしょう！この教えは実に崇高であって、このギーターはバガヴァッド・ギーターつまり崇高な歌という名を担うにふさわしいものです。まず最初に、昨日の講義ですでに話題にのぼりました偉大な教えが、崇高な言葉で、崇高な状況から私たちに向かって現れてきます、宇宙において流転するもの、そして生成と消滅、誕生と死、勝利あるいは敗北が外的に現れるような形態のなかで流転していくものすべて、このすべてのなかに、移ろわぬもの、永遠のもの、持続するもの、在り続けるものが顕われている、そして、宇宙を正しく観ようとする者は、移ろうものからこの移ろわぬものへと貫き通って行かなければならない、という教えが。これは、すでにサーンキヤを通じて、つまりすべての移ろうもののなかの不滅性についての思慮、背後で死の門が閉ざされるとき、敗北した魂も勝者の魂も、神の前にあっては同じである、ということについての理性的な思慮を通じても、私たちに姿を現します。

けれどもクリシュナはさらに弟子アルジュナに、魂は別の道によっても日常の見かた[Schauen]から離れて導かれうる、と語ります、それはヨーガによるものです。魂が敬虔になることができれば、それは魂進化の別の面です。一方の面は、現象から現象へと進み、霊視的なものに照らされたあるいは照らされない理念能力をいたるところに適用する、という面です。もう一方の面は、外的世界からあらゆる注意をそらし、感覚の門を閉ざし、理性と知性が外界について語りうるすべてのものを閉ざし、通常の生活のなかで経験したものとして思い出すことのできるすべてに対してあらゆる門を閉ざし、自らの内部に入っていってしかるべき行により自分自身の魂のなかに休らっているものを取り出し、最高のものと予感できるものに魂を向け、帰依の力により自らを高めようと試みる、そういう面です。これが起こるとき、ひとはヨー

ガを通じてますます高く上昇します、まず肉体的な道具を用いるときに到達できる高次の段階に至り、あのさらに高次の段階に至ります、あらゆる肉体的な道具から自由になっていわば肉体の外部で人間を成り立たせている高次の部分のなかに生きるときにひとはその高次の段階で生きるのです。このように生のまったく異なる形態へと上昇して生きていきます。生の現象と生の活動は霊的に、スピリチュアルになります。ひとはますますいっそう自身の神的存在に近づいていき、自身の存在を宇宙存在へと拡大し、人間を神へと拡大します、自身の存在への個的な限定をなくし、ヨーガを通じて一切[All]へと上昇しながら。

それから、偉大なクリシュナの弟子が何らかのしかたでこの霊的な高みに昇っていけるための手段が知らされます。ここでまず、人間が通常の世界でなすべきことの間が区別されます。それにしてもこれは偉大な状況です、この状況をもってまさにギーターがこの区別を論究してみせるのです。アルジュナは血縁の者たちと闘わねばなりません。これは彼の外的な運命です、これは彼の働き、彼のカルマ、これは彼がまずこの状況において直接行わねばならない行為の総計です。この行為において彼はまず外的人間として生きます。けれども偉大なクリシュナは彼に教えます、行為というものは自然の進化と人類の進化の外的な経過のなかで必然的なものとして生じるので、人間は行為してはじめて知恵あるものとなり、神的なもの移ろわぬものと結びつくのだ、しかし賢者はこれらの行為からも自らを解き放たねばならない、と。賢者は行為をなします、けれども彼のなかには、同時にこれらの行為に対して傍観者のようである何かがあるのです、これらの行為に関与しないもの、私はこの営みを為す、けれどもまったく同様に、私はこれを起こるがままにさせる、と言うこともできるだろう、とそのとき言うものが。

ひとは、自らが行うことに対して、あたかも別人がそれを行っているかのように立つことによって、そして、その行為がもたらす喜びあるいはその行為が引き起こす悲しみにも心を動かされないことによって、賢者となります。いわば偉大なクリシュナは弟子アルジュナにこう言うのです、お前がこのパーンドゥの息子たちの戦列に立つにせよ、お前が向こうのクルの息子たちの戦列に立つにせよ、お前が何をするにせよ、お前は賢者としてパーンドゥ族からもクル族からも自らを解き放たなければならない。そのことがお前を動揺させないなら、お前があたかもひとりのパーンドゥであるかのようにパーンドゥの行いを為すことができるとしたら、あるいはあたかもお前がひとりのクルの息子であるかのようにクルの行いを為すことができるとしたら、つまりお前がこのすべてを超えて立つなら、お前がお前自身の行為によって動揺しないなら、お前がお前自身の行為において、風から護られた場所で静かに燃え、外部のものに触れられない炎が燃えるように生きるなら、魂が自身の行為によって動揺することがそれほど少なく、その行為の傍らに内的に静かに生きるなら、そのとき、魂は賢者となるのだ、そのとき魂は自らを行為から解放するのだ、そのとき魂はこれらの行為がどんな結果をもたらしうるか問うことはない。と申しますのも、行いがどのような結果になるか、ということは私たちの狭く限定された魂にとってのみ問題なのです。けれども私たちが、人類と宇宙の経過が行為を要求するがゆえにその行いを為すとき、その行為が怖ろしいものに通じるか祝福的なものに通じるか、あるいは私たちにとって苦しみに満ちたものに通じるか喜びに満ちたものに通じるかには一切関わりなく、私たちはそれを行うのです。

このように行為から抜きん出ていること、私たちの手が何をしようと、私たちの剣がーーギーターの状況から語ろうとすればーー何をしようと、私たちがその口で何を話そうと、まっすぐ立っていること、このように、内的な自己が私たちがその口で話すこと、その手で行うことすべてに対してまっすぐ立っていること、偉大なクリシュナはこれを目指して弟子アルジュナを導いていきます。

このように偉大なクリシュナは弟子アルジュナに人類の理想を示します、人間が次のように言うような理想です、私は私の行いを為す、けれども、行為するのが私であれほかの者であれーー私は私の行いを見つめる。私の手を通じて起こること、私の口を通じて話されること、私はそれを、岩が離れて山から谷底へところがり落ちるのを見るように客観的に見る。そのように私は私の行いに対して立つ。そして、私があれこれのことを知り、認識し、自分で宇宙についてあれこれの概念を形成することができるにしてもーー私はこれらの概念から区別される何かとして立ち、私のなかにはなるほど認識する何かが私と結びついて生きているが、私はそこで別のひとが認識しているように眺める、と言うことができる。このとき私は私の認識からさえ自由となる。私の行いから自由になることができ、私の知識、私の認識から自由になることができるーー。賢者の高い理想がこうして私たちの前に置かれます。

そしてついに、それが霊的なもの[das Spirituelle]にまで上昇するとき、魔神（デーモン）たちが来ようとも、聖なる神々が来ようとも、すべては私が外部に見るものだ、私を取り巻く霊的な世界といえどもそこ

で起こるすべてのことから自由に、私はそこに立つ。私は眺め、私は私の道を行く、そして私が関与するもの、私は同時にまたそれに関与もしない、私は傍観者となったからだ。ーーこれがクリシュナの教えです。

そして私たちが、クリシュナの教えがサーンキヤ哲学に基づいていたと聞いたなら、多くの箇所でクリシュナの教えに貫かれるべきこと、偉大なクリシュナが弟子に語ることがよく理解できるようになるでしょう、クリシュナはこう言います、お前のなかに生きている魂はさまざまなしかたで結びつけられている、粗雑な物質体に結びつけられ、諸感覚に結びつけられ、マナスに、アハムカーラに、ブッディに結びつけられている。しかしお前はこのすべてを外的なものとして、お前の周りを取り巻いている覆いとして観察する、そしてお前は、お前が魂存在としてあらゆるものから独立していることを意識する、そのときお前はクリシュナがお前に教えようとすることについていくらか理解する。そしてお前が、お前の外界への関係、宇宙への関係全般は、グナ、つまりタマス、ラジャス、サットヴァによってお前に与えられていることを意識するとき、通常の生活において人間はサットヴァを通じて叡智と善意に結びつけられ、通常の生活において人間はラジャスを通じて激情、情動及び存在への渇きに結びつけられ、人間は通常の生活においてタマスを通じて怠惰、不活発、眠気に結びつけられることを知りなさい、と。

あるひとは日常生活でなぜ叡智と善意に情熱を注ぐことになるのでしょう。そのひとは、サットヴァによって示される基本性質に関係しているからです。あるひとはなぜ外的生活への歓びと渇望、生の外的現象による楽しみとともに日常生活を過ごしていくのでしょう。それはそのひとが生へのラジャスによって示される関係を有しているからです。なぜ人々は日常生活において眠たげに怠惰に無気力になるのでしょう。彼らはなぜ肉体性に圧迫されているように感じるのでしょう。彼らはなぜ、元気を奮い起こして瞬間ごとに肉体性を克服する可能性を見出さないのでしょう。なぜなら彼らは、サーンキヤ哲学においてタマスによって理解される外的形態の世界への関係を有しているからです。

しかし賢者の魂はタマスから自由にならなければなりません、眠気と怠惰と無気力のなかに現れる外界への関係から自らを解き放たなければなりません。あらゆる無気力なもの、眠たげなもの、あらゆる怠惰が魂から退けられると、魂には外界へのラジャスとサットヴァの関係のみが残ります。そしてひとが激情と情動、存在への渇きを取り除き、善意、同情、認識に情熱を注ぎ続けるなら、今やそのひとはサーンキヤ哲学がサットヴァと呼ぶ外界への関係を有します。けれどもひとがいかなる善意と認識への愛着からも自由になるとき、なるほど善意のひとであり賢いひとであるけれども、外的に現れているそのひとのありよう、たとえその善意や認識に対しての現れであっても、そのありように内面において左右されないとき、そしてそのひとにとって善意は当然の義務であり、叡智は彼に注ぎ込まれるものであるとき、そのとき彼はサットヴァからさえ脱します。こうして三つのグナを脱したとき、彼はあらゆる外的形態への関係から解放され、その魂において勝利し、偉大なクリシュナが彼をならせたいと思うものについて、いくらか理解できたのです。

そのとき、つまり偉大なクリシュナが理想として彼の前に置いたものになろうと努めるとき、人間は何を理解するのでしょうか。そのとき人間は外的な覆いをより厳密に理解するのでしょうか。いいえ、外的な覆いについては前にもう理解しました、けれども人間は覆いを超えて自らを高めます。そのとき人間は、この外的形態への魂の関係をより厳密に理解するのでしょうか。いいえ、そのことはもう以前に理解しました、けれども人間はこれを超えて自らを高めるのです。人間が三つのグナを脱したとき、彼が理解するのは、外界において多種多様な形態をとって彼に現れてくるものでもなく、これらの形態への関係でもありません。と申しますのも、これはすべて前の段階に属すものだからです。タマス、ラジャス及びサットヴァにとどまる限り、存在の自然の基盤に関わりを持ちます、社会的関係を得、認識を身に付け、善意と同情の能力を獲得します。けれどもこのすべてを超えていったとき、ひとは先行する段階においてこれらすべての関係を脱ぎ捨てたのです。そのときひとは何を認識し、何が眼前に現れるでしょうか。そのとき認識されるもの、そのとき目の前に現れるものは、これらすべてではないものです。それに至る途上にグナの内部で修得されるすべてのものから区別されるもの、これはどのようなものでありうるでしょうか。それは、つまるところひとが自身の本質として認識するものにほかなりません、と申しますのも、外界でありうる他のすべてのものは、前の段階で脱ぎ捨てられたからです。

まさにここに与えられた考察の意味において、これは何なのでしょうか。それはクリシュナ自身です。と申しますのも、クリシュナ自身が自らの最高のものの現れだからです。すなわち、最高のものに向かっ

て精進することで、ひとはクリシュナに対峙するのです、弟子は偉大な師に、アルジュナは、在りとあるすべてのなかに生きるクリシュナに対峙するのです。そしてまことにクリシュナはクリシュナ自からこう言うことができます（☆３）、私はひとつの山ではない、なべての山々のもとにあるとき、私はそれらのなかのもっとも巨大な山である、地上に現れるとき、私はひとりの人ではない、宇宙期に一度だけ人間の指導者として現れる最高の人間的顕現[die hoechste menschliche Erscheinung]、あらゆる形態における帰一なるもの、それが私、クリシュナである、と。

このように、師そのひとがその本質を現に生かしつつ弟子の前に登場するのです。けれども同時にバガヴァッド・ギーターにおいて、それは何か圧倒的なもの、人間が到達しうる最高のものであることが理解させられます。このようにアルジュナとしてクリシュナに対峙するということは、段階を踏んだ秘儀参入を通じて起こり得るでしょう、そのとき、それはヨーガの行の深みにおいて起こるでしょう。けれどもそれが人類進化そのものからどのように流れ出てくるか、それがいわば恩寵によっていかに人間に与えられるか、ということも示されます。このようにそれはギーターのなかに示されているのです。このアルジュナがたちまち引き上げられ、その結果彼はクリシュナをありありと眼前にみるわけですが、この引き上げられるときのようにギーターは私たちをある特定の時点に導きます、クリシュナが彼に対峙する時点にです。今やクリシュナは血肉を備えた人間のように彼に対峙しているのではありません。ほかの人間と同じように見える人間なら、クリシュナにおける本質的でないものを現すでしょう。と申しますのも、本質的なのは、あらゆる人間のなかにあるものだからです。けれども他の世界圏はいわば分散された人間にすぎないので、他の世界にあるものはすべてクリシュナのなかにあります。他の世界は消え去り、クリシュナは一なるものとして存在します。ミクロコスモスに対するマクロコスモス、小さな日常的な人間に対する人間そのもの、クリシュナはこのようにひとりひとり人間に対峙するのです。

このことが恩寵によって人間を圧倒するとき、人間の理解力は最初じゅうぶんではありません、なぜなら、クリシュナがその本質的なものを見せるときーーこのことは最高の霊視的力を通じてのみ可能なのですがーー、そのとき、クリシュナは人間が通常見慣れているあらゆるものとまったく異なって見えるからです。人間の観照力が他のすべての観照力から引き上げられるときの、最高の性質におけるクリシュナの観照力のように、クリシュナはギーターにおいてある瞬間、偉大な人間として私たちに姿を見せます、世界においてアルジュナの前にあったすべてがそのかたわらでは小さいものであるような偉大な人間として。このときアルジュナの理解力は尽きてしまいます。彼はなおもただ見つめ、自分が見るものをどもりながら話すことができるのみです。これももっともなことです、アルジュナは今までの手段をもってしてはこのすべてを見るすべも、言葉で表現するすべも身に付けていないからです。つまりクリシュナがアルジュナの前に立つこの瞬間にアルジュナが行う描写は彼にふさわしいものです。と申しますのも、これは、芸術的哲学的関連において、人類に当時与えられた最も偉大な叙述のひとつだからです、アルジュナが初めて語る言葉、語り慣れない言葉、このようなものは何も見たことがなかったために、以前には決して語ることのできなかった言葉、そういう言葉によってアルジュナが自らの深みから、偉大なクリシュナに見入るなかで明らかにされたことを取り出してくるさまは。「おお、神よ、私は御身のなかにあらゆる神々を見る（☆４）、あらゆる存在たちの群をも見る、ブラフマンを、蓮華の玉座についた主を、すべてのリシ（聖仙）たちと天の蛇たちを見る。多くの腕と胴体と口と眼を持ち、いたるところに、無限に形作られたあなたを私は見る、私はあなたに終わりも、半ばも、始まりも見ることはない、おお、すべての主よ。御身、あらゆる形態で私に現れる者、宝冠をつけ棍棒と剣を持って私に姿を見せる者、あらゆる方向に火炎を放って燃え上がる山、私はあなたをそのように見る。太陽の光輝が放つ火のように測り知れない偉大さに、まばゆくて見つめることができない。移ろわぬもの、最高を知るもの、もっとも大いなる善、遍（あまね）く万有のなかでこのようにあなたは私に顕現する。あなたは永遠の法の守護者である。久遠の、元なる霊[Urgeist]としてあなたは私の魂の前に立つ。あなたは私に、初めも、半ばも、終わりも示すことはない。あなたは遍く無限である、その力は無限であり、その広がりは無限である。月のように、そう、太陽そのもののようにあなたの眼は大きく、あなたの口からは供犠の火が放たれるようだ。私は灼熱するあなたを見る、あなたの熱がすべてを暖めるのを見る、私は大地と天空の間にそれを予感することができる、あなたの力はこのすべてにみなぎる。ただあなたひとりとともに私はここに立つ、そしてあなたの怖ろしい姿が私の眼に示されるとき、三界の生きるどの天界もまたあなたのうちにある。私は見る、あなたを讃えて歌う神々の全軍があなたに向かうさまを、そして私は合掌し畏怖しつつ立ち尽くす。すべての見者とすべて

の聖者の群があなたの前で歓呼の声を挙げる。彼らはあらゆる讃歌であなたを称える。ルドラ神たち[Rudras]、アーディティヤ神たち[Adityas]、ヴァス神たち[Vasus]、ならびにサーディヤ神たち[Sadhyas]、一切諸神、アシュヴィン双神[Ashvins]、マルト神たち[Maruts]、ならびに祖霊たち[Manen]、ガンダルヴァたち[Gandharvas]、ヤクシャたち[Yakshas]、アシュラたち[Asuras]たちおよびあらゆる聖者たちがあなたを称える。彼らは驚嘆してあなたを仰ぎ見る、多くの口、多くの腕、多くの脚、多くの脚、多くの胴体、歯の並んだ多くの口を持つかくも巨大な体を。このすべてを前ににて宇宙はおののき、わたしもまた震える。天を揺るがす者、輝きを放つ者、多くの腕を持つ者、口を持ち、大きな燃え上がる眼のように働きを及ぼす者よ、私はあなたを見る。このとき私の魂は震える。私は不動も安らぎも見いだせない、おお、私にはヴィシュヌそのものである偉大なクリシュナよ。私はあなたの恐るべき内部をのぞき込む、火にも似て、あらゆる時の終わりのように、存在が働きかけるごとく、働きを及ぼす内部を。何事についてか知ることができないようなしかたで私はあなたを見る。おお、私にお慈悲を、神々の主、宇宙の住処（すみか）よ。」アルジュナはクル族の息子たちの方を指し示しつつ向きなおります。「これらクル族の息子たちはすべて王の勇者たちの群とともに、ビーシュマとドローナとともに、私たちの最良の戦士たちとともに、彼らはすべてあなたの前にひれふす、祈り、あなたの栄光に驚嘆しつつ。あなたを、存在の原初を私は知りたい。私に顕現するもの、私に啓示されるものが何か、私にはわからない。」

アルジュナ自身の本質であるものとともにただひとりあるとき、この自身の本質が彼に客観的に現れるとき、アルジュナはこのように語るのです。私たちは、ひとつの大いなる宇宙の秘密の前に立っています、秘密に満ちているのは、その理論的内容のゆえにではなく、私たちがこれを正しく把握することができるときに私たちのうちにわき起こるはずの圧倒的な感情のゆえにです。これは秘密に満ちています、あらゆる人間的感情に向かって、かつて宇宙における何かが人間的感情に向かって話したのとは別の話し方をしなければならないほどに、秘密に満ちているのです。

今やクリシュナが語ることを、クリシュナ自身がアルジュナの耳に響かせるとき、こう響きます。「私はあらゆる世界を滅ぼす時[Zeit]である。私は人間たちを奪い去るために現れたのだ。たとえお前が闘って彼らを死に至らしめないとしてもーーお前がいなくても、向こうの戦列に立っている戦士たちはみな死を免れ得ない。だから、怖れず立ち上がるのだ。敵を打ち負かす栄誉を獲得せよ。待ち受ける勝利と支配を享受せよ。彼らが倒れ討ち死にするとき、彼らを殺したのはお前ではない、お前が彼らに死をもたらす前に、彼らはすべて私によってすでに死んでいたのだ。お前は単なる道具となれ、単に手をくだして闘う者となれ！ドローナ、ジャヤッドラタ、ビーシュマ、カルナおよびその他の者たち、これらの者を私は殺し、彼らはすでに死んでいるが、今、お前が彼らを殺すのだ、彼らが私によって殺され、マーヤにおいて死に倒れるとき、現象における私の働きが外へと発揮される。お前は彼らを殺しなさい。私が為したことは、一見お前により起こされるように見えるだろう。おののいてはならない！お前は、私が前もって為さなかったことは何も為すことはできないのだから。闘うがよい！彼らはお前の剣に倒れるだろう、私がすでに殺した彼らは。」

私たちが知っているように、パーンドゥの息子たちのもとでクリシュナの側からアルジュナへの指導により起こることはすべて、あたかも御者がドリタラーシュトラに語っているかのように語られます。詩人は、クリシュナはアルジュナにこう語った、と直接語るのではなく、ドリタラーシュトラの御者サンジャヤは、盲目の英雄、クル族出身の王にこれを語った、というふうに語ります。サンジャヤはこれをすべて語ったあと、さらにこう言います。「そしてアルジュナはクリシュナのこの言葉を聞いたとき、合掌し震えつつ、敬いの言葉をクリシュナに返す、ただどもりながら、クリシュナの前に畏れきって深く敬礼しつつ、アルジュナはこう言った。世界があなたを称えて歓喜し、畏敬の念に満ちてあなたに心服するのももっともである。ラクシャスどもーーこれは霊たち[Geister]ですがーーは愕いて四方八方に逃げる。聖なる群はみなあなたの前に身をかがめる。ブラフマーよりも尊い最初の創造者にどうして彼らがひれふさないことがあろうか。」

まことに私たちはひとつの宇宙の秘密の前に立っているのです。と申しますのも、アルジュナは彼自身の本質を生き生きと眼前に見て何を言うでしょうか。彼は言います、彼はこの自身の本質に、ブラフマーそのものよりも高次のものに思われる、と語りかけています。私たちはひとつの秘密の前に立っています。と申しますのも、このように人間が自分の本質に語りかけるとき、そのような言葉は、通常の生活で駆使されているいかなる感情、感受性、理念、思考も、理解のためにも用いられないような言葉であると解さ

れなければならないからです。と申しますのも、生活のなかでどんなふうにであれふつう持つことができるであろう感情を、このアルジュナの言葉に近づけるなら、これほど人間を大きな危険に陥れることはないからです。人間が日常生活の何らかの感情を、このとき語りかけているものに近づけるとしたら、それがまったく奇妙なことでないとしたら、これを最大の宇宙の秘密と感じないとしたら、病へのささいな兆候が、狂気、誇大妄想となるでしょう、クリシュナすなわちそのひと自身の高次の本質に対して通常の感覚で近づくことにより、人間はこの病に陥ります。「御身神々の主よ、あなたは無限であり、あなたは永遠であり、あなたは最高の者である、あなたは存在であると同時に非在でもある、あなたは神々のうちもっとも上位の者であり、神々のうちもっとも古い者である、あなたはありとあらゆる宝のうち最高のものであり、あなたはここで知る者であり、あなたはここで意識されうる最高のものである、あなたはすべてを包み、あなたのうちにはありとあらゆる姿がすべてある、あなたは風、あなたは火、あなたは死、あなたは永遠にうねる宇宙の海、あなたは月、あなたは神々のうち最高の者、あなたは名そのものであり、始祖である、神々のうち最高の者であるあなたは。あなたはあがめられねばならない、千の、千回の崇拝。このすべてよりもさらに多くの崇拝があなたにはふさわしい。あらゆる方向からあなたは崇拝されなければならない。あなたはいつか人間がなりうるすべてである。あなたはいつかあらゆる力の総体のみがそうありうるほどに力に満ちている、あなたはすべてを成し遂げ、同時にあなた自身がすべてである。はやまってあなたを友人とみなし、あなたの驚くべき偉大さを知らず、私があなたをクリシュナと、ヤーダヴァと、友と、呼んだのなら、軽率に、親しげにあなたをそう呼んだのなら、そしてまた弱さのなかで私があなたを正しく敬わなかったなら、散策あるいは休息時に、きわめて神聖な時あるいはきわめて日常的なとき、あなたがひとりであろうとほかの存在たちとともにあろうと、私が正しくあなたを敬わなかったのなら、これらすべてにおいて私があなたを正しく敬わなかったのなら、私はあなたの計り知れなさにお詫び申し上げる。宇宙の父である方よ、宇宙を動かし、宇宙のなかで動く方よ、あなたはほかのどの師をもしのぐ、並ぶ者なき、誰よりも優れた師であり、この三界におけるすべてに比類がない、あなたの前に私はひれふし、あなたの恩寵を乞う、あらゆる世界に顕現する主よ。私はあなたに決して見たことがないものを見て、畏怖しつつ震えざるをえない。あなたの（本来の）姿を示して下さい、おお神よ！おお、お慈悲を、神々の主よ、あらゆる世界の原初の地である方よ。」

人間の本質が人間の本質にこう語りかけるとき、まことに、私たちはひとつの秘密の前に立っています。そして今度はクリシュナが弟子に語りかけます。「私は恩寵をもってあなたに私の姿を現したのだ。私の最高の本質があなたの前に立っている、私の全能により、あなたの前に不可思議に出現するのだ、輝きつつ、測りがたく、捉えがたく。かつてほかの誰も、あなたが私を見るように私を見たことはない。今私の恩寵によりあなたのなかに与えられている力、これらの力をもってあなたが今私を見るようにはけっして、ヴェーダのなかに出ていることが私を告げることはなかった。供物として与えられたものも決してこのように私に届くことはなかった、神々への何らかの布施も、探究も、決して届くことはなかった、何らかの儀式も決してこのように私のところに届くことはなかった。何らかの烈しい懺悔も、今のような姿かたちの私を、今人間の形でお前が私を見ているようには見ることはできない、偉大な勇者よ。私の恐ろしい姿を見ても、怖れてはならない、心を乱してはならない。怖れを離れ、心楽しく、再びお前は私を見なさい、お前のよく知っているこの姿を。」

さて、サンジャヤは盲目のドリタラーシュトラにさらに語ります。「クリシュナがアルジュナにこう言うと、測りがたいもの、初めも終わりもないもの、あらゆる力よりも高いものは消え去り、ふたたびクリシュナは人間のかたちで現れた、怯えていた者を、その親しみやすい姿で落ち着かせようとするかのように。

アルジュナは言った、人間の姿のあなたをふたたび見て、私は落ち着きを取り戻し、ふたたびもとの私にもどりました、と。

するとクリシュナは言った、今私があなたに見せた姿はこれほど見ることが困難なものなのだ、神々ですらこれを見たいと絶えず憧れている。ヴェーダもこの姿については告げず、懺悔によっても、布施によっても、供物によっても、何らかの儀式によってもこの姿に到達できない。このどれによっても、お前が今見たこの姿形での私を見ることはできない。あらゆるヴェーダから自由に、あらゆる懺悔から自由に、あらゆる布施、供物、あらゆる儀式から自由に彼方へと歩むことを知っている者のみが、ただ私のみに敬いつつ目を向けることができる者のみが、このような形姿での私を見ることができ、私をこのように認識することができ、私とまったくひとつになることもできるのだ。私が促すように行い、私を敬い愛し、世

界を気にかけずあらゆる存在に愛情深い者、そういう者は私に至る、おお、パーンドゥ族出身の私の息子よ。」

私たちは、ギーターが語ってくれる宇宙の秘密の前に立っています、これが人類の意味深い宇宙時刻[Weltenstunde]に告げられた、血に結びついた古い霊視[Hellsehen]が途絶え、人間の魂が、永遠のもの、移ろわぬものに至る新たな道を模索しなければならなかったあの意味深い宇宙時に告げられた、という秘密です。この秘密が私たちに見せられます、そして人間が観照しつつ自分自身から自らの本質を生み出したときに人間にとって危険になりうるすべてを、私たちはこの啓示のなかに同時に感じ取ります。真の自己認識により私たち自身の本質について語るこのもっとも奥深い人間のおよび宇宙の秘密を私たちが捉えるとき、私たちは自らの前に最大の宇宙の謎を置いたのです。けれどもこの謎を置くことが許されるのは、私たちがこれを謙虚に敬うことができるときのみです。そしてこの宇宙の謎に近づくためには、どんな理解力もじゅうぶんではありません。そのためには正しい感情が不可欠なのです。ギーターからこのように語りかける宇宙の秘密に近づくことは、敬いつつそれに近づくことのできない者には許されないのです。そのように感じ取ることができてはじめて、私たちはその秘密を完全に把握するのです。そして、人類進化のある段階において、この秘密がギーターのなかでこの出発点からいかに見られうるか、さらに、まさにギーターにおいて私たちに示されるものを通じて、いかにその秘密が別のしかた、つまり私たちがパウロ書簡のなかで出会うような別のしかたをもふたたび照らし出す働きをするか、このことを本連続講演を進めながら扱っていくつもりです。

□編註

☆１　以前の時代においては命名や名づけのしかた全体が今とは異なっていた：
1908年5月22日、31日ハンブルクでのシュタイナーの講義参照
『ヨハネ福音書』（GA103)所収
＊邦訳『ヨハネ福音書講義』高橋巌訳　春秋社

☆２　ヨハネ福音書においては[…]ひとたちが神の子らと呼ばれています：
ヨハネ１ー12,13 参照。

☆３　まことにクリシュナはクリシュナ自からこう言うことができます：
第10歌 20-39 節 参照。

☆４　「私は[…]あらゆる神々を見る…」：第11歌 15 節以下
この部分とこれに続く引用は、レオポルド・フォン・シュレーダー
Leopold von Schroeder の翻訳（Eugen Diederiches Verlag から
新版1955年デュッセルドルフ/ケルン）に自由に拠っている。

第４講

1912年12月31日、ケルン

すでに昨日講義の初めに指摘されたことですが、私たちの魂が一方で、釣り合いがとれ、平静な、熱狂と情動を離れた真に智慧あるバガヴァッド・ギーターの本質を自らに作用させ、他方でパウロ書簡、つまり多くの点で、これは個人的な（パーソナルな[persoenlich]）情熱、個人的な（パーソナルな）意図と見解に貫かれている、ある種のアジテーション的、プロパガンダ的意味に貫かれていて、時おり騒々しく怒りっぽくさえある、という印象を与えるパウロ書簡において支配的なものを作用させるとき、私たちの魂が受け取る印象は非常に異なります。そして、精神内容の表出のされかたをも作用させるとき、ギーターにおいては驚くほど芸術的に完成された形式のなかに完全なものが得られます、ここで詩的に啓示され、しかも哲学的でもあるものを表現するこの完全さはこれ以上はほとんど想定できないほど完全なものです。これに対してパウロ書簡においてはしばしば、表現のぎごちなさ、とでも言えそうなものがあり、時おり不器用さとも思えるこのぎごちなさに直面しては、深い意味を引き出してくるのはきわめて困難となっているのです。

これらすべてにもかかわらず、ちょうどギーターにおいて東洋の世界（宇宙）観の調和が主音となって私たちに響いてくるように、パウロ書簡においては、キリスト教（クリステントゥム）において重要なものが、キリスト教の発展にとっての音頭取りの位置を占めているのが見出せる、というのはやはり正しいのです。私たちがパウロ書簡のなかに見出すのは、復活[Auferstehung]についての、掟に対する信仰と呼ばれるものの意味についての、恩寵の作用についての、魂あるいは人間の意識のなかのキリストの生その他多くについての、キリスト教の根本的に重要な真理です。これらすべてが、キリスト教の叙述において繰り返し繰り返しこのパウロ書簡から発してこざるを得ないように置かれているのがわかります。

パウロ書簡の場合、すべてはキリスト教に関わっています、ちょうどバガヴァッド・ギーターにおいてはすべてが、営みから自由になることについて、直接行為する生から自らを解き放ち、事物の観察へ、魂の沈潜へ、霊的高みへの魂の上昇へ、魂の浄化へ、要するにこのギーターの意味で語るなら、クリシュナとの一体化に至ることについての偉大な真理と関わっているように。

まさにここで特徴づけられたすべてが、これら二つの霊（精神）の啓示の比較をきわめて困難にしているのです、そして単に外面的な比較をするひとが、純粋さと平静と叡智の点でバガヴァッド・ギーターをパウロ書簡よりも高く評価せざるを得ないのは疑いのないことでしょう。けれどもこのように外面的な比較をするひとはいったい何をしているのでしょう。そういう比較をするひとは、誰かが目の前に、美しい、すばらしい花を咲かせた完全に成長した植物を見、そのかたわらに植物の種があるのを見て、私の前に完全に開花したすばらしい花を咲かせた植物がある、何と言ってもこれは目立たない物言わぬ種よりずっと美しい、と言うのに似たことをしているのです。ーーとは言っても、すばらしく美しい花を咲かせた植物のかたわらに置かれたこの種から、いつかもっと美しい花を咲かせるもっと美しい植物が成長してくる、という事態もあり得るでしょう。ですから、成長しきった植物とまったく成長していない種のように並置されているものをこのように直接比較するなら、正しい比較をしているとは言えないわけです。バガヴァッド・ギーターとパウロ書簡を比較するときにもそうなのです。

バガヴァッド・ギーターにおいて眼前に現れるのは、熟し切った果実のような何か、何千年にもわたって成長し、ついに壮大なギーターのなかに智慧ある成熟した芸術的表現を見出した長い人類進化の見事に美しい仕上がりのような何かです。そしてパウロ書簡においては、まったく新しい何かの種子、さらにどんどん成長していくにちがいない種子が眼前にあります、そしてこれをまさに種子のようなものと見なし、未来へ向かって進化が何千年も流れ去り、パウロ書簡のなかに種子のように置かれているものがますますいっそう成熟したときそこから生成するはずのものに預言的に目を向けるときにのみ、その完全な意味でこれを自らに作用させることができるのです。

このことを考慮するときにのみ、正しい比較ができるのです。そうすると、将来偉大になるべきものが、最初目立たない姿でキリスト教の深みからパウロ書簡のなかに、人類の魂から混沌と湧き出してくるように一度現れねばならなかったことについてもはっきり理解できます。このように、一方でバガヴァッド・ギーターの、他方でパウロ書簡の、地球の全人類の進化にとっての意味に目を向けるひとは、別の描写を

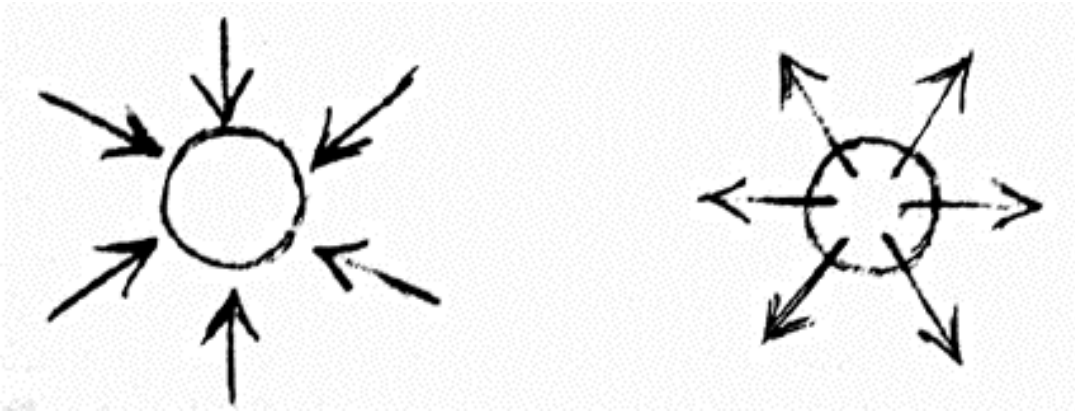
しなければならないでしょう、そして、美と叡智と内的な形式の完成に関して完全な作品という点で評価せざるを得ないひとも別の描写をしなければならないでしょう。

けれども、ここでバガヴァッド・ギーターとパウロ書簡において明らかになるような二つの世界観を比較したいなら、まずこう問わなければなりません、ここではいったい何が問題なのか、と。それは、私たちがまず問題となる世界観について歴史的に見晴るかすことのできるすべてを扱っているということ、つまり人類進化への自我[Ich]の育成[Heranziehung]ということです。人類進化においてこの自我を追求してみますと、こう言うことができます、キリスト教以前の時代においては、この自我は独立していなかった、まだ隠された魂の底に根ざしているようなもので、自分自身で進化していく可能性にはまだ達していなかった、と。

自分自身の性格を持って進化していくこと、これは、私たちがまさにキリスト衝動[Christus-Impuls]という名で呼んでいる衝動がこの自我のなかに投げ込まれることによってのみ可能になったのです。ゴルゴタの秘蹟以来人間の自我のなかに在ることができ、パウロの「私でなく私のなかのキリスト」という言葉のなかに表現されるもの、これはそれまではこの自我のなかに在ることはできませんでした。けれども、ゴルゴタの秘蹟より何千年も前、すでに人々は省察しつつキリスト衝動に近づいたのですが、その時代に、その後キリスト衝動が人間の魂のなかに組み込まれることによって起こるべきことがゆっくりと準備されました。とくにそれは、クリシュナの行いにおいて私たちに表明されるようなしかたで準備されたのです。

ゴルゴタの秘蹟以後、人間がキリスト衝動として自分自身のなかに探し求めなければならなかったもの、「私ではなく、私のなかのキリスト」というパウロ的形式の意味のなかに見出さねばならなかったもの、これを人間は、ゴルゴタの秘蹟以前には外に向かって探し求めなければなりませんでした、あたかも宇宙のかなたから啓示のように到来するもののように探し求めねばなりませんでした。そして私たちが時代を遡れば遡るほど、この外的啓示はいっそう輝きに満ち、鼓舞するものとなります。つまり、ゴルゴタの秘蹟以前の時代においては、人類へのある種の啓示があった、太陽の輝きが外から対象を照らすときに起こるような人類への啓示があった、と言うことができます。光が外から対象に当たるときのように、霊的太陽の光は外から人間の魂に当たり、それを照らしていました。

ゴルゴタの秘蹟以後、私たちは魂のなかにキリスト衝動として、つまり霊的な太陽光として作用しているものを、次のように言うことで比較できます、これは私たちが、内部から光を放つ自ら輝く天体を前にしているときのようだ、と。私たちが事態をこのように観るとき、ゴルゴタの秘蹟という事実は私たちにとって人類進化の重要な境目となります、私たちにとってこのゴルゴタの秘蹟はひとつの境目となるのです。この関係全体を象徴的に描くことができます（図）。



この円（左）が人間の魂を示すとしますと、私たちはこう言うことができます、霊の光が外部のあらゆる方向から人間の魂へと発してくる、と。それからゴルゴタの秘蹟が起こり、その後魂は自らのうちにキリスト衝動を有し、キリスト衝動のなかに含まれるものを自分から発します（右）。

あらゆる方向から照らされ、こうして照らされることによって輝く滴のように、キリスト衝動以前の魂は私たちに現れます。内的に輝き、自らの光を放射する炎、ゴルゴタの秘蹟以後の魂は、キリスト衝動を受け入れる状態となったとき、この炎のように私たちに現れるのです。

このことに注目するなら、私たちはこの関係全体をサーンキヤ哲学でおなじみの名称で表すことができるでしょう。私たちはこう言うことができます、私たちが、ゴルゴタの秘蹟以前のあらゆる方向から霊の

光に照らされている魂に霊眼を向けるなら、このあらゆる方向から魂を照らす霊、つまり私たちがこの関係全体に注目することでその霊性が私たちに輝き出すような霊の関係全体は、サーンキヤ哲学の名称に従えばサットヴァ状態にあるように見えます。これに対して、ゴルゴタの秘蹟以後実現された魂は、私たちがいわばこれを外から霊眼で観ると、あたかもその内部深くに霊の光が隠されているかのように、魂的なものが霊の光を隠しているかのように見えます。ゴルゴタの秘蹟以後キリスト衝動のなかに内包されている霊の光は、魂実質に覆われているように見えるのです。

そしてこの現代に至っても、とくにこの現代、人間が外的に体験し、知覚するすべてに関して、私たちはこの関係を見ないでしょうか。今日人間を、外的な知、外的な活動において人間が携わっていかねばならないものを、ひとつ観察してみるとよいでしょう、そして内部深くに隠され、まだまったく輝きの弱々しい小さな炎さながら、キリスト衝動が人間のなかで他の魂内容に覆われているさまを、これに対置してみればよいのです。これは、霊の魂への関係においてサットヴァ状態である前キリスト的状態に対して、タマス状態なのです。

つまりこの意味において観察するなら、ゴルゴタの秘蹟は人類の進化において何をするのでしょうか。霊の啓示ということに関しては、これはサットヴァ状態をタマス状態へと変化させます。人類はこのとき前進します、しかし、人類はいわば、深く転落すると言えるかもしれません、ゴルゴタの秘蹟を通じてではなく、自らを通じてです。ゴルゴタの秘蹟はますますいっそう炎を燃え立たせます。けれども、以前は力強い光があらゆる方向から魂を照らしていたけれども、その後その炎は小さな炎としてのみ魂のなかに現れるということ、このことが、前進していく、とは言えますますいっそう闇のなかに沈み込んでいく人間性質を作り出すのです。けれども、人間の魂の霊への関係におけるタマス状態が、ゴルゴタの秘蹟のせいだというのではありません、ゴルゴタの秘蹟が起こることによって、はるかな未来、今度は内から吹き起こされたサットヴァ状態がタマス状態から実現されるのですから。

サーンキヤ哲学の意味において、サットヴァ状態とタマス状態の間にはラジャス状態がありますが、このラジャス状態は人類進化に関して、ちょうどゴルゴタの秘蹟に当たる時期によって特徴づけられます。人類自らが霊の啓示に関して、ほかならぬゴルゴタの秘蹟をめぐる数千年に、光から闇へ、サットヴァ状態からタマス状態への道を通っていくのです。私たちがこの進化をもっと厳密に観ていきたいなら、こう言うことができます、私たちが人類の進化の時間を線a-bで示すなら、ゴルゴタの秘蹟以前およそ七ないし八世紀頃までは、人間の文化におけるすべてはまだサットヴァ状態にあった、と。

7世紀　　15,16世紀
カルデアーエジプト　ギリシアーラテン　私たちの時代

次いで、ゴルゴタの秘蹟が起こる時代が始まり、そしてさらに次の時代――ゴルゴタの秘蹟後およそ15、16世紀頃について語ることができるでしょうーーが始まります、こうして明らかにタマスの時代が始まるのです。けれどもこれは推移してゆくものです。そして私たちのよく知っている名称を用いたいなら、ある種の霊の啓示のためにいわばまだサットヴァ状態に入りこんでいた時代は、私たちがカルデアーエジプト時代と呼ぶ時代と一致します。ラジャス状態にあるものがギリシアーラテン時代、タマス状態にあるのがこの現代です。私たちも知っている通り、後アトランティス状態のうち、ここで特徴付けされたカルデアーエジプト時代が第三のものであり、ギリシアーラテン時代が第四、現代が第五のものです。人類進化のプランとでも言いたいものに従って、後アトランティス第三期から第四期にいわば外的な啓示の死滅が、キリスト衝動を燃え立たせるための人類の準備が起こらなければなりませんでした。けれどもこのことは現実にどのように起こったのでしょうか。

さて、人間の霊（精神）の関係が、第三の人類期であるカルデアーエジプト時代において後続する時代にとってどのように異なっていたかを明らかにしようとするなら、こう言わなければなりません、この第三の時代においては、エジプトにせよカルデアにせよインドにせよこれらすべての国々、人類進化のこれらすべての地域にとって、人類はまだなお古い霊視的力の名残を有している、という状況であった、と。すなわち、人間は諸感覚と脳に結びついた知性の助けによってのみ外界を見ていたのではなく、人間は少なくとも眠りと目覚めの間のある状態においては、まだエーテル体の器官を用いて外界を見ていた、と。

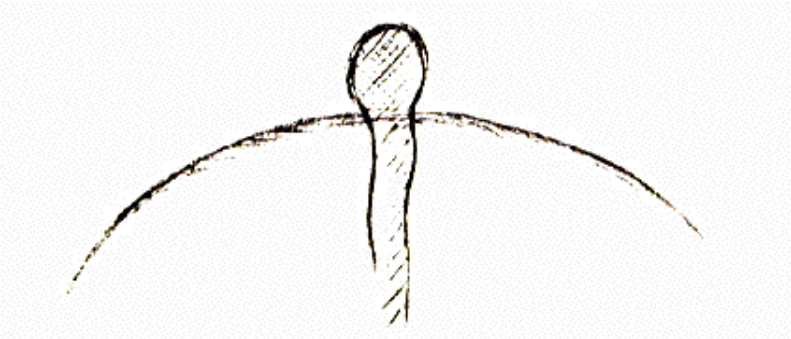
私たちがあの時代の人間を思い描こうとするなら、まったくもってこう言う以外許されないでしょう、あの時代の人間にとって、私たちが知っているような、諸感覚と脳に結びついた知性によって自然と世界とを観るということは、彼らが体験していた状態のうちのひとつにすぎない、と。けれども、これらの状態において、彼らはまだ知[Wissen]というものを形成しておらず、いわば事物をただ観ていただけでした、事物を空間においては並列的に、時間においては順を追って作用させていたのです。これらの人間が知に至りたいと思ったときは、彼らはこの現代の場合のように人工的にではなく自然に、おのずと現れてくるように、彼らの奥深くにある力を、彼らのエーテル体の諸力を認識のために働かせるという状態にならなければなりませんでした。そして私たちにサーンキヤ哲学の驚くべき知として現れてくるすべてのものも、このような認識から生じてきました、このような観察から、ヴェーダの知において私たちに継承されてきたものすべてーーただこれはさらに古い時代のものですがーーが生じたのです。

つまりこうして人間は、異なった状態に至ることあるいはそのような状態に移ったと感じることによって認識を獲得していたのです。人間には、目で見、耳で聞き、通常の知性で物事を追求するいわば日常的状態がありました。けれども、この見ること、聞くこと、知性は、外的実際的な要件を考慮するためにのみ用いられました。この能力が学問、認識のために用いられるなどということはまったくなかったでしょう。学問、認識のためには、人間がその本質のもっと深い諸力を活動させる別の状態において現れてくるものが用いられたのです。

つまり私たちはこのいにしえの時代の人間について、こういう対比を用いてよろしければ、いわば彼は平日の体（日常体[Alltagsleib]）を有していて、この平日体の内部にもっと精妙で霊的な日曜の体[Sonntagsleib]を有している、というふうに思い描くことができるのです。平日体を用いて人間は日常的なことを処理し、エーテル体のみから編まれている日曜体を用いて、彼は認識をし、学問を養いました。そして、現代において私たちが平日体を用いて学問を作り上げ、宇宙から何かを知るというようなときにもまったく日曜体をまとわない、などということは当時の人間をびっくりさせる、と言えばこの対比の正しさが確認されるような時代、人間にとってこのいにしえの時代はそういう時代なのです。そう、この全状態での体験をしているこのような人間にとって、いったいそれはどういうものだったのでしょう。この全状態の体験において、人間がより深い諸力による認識のなかにあったとき、つまりたとえばサーンキヤ哲学を完成させた認識のなかにあったとき、彼は今日の人間のようには感じていたのではありません、つまり学問を身につけようとするとき、知性を振り絞り頭で思考しなければならない今日の人間のように感じていたわけではないのです。知を獲得したとき人間は、自分がエーテル体のなかにいるように感じました、と言っても今日の物質的な頭である部分にはほとんど刻印されておらず、むしろほかの部分に多く刻印されているエーテル体ですが。人間はそのエーテル体のほかの部分でずっと多く思考していました。頭部のエーテル体はもっとも劣った部分なのです。人間はいわば、自分はエーテル体で思考している、思考の際物質体から上へ抜け出す、と感じていました。知の形成、認識形成のこのような瞬間に彼はさらにまたあることを感じました、彼は、自分が本来地球とともにひとつの全体であると感じたのです。平日体を脱いで日曜体をまとうとき、彼はあたかも、諸力が彼の本質全体を貫いていくような感情を持ちました、諸力が私たちの両脚と両足を貫き、これらの力が、ちょうど私たちの両手と両腕を貫く力が私たちの体と結びつくように、私たちを地球に結びつけるときのような感情です。人間は、自らを地球の一部と感じ始めたのです。一方で彼は自分はエーテル体のなかで思考し知る、と感じ、他方において自分はもはや切り離された人間ではなく、地球の一部である、と感じました。人間は自分の本質が地球の中に食い込んでいくのを感じました。つまり人間が日曜体をまとっていざ認識、ということになったとき、体験の内的なあり方全体がまったく変化したのです。

まさにこの古い時代、第三の時代が途絶え、そして新たな、第四の時代が始まったとき、このとき何が起こらなければならなかったのでしょうか。このとき何が起こらねばならなかったかを理解したいなら、

私たちは古い命名法に少し感情移入してみるのが良いでしょう。
あの古い時代において、たった今私が特徴づけましたことを体験した人間は、私のなかで蛇が活動し始めた、と言いました。ーー彼の本質は地中へと伸びていったのです。



人間は自分の物質体を本来的に活動するものと感じてはおりませんでした。彼は、自分が蛇のような突起を地中へと伸ばしていくように感じたのです、そして頭は地中から突出したものであるかのように。そしてこの蛇存在、これを彼は思考する者と感じました。ですから彼のありようをこう描くことができるでしょう、そのエーテル体は蛇の体のように地中に伸びていた、そして物質的人間としては地面の外にある一方、認識し知るときには地中に入り込んでいき、エーテル体で思考していた、というように。私のなかで蛇が活動している、と彼は言いました。つまり古い時代において認識とはいわば、私は私のなかの蛇を活動させる、私は私の蛇存在を感じる、ということであったのです。
新たな時代が始まるためには、新たな認識が到来するためには、何が起こらなければならなかったのでしょうか。人間が両足と両脚を通じてその本質を地中に伸ばしていくと感じた、そのような瞬間が存在することはもはや不可能とならなければなりませんでした。それに加え、エーテル体のなかでの感情は死に絶え、物質的な頭へと移動しなければなりませんでした。この古い認識から新たな認識への移行という感情を正しく思い描くなら、人は足に傷を負うけれども、人は自ら自分の体で蛇の頭を砕く、と言えばこの移行がよく表現されていることがおわかりになるでしょう、つまり頭を持つ蛇が思考器官であることをやめる、ということです。物質的な体、とりわけ物質的な脳が蛇を殺します、そして蛇は人から地球との一体感を奪い去る、つまり人のかかとに噛みつくことでそれに復讐するのです。
人類の体験の形態が別のものへと変わるこのような移行期においては、古い時代から入り込んできているものは、新たな時代に到来するものといわば戦闘状態にあります、と申しますのも、ものごとはまだ共存してあるからです。息子が長生きして父親も存命であるようなものです。とは言え息子は父に由来するものです。第四の時代、ギリシアーラテン時代の特性が現にあるのですが、まだ人間と民族のなかには第三のエジプトーカルデア時代の特性が入り込んできていました。進化が入り混じって経過していくのは当然のことです。けれども、このように新たに上昇してくるものであると同時に古きに由来するものとして共存して生きているものは、もはやよく理解されません。古いものは新しいものを理解しないのです。新しいものは古いものに対して抗い、古いものに対してその生命を主張しなければなりません。すなわち、新しいものがそこにあるのですが、先祖がなおもその特性を持って古い時代から子孫のなかに入り込んでいます、新しいものをともに作らなかった先祖がです。私たちは第三の人類時代から第四の時代への移行をこのように特徴づけることができます。
ですからひとりの英雄がそこにいなければなりませんでした、蛇を殺し、蛇によって傷つけられるこのプロセスをまず意味深く示すと同時に、自分の近親者ではあるけれども、その特性とともに古い時代から新たな時代へとなおも輝き出てくるものに対抗しなければならなかったいわば人類の指導者が。人類は、全世代が体験することを、最初にひとりが非常に大きなスケールで体験しなければならない、というかたちで前進していかなければならないのです。
このとき蛇の頭を殺し、第三の宇宙期において意味があったものに対抗した英雄は誰だったのでしょうか。人類を古いサットヴァ時代から新たなタマス時代へと導き出したのは誰だったのでしょう。それはクリシュナでした。そして、これがクリシュナであったということを、東洋の伝説（☆１）によって以上にはっきりと私たちに示すことがどうやって可能でしょうか。その伝説ではクリシュナは神々の息子とされ、マハーデーヴァとデーヴァキーの息子として、驚異のもとに登場します、つまり彼は何か新しいものをも

たらすということです。彼はーー先ほどの対比を続けるならーー人間が平日体のなかに知を求めるようにさせます、そして彼は日曜体すなわち蛇を殺します、彼は自分の親族から新たな時代へと入り込んでくるものに抵抗しなければなりません。

こういう人は何か新しいもの、何か驚くべきものです。ですから伝説は、幼子クリシュナの誕生のときにもう周囲は驚異に満ちていたこと、そしてクリシュナの母の弟カンサが幼子クリシュナの命をねらったことを語ります。ここで幼子クリシュナの叔父のなかに古いものの入り込んでいます、それで新しいものをもたらす者、第三の時代を殺し、外的な人類進化のために古い関係を滅ぼすものをもたらす者であるクリシュナは、抵抗し、抗わねばならないのです。彼は、古いサットヴァ時代の守護者であるカンサに抵抗しなければなりません。そしてクリシュナを取り巻くきわめて重要な驚異のもとで伝説は語ります、巨大な蛇カーリが彼に巻き付いたが、彼は蛇の頭を踏みつぶすことができた、しかし蛇は彼のかかとを傷つけた、と。ここには、伝説はオカルト的な事実を直接再現している、と私たちが言い表すことのできるような何かがあります。伝説は直接再現しているのです。ただし、外的な説明にかかずらわってはなりません、伝説を理解するためには、正しい場所で認識との正しい関連において伝説を捉えなければならないのです。

クリシュナは、没落していくアトランティス後第三人類期の英雄です。伝説はまたも私たちに語ります、クリシュナは第三宇宙期の最後に登場した、と。理解されればすべてはそのとおりなのです。クリシュナは、古い認識を殺し、認識を曇らせる者です。クリシュナは外的に現れてこれを行います。以前はサットヴァ認識のように人間を取り巻いていたものを、彼は暗くするのです。けれどもこのとき彼はバガヴァッド・ギーターにおいてはどのように立っているでしょうか。彼はこのとき、彼が奪ったものへのいわば調停として、通常の人間性にとって失われたものへと、ヨーガによっていかに上昇していくことができるか、ひとりの人間に指針を与えます。

このように、クリシュナは世界にとって古いサットヴァ認識を殺す者であると同時に、ギーターの結末において私たちに現れてくるように、放棄された認識に再び導いて行こうとするヨーガの主です、今や外的に平日の服のように身につけているものを克服し、打ち負かすときにのみ、つまり古い霊（精神）状態にもどるときにのみ獲得できる古い時代の認識へと再び導くのです。これはクリシュナの二重の行為[Doppeltat]でした。クリシュナは一方で世界史の英雄として振る舞い、古い認識である蛇の頭をうち砕いて、人類に物質体に宿ることを強います、この物質体のなかでのみ、自我[Ich]は自由な自発的な自我として獲得されうるのです、これに対して、以前は人間を自我たらしめていたすべてのものが外から放射されてきていました。これが世界史的な英雄としてのクリシュナでした。このときクリシュナはひとりの人間にとって、帰依、沈潜の時のために、内的な発見のために、かつて失われたものを再現してくれる者でした。そしてこれは、昨日最後に私たちの魂に作用させたギーターの場面において私たちに壮大に姿を現したもの、アルジュナに自身の本質として姿を現したものです、ただ、これは外から見られたもの、始まりも終わりもなくあらゆる空間に広がっていると見られたものですが。

そしてこの関係をさらに詳しく観察すると、私たちはギーターのある箇所に、そうでなくともも う私たちはギーターの偉大な力強い内容に驚嘆させられているのですが、この驚嘆がさらに再現のないものにまで大きくならざるを得ない箇所に至ります。ここで私たちが辿り着くのは、今日の人間にとってはしかしまさに説明しがたいものであらざるを得ないあの箇所、クリシュナがアルジュナに、アシュバッタ樹[Ashvatthabaum]つまりイチジクの樹[Feigenbaum]の性質であるものを、この樹は根を上に向け、枝を下に向けている、と言って明らかにする（☆２）あの箇所です、ここでさらにクリシュナはアルジュナに、この樹の葉の一枚一枚がヴェーダの書の頁であり、これらが一緒になってヴェーダの知をもたらす、と言うのです。ここは独特な箇所です。この箇所はいったいどういう意味なのでしょうか、根を上に、枝を下に向けて、葉はヴェーダの内容をもたらす生命の大樹へのこの示唆は。

さて、ここで私たちはまさに古い認識へと入り込み、古い認識がどのように作用していたかはっきりと理解しなくてはなりません。ご存じのとおり現代の人間はいわば物質的器官を通じて伝達される今日の認識を知っているだけです。私たちがたった今示したような古い認識は、まだエーテル的な体のなかで獲得されました。人間がまるごとエーテル的であったというわけではありません、物質体のなかにあったエーテル体のなかで認識が獲得された、ということです。古い認識は、組織化、エーテル体の配分によって獲得されたのです。

ひとつ生き生きと思い描いてみてください、皆さんがエーテル体のなかで、蛇によって認識するとき、

今日の人間にとっては世界に存在しない何かが世界に存在するのです。今日の人間は、自然にふるまうとき、周囲の多くのものを知覚しますね。けれどもちょっと世界を観ているひとを思い浮かべて下さい、観察する人間が知覚しないものがあります、脳です。観察するとき、いかなる人間も自分自身の脳を見ることができません。このことは、エーテル体のなかで観察するようになるやいなや不可能ではなくなります。ここでは通常見えない新たな対象が出現します、自分の神経組織を知覚するのです。と言っても、たとえば今日の解剖学者が神経組織を知覚するように知覚するわけではありません。神経組織は解剖学者が知覚するように見えるのではなく、そうだ、お前はまさにお前のエーテル性質のなかにいるのだ、という感情が得られるような見えかたなのです。ーー今や、上を見上げれば、あらゆる器官に通じる神経が上部の脳のなかに集まっていくのが見えます。それはこういう感情をもたらします、これは上へと伸びていく根を上部に持ち、枝をすべての四肢のなかに降ろしていく樹だ、という感情を。

けれども実際のところ、その樹は皮膚の内部にいる私たちのように小さなものと感じられるのではなく、巨大な宇宙樹[Weltenbaum]のように感じられます、根ははるかに空間の彼方に伸び、枝は下に向かう宇宙樹です。つまりひとは自らを蛇と感じ、いわば自分の神経組織を対象として見て、それについて、これははるか空間のかなたまで根を伸ばし、枝を下に向かって生やしている樹だ、という感情を持つのです。私が以前の講義で、人間はある意味で反転させられた植物です、と申し上げた（☆３）ことを思い出してください。バガヴァッド・ギーターのこの奇妙な箇所のようなものを理解するためには、こういったすべてが考慮されなければなりません。このとき、今日オカルティズムの深みから新たな手段で再び呼び起こされねばならないあのいにしえの叡智のゆえにひとは驚きを感じます。そしてこのとき、この樹が明るみに出すものが体験されます、その樹の、葉のなかに成長するものが体験されるのです、それは外から放射してくるヴェーダの知です。

ギーターの驚くべき像[Bild]が私たちの前に置かれます、それは、根を上に、枝を下に伸ばし、知識を含んだ葉を持つ樹、そして樹に巻き付いた蛇としての人間そのものです。皆さんはもしかしたらすでにこの像をごらんになったことがあるかもしれません、あるいは蛇の巻き付いたこの生命の樹の像が皆さんの前に姿を現します。こういう古い事柄に目を向けると、すべてが意味深いのです。ここで根を上に、枝を下に向けた樹が私たちの前に姿を現します。この樹はパラダイスの樹とは逆の方向を向いている、と感じられます。これには深い意味があります、と申しますのも、パラダイスの樹は、別の進化の出発点、その後古代ヘブライを経てキリスト教へと入っていく進化の出発点に立っているからです。このようにこの箇所では、私たちに、あのいにしえの知の特性全体への示唆も与えられているのです。クリシュナによって弟子のアルジュナに「この宇宙樹を人の眼に見えるようにする力は断念だ」（☆４）と明言されることで、私たちにこう示唆されます、人間は、人類進化のはるかな経過のなかで獲得したもの、私たちが昨日特徴づけたものすべてを諦めることで、あのえの知へと帰還する、という示唆です。これは何か栄光に満ちたもの、何か偉大なものとしてクリシュナがいわば分割払いとして、ひとりの[einzeln]特別な（個別の[individuell]）弟子アルジュナに与えるものです、他方においてクリシュナは文化の平日使用[Alltagsgebrauch]のために全人類からはこれを取り上げざるを得ませんでした。これがクリシュナの本質です。

それではクリシュナがひとりの特別な弟子クリシュナに与えるものは、どのようなものとならねばならないでしょうか。それはサットヴァ認識とならねばなりません。そしてクリシュナが弟子にこのサットヴァ認識を与えれば与えるほど、その認識は叡智に満ち、澄み切った、平安な、熱狂を離れたものとなるでしょう。けれどもそれはいにしえの啓示された認識でしょう、崇高な者、すなわちクリシュナそのひとが語り、それからひとりの特別な弟子が答える言葉において、かくも驚くばかりに外から人間に迫ってくるものでしょう。このようにクリシュナはヨーガの主となります、クリシュナは人類の太古の叡智へと立ち返らせ、サットヴァ状態においてなお霊を魂的に覆っているものをも、ますますいっそう克服しようとします、まだ物質[Materie]のなかに下降していない太古の清浄な状態での霊を弟子の目の前に導き出そうとするのです。昨日披露されましたあのクリシュナとアルジュナとのやりとりにおいて、このようにクリシュナはただ霊においてのみ私たちの前に立っているのです。

これとともに私たちの魂の前で、古い霊性の時代の最後のものであったあの時代が終焉を迎えます、古い霊性の出発点においては完全な霊の光を見え、その後、人間がその自我を、自立[Selbstaendigkait]を見出せるための、物質への下降が見えるのですが、このように私たちが追っていくことのできるあの霊性の時代の終焉です。霊の光が後アトランティス第四時代が到来するまで下降したとき、一種の相互関係、霊と

外的に魂的なものとの間のラジャス状態となりました。ちょうどこの時期にゴルゴタの秘蹟が起こりました。この時代においてサットヴァ状態から描写することができたでしょうか。いいえ、それではこの時代に属するものは描写することができなかったでしょう。ラジャス時代からーーサーンキヤ哲学の用語を用いようとすればーー正しい意味で描写する者は、ラジャスから描写しなければなりませんでした。清澄さからではなく、パーソナルなもの[das Persoenliche]から、あれやこれやについての憤慨から、彼は描写せざるを得なかったのです。このようにパウロはラジャス状態から語ったわけです。テサロニケ書の、コリント書の、ローマ書の、言葉の数々が脈打っているのが感じられるでしょうーー怒りの気分のように、しばしばパーソナリティの特徴をおびたもの[Persoenlichkeitscharakteristik]のようにパウロ書簡から脈打ってくるものが、人間のラジャス状態から身をよじりつつ発してくるのをみなさんは感じられるでしょう。これがパウロ書簡の様式（スタイル[Stil]）と性格です。パウロ書簡はこのように登場してこなければなりませんでした、一方、バガヴァッド・ギーターは清澄に、個人（パーソナリティ）を離れて[persoenlichkeitsfrei]現れてこなければなりません、没落しゆく時代の最高の精華だからです、バガヴァッド・ギーターはしかし没落したものの代償をひとりの人間に与え、霊生活の高みへと彼を導きます。クリシュナは最高の霊の精華を自分の弟子に与えなければなりませんでした、なぜならクリシュナは人類に対しては古い認識を殺さなければならなかったからです、蛇の頭を踏み砕かなければならなかったからです。

このサットヴァ状態はおのずと没落しました。それはもはや存在しなくなり、そのときサットヴァ状態で語ったであろう者も、ラジャス時代にはいにしえの物事についてしか語ることはできなかったでしょう。新たな時代の出発点に身を置く者は、今や標準となったものから語らなければなりませんでした。人間の本性が器官及び物質体を道具として用いる認識欲求を見出したことで、パーソナリティ[Persoenlichkeit]が人間本性のなかに引き入れられました。これがパウロ書簡から語りかけています、これはパウロ書簡におけるパーソナルな要素です。こうして、かつてあるパーソナリティが、物質的なものの闇として入り込んでくるものすべてに対して怒りの言葉を轟（とどろ）かせることになったのです。しばしばパウロ書簡においては怒りの言葉が轟いているからです。

こうしてさらに、パウロ書簡においては、バガヴァッド・ギーターにおけるように、厳格に閉じられた線で、叡智に満ちた鋭い輪郭を持つ明晰さをもって語られることはできないということにもなります。バガヴァッド・ギーターにおけるように叡智に満ちて語られうるのは、人間が外的な営みからいかに自由になり、クリシュナと合一する霊のなかへといかに勝ち誇りつつ上昇するかが特徴付られるときです。このように、最高の魂の高みへのヨーガの歩みであるものが叡智に満ちて語られることができたのです。

新しいものとして世界に登場したもの、内部における、単に魂的なものへの霊の勝利、これはまずラジャス状態からのみ叙述されうるものでした。そして、人類史にとって意味深くこれを最初に叙述する者は、その全情熱をもって叙述します、私はそれに関わったのだ、キリスト衝動の啓示に対峙したとき、この私自身が震えおののいたのだ、と人にわかるように。このときそれはパーソナルに[persoenlich]彼のところに近づいてきました、そのとき彼ははじめて、以来数千年を通じて作用することになるものを前にしたのです。そのとき彼はこれを前にして、彼の魂のあらゆる力がパーソナルに関わらずにはいられないというほどでした。ですから彼は、バガヴァッド・ギーターにおいて見られるような哲学的で叡智に満ちた輪郭を持った概念で叙述することをせず、彼がキリストの復活として叙述すべきものを、ひとが直接パーソナルに関わり合う何かとして叙述するのです。

これはパーソナルな体験であるべきではなかったのでしょうか。キリスト教がきわめてパーソナルなものに浸透し、貫き灼熱させ、貫き活かす、こういうことがあるべきではなかったとでもいうのでしょうか。まことに、キリスト事件を最初に叙述する者はパーソナルにのみこれをすることができたのです。

私たちは、ギーターにおいて、ヨーガによる霊的高みへの上昇に主音が置かれているのを見ます、そのほかのことは、単に付け足しとして触れられるのみです。なぜでしょう。クリシュナは指導に際して彼の特別な弟子に関わらなければならないからです、クリシュナが関わるべきはまさにこの特別な弟子であり、他の人間が霊的なものへの関係として外部に感じるものではないからです。ここでクリシュナは、弟子がそうなるべきものを描写します、そして弟子をますます高次のもの、ますます霊的なものにならせようとします。これは、ますますいっそう円熟した魂状態へと、したがってますますいっそう印象深い美の像へと通じていく叙述です。ですから、これはまた、結末になってはじめて、デーモン的なものと霊的なものとの対立が私たちに向かってくる、魂生活を美へと上昇させて生きることへのこのような対立にあって、

何かが硬化する、ということでもあります、結末においてはじめて、私たちはデーモン的であるすべてのものの対立が、霊的であるすべてのものへの対立のなかに置かれるのを見出すのです。物質的なものが単にそこから語るもの、物質のなかに生き、死とともにすべては滅びると物質のなかにあって信じるもの、これらはすべてデーモン的です。とは言え、これは説明のためにのみそこにあるのであって、偉大な師が真に関わるべきものではありません、師は何にもまして、人間の魂の霊化に関わらなければならないのです。ヨーガに対立するものについてヨーガは付け足しとしてのみ語ることが許されているのです。

パウロはまず第一に、全人類と、まさに暗黒の時代の幕開けにいる人類全体と関わらなければなりません。パウロは、この暗黒時代が人間生活に引き起こすものすべてに眼差しを向けなければなりません、彼はこの普遍的な闇の時代を、キリスト衝動として人間の魂のなかに小さな植物のように甦らそうとするものに対比させなければなりません。これもパウロの場合、あらゆる可能な悪徳、パウロが与えうるものによって打ち負かされるべきあらゆる可能な唯物主義が繰り返し指摘されるところに、明白に現れているのがわかります。パウロが与えうるものとは、小さな炎のように人間の魂のなかでようやく燃え始め、彼の言葉の背後に熱狂が、パーソナリティに担われた感情の啓示として意気揚々と言葉のなかに表出してくる熱狂があるときにのみ力を得ることができるものなのです。

ギーターとパウロ書簡の叙述はこれほどかけ離れています。ギーターにおける清澄さ、無私の[unpersoenlich]叙述、しかしパウロ書簡においてはパーソナルなもの[Persoenliches]が言葉のなかに入り込まざるを得ないのです。このことが一方ではギーターに、他方ではパウロ書簡に、基調（トーン）を、様式を与えています。これはいずれの作品においてもそこここで、いわばどの行においても私たちの前に現れます。芸術的な完成はそれが成熟したときにはじめて何かを達成することができますが、発展の始まりにあるとき、それは何か混沌としたものとして現れてくるのです。

これらすべてはなぜこうなのでしょうか。私たちがギーターの力強い冒頭に注目するとき、この問いは私たちに答えてくれます。この冒頭の特徴はもうお話ししましたね、私たちは、親族たちの軍が戦いで対峙しているさまを見ました、戦士が戦士に対峙するけれども、勝者と敗者は血縁であらねばならないことを見ました。私たちの前にあるのは、霊視性が結びついていた古い血の親和性から、まさに近代を特徴づける血の分化と混合への移行の時です。私たちは、人間の外的な身体性の変化とその結果生み出される認識の変遷と変化に関わらなければなりません。人類進化のなかに別種の混血が、血の別の意味が登場してくるのです。私たちがあの古い時代から新たな時代への移行を研究しようと思うならーー私の小著『血はまったく特別の液汁（ジュース）だ』をまたもや思い出しますがーー私たちはこう言わなくてはなりません、古い時代の霊視は、血がいわば種族の内部にとどまっていたことに結びついていた、他方、新たな時代は種族の混合、混血に由来する、それによって古い霊視は滅ぼされ、物質体に結びついた新たな認識が到来した、と。

ギーターの冒頭で私たちに、外的なもの、人間の姿に結びついたものが示されます。サーンキヤ哲学はこのような外的な形態変化を好んで観察します、サーンキヤ哲学は、魂的なものーーこれも特徴をお話ししましたねーーをいわば背景にとどめておきます、魂は多数のまま単に形態の背後にあるのです。私たちはサーンキヤ哲学に一種の多元論を見ました。近代のライプニッツ哲学にこれを比較することができます。つまり私たちがサーンキヤ哲学者の魂の身になって考えてみますと、彼のことをこう想像できます、つまり彼は、ここに私の魂がある、これはその外的な体の形態への関係において、サットヴァ状態か、ラジャス状態、あるいはタマス状態のなかに現れる、と言うだろう、と。ーーともあれこれらの形態をこの哲学者は観察します。この形態は変化します、もっとも重要な変化のひとつは、エーテル体の別の使用のなかに現れる、あるいは私たちが特徴づけたような血縁に関する移行によって現れる変化です。このとき外的な形態変化があります。魂がサーンキヤ哲学の観察するものによって触れられることはまったくありません。私たちが、古いサットヴァ時代から新たなラジャス時代への移行、その境目にクリシュナが立っているのですが、この移行の際に考慮されるものに注目したいなら、外的な形態変化でまったくじゅうぶんなのです。このとき考慮されるのは外的な形態変化です。

時代が移り変わるとき、外的な形態変化が常に考慮されました。ペルシア時代からエジプト時代への移行の際、外的な形態変化はエジプト時代からギリシアーラテン時代への移行のときとは異なっていましたが、それはやはりひとつの形態変化には違いありませんでした。原インド時代からペルシア時代への移行もまた異なるものでしたが、やはりこれもひとつの形態変化でした。そうです、古アトランティスそのも

のからアトランティス後の時代へと移行が完了したとき、これもひとつの形態変化にすぎなかったのです。それは形態変化でした。そしてサーンキヤ哲学の規定のみを拠り所としてこの形態変化を追求することもできるでしょう、つまり単に、これらの形態のなかに魂はじゅうぶんに具現する、しかし形態変化はこの魂そのものには近づかない、プルシャは手つかずのままである、と言うことで形態変化を追求することもできるでしょう。ーーこうして、サーンキヤ哲学の概念とともに、サーンキヤ哲学を通して特徴づけられうる独特の種類の変化が得られます。けれどもこの変化の背後にはプルシャが立っています、人間ひとりひとりの個別の（個的な[individuell]）魂的なものが立っています。これについてサーンキヤ哲学では単にこう言われるのみです、個別の魂的なものとしてプルシャはまさに、外的な形態に対してサットヴァ、ラジャス、タマスという三つのグナの関係にある、と。けれどもこの魂的なものは外的な諸形態に触れられることはありません。プルシャは諸形態の背後にあって私たちは魂的なものに注意を喚起させられます、そして、クリシュナがヨーガの主として教授するものにおいてその教えが私たちの魂の前に登場するとき、それはこの魂的なものへの絶えざる示唆なのです。たしかにそうなのですが、この魂はその性質によってどのようであるか、ということがここで認識として私たちの眼前に現れるのではありません。魂をいかに進化させるか、という導きが最高のものなのです、外的な形態の変化は魂的なもの自体の変化ではなく、余韻[Anklang]にすぎません。そして私たちはこの余韻を次のように発見するのです。

人間がヨーガを通じて通常の魂段階から高次の魂段階へと上昇しようとするとき、人間は外的な営みから自由にならなければなりません、外的に行為し認識するものからますますいっそう解放されなければならず、人間は自分自身の観察者とならなければなりません。そのとき、外的なものに打ち勝って高まった彼の魂は内的に自由な状態となります。通常の人間の場合はこうなのです。けれども、秘儀参入して霊視的になった（見者となったhellsichtig wird)ひと、そういう人間の場合は、そういう状態にとどまりません、外的な物質は彼に対峙しないのです。外的物質はそれ自体としてはマーヤー（幻影[Maya]）です。外的物質が現実（リアリティ）であるのは、まさに自分の内的な道具（器官）を用いる人にとってのみです。物質の代わりに何が現れるでしょうか。それは、私たちがいにしえの秘儀参入を目の前に導き出すときに私たちを迎えます。日常においては物質[Materie]、プラクリティが人間に対峙しますが、一方、ヨーガを通じて秘儀参入へと進化してゆく魂に対峙するのは、アシュラたち[Asuras]の世界、デーモン的なものの世界です、人間が闘わねばならないアシュラ界です。物質は抵抗し、アシュラは、闇の勢力は敵となります。しかしこれらすべては本来余韻のなかにのみあり、いわばこのとき何かが魂的なもののなかからかすかに見え、私たちは魂的なものを感受し始めるのです。魂的なものがデーモンたちとの、アシュラたちとの闘いに入るとき、このときはじめてこの魂的なものは自分自身を霊的に（スピリチュアルに）知覚するのです。

小さな規模では私たちにも向かってくるこの闘いを、私たちの言葉では、物質がその霊性において現れるときに霊[Geister]として見えるようになる何かとして表します。魂が秘儀参入する際、私たちが魂のアーリマンとの闘いとして知っているものが、まさに小さな規模で私たちに向かってくるのです。けれどもこれをこのような闘いとして把握することで、私たちはまさに魂的なもののただなかに立ちます。すると以前は単に物質的な霊にすぎなかったものが巨大なものに成長し、魂は強大な敵に直面します。ここで魂的なものが魂的なものに対峙し、個別の[]individuell]魂は広大な宇宙においてアーリマンの王国に対峙するのです。ヨーガにおいて闘う相手は、アーリマンの王国の最低の段階です。しかし今や、私たちの意味において観察することで、アーリマン勢力との、アーリマンの王国との魂の闘いにおいて、アーリマンそのものが私たちに対峙します。サーンキヤ哲学は、外的な物質が優勢になるときの、魂のこの外的物質への関係をタマス状態として知っています。ヨーガを通じて秘儀参入する者は、単にこのタマス状態のなかにいるのみならず、ある種のデーモン的な力、参入者には物質がデーモン的な力に変わっていくのが観えるのですが、このデーモン的な力に対する闘いのなかにもいるのです。私たちの意味においては、魂の関係が、単に物質のなかの霊的なものに対峙しているときのみならず、純粋に霊的なもの、アーリマン的なものに対峙するときにも、私たちは魂を見ます。

サーンキヤ哲学に従えば、ラジャス状態において物質と精神は均衡を保っています、ここでは一方から他方へと揺れ動きます、あるときは物質、あるときは霊が上になり、あるときは物質、あるときは霊が下になるといった具合に。こうした関係を秘儀参入へと導こうとするなら、古いヨーガの意味では、それは直接ラジャスの克服へと、サットヴァへと通じていくでしょう。私たちにとっては、それはまだサットヴァに通じていかず、そこで別の闘いが、ルツィファー的なものとの闘いが始まります。そして今や、私た

ちの考察にとっては、プルシャが私たちの前に立ちはだかるのです、サーンキヤ哲学では暗示されるのみのプルシャが。単に私たちがプルシャを暗示するというだけではなく、プルシャはアーリマンとルツィファーに対する戦闘地域のただなかに立っています。魂的なものが魂的なものに対峙しているのです。はるかな太古への展望のなかでプルシャはサーンキヤ哲学に現れます。私たちが深奥へと、まだアーリマン的なものとルツィファー的なものから区別されない、魂の本質のなかに入り込んでくるものへと入っていくとき、物質的ー実体的なものへの魂的なものの関係がサットヴァ、ラジャス、タマスのなかに得られるのみです。私たちが私たちの意味において事物を観察するとき、今や魂はアーリマンとルツィファーとの間で格闘しつつ激しく活動しています。これは、その完全な大きさにおいてはキリスト教によってはじめて観察されることができたものです。サーンキヤの古い教説にとっては、プルシャはいわばまだ手つかずのままにとどまっています。ここでプルシャがプラクリティをまとうときに生じる関係が描写されるのです。私たちはキリスト教的な時代へ、秘教的キリスト教の根底にあるものへと歩み入ります、そしてプルシャそのものに進入し、魂的なもの、アーリマン的なもの、ルツィファー的なもの、という三重のものに注目することで私たちはこれを特徴付けます。私たちは今や、その格闘に従って魂そのものの内的な関係に注目します。到来せねばならなかったものは、第四期の内部に与えられた移行期に置かれました、ゴルゴタの秘蹟によって刻印される移行期です。

いったい当時何が起こったのでしょうか。第三期から第四期への移行の際に起こったことは、単なる形態変化によって特徴づけられうる何かでした。ところが今や、これ[ゴルゴタの秘蹟によって刻印される移行期に起こったこと]は、プラクリティからプルシャそのものへの移行によってのみ特徴づけられうる何か、次のように言うことで特徴づけられなければならない何かです、つまり、プルシャがいかにプラクリティから完全に解放されるかをひとは感じる、それをその内面性において感じる、と言うことで。人間は単に血の絆（きずな）からもぎ離されるばかりでなく、プラクリティから、あらゆる外面性から解き離たれ、内部においてそれを仕上げなくてはなりません。ここでキリスト衝動が入ってきます。これは全地球進化のなかに登場し得た最大の移行でもあります。このとき、魂の物質的なものへの関係において、つまりサットヴァ、ラジャス、タマスにおいていかなる状況であるのか、という問いがもはや単に生じるだけではありません。ーーこのとき魂はヨーガを通じてタマスとラジャスを超えて高まるために単にタマスとラジャスを克服しなければならないだけではなく、魂はここでアーリマンとルツィファーに対して闘わなければなりません、魂はここで自らに身をゆだねます。このとき、一方で崇高な歌、バガヴァッド・ギーターにおいていにしえの時代のために私たちに示されるものと、他方で新時代のために欠くことのできないものとを、どうしても互いに対決させる必要が生じてくるのです。

崇高な歌、バガヴァッド・ギーターにおいて私たちはこのことに直面させられます。ここでは人間の魂が私たちに示されます。魂はその肉体性、覆いのうちに宿っています。これらの覆いを特徴付けることができます。これらは絶えざる形態変化のなかにあるものです。魂のそこに生きるありようそのままに、魂は通常のありようにおいてはプラクリティのなかに編み込まれ、プラクリティの内部に生きています。そしてヨーガにおいてこの魂は、覆われているものから自らを自由にし、覆われているものを克服します、そして霊の圏内に至り、これらの覆いから自らを完全に自由にするのです。

キリスト教が、ゴルゴタの秘蹟がはじめてもたらしたものを、私たちはこれに対置します。ここでは魂が単に自らを自由にするということだけでは十分ではありません。と申しますのも、魂がヨーガを通じて自由になれば、魂はクリシュナの姿を目にすることができ、クリシュナはその威力のすべてをもって魂の前に立つでしょうが、そのクリシュナというのは、アーリマンとルツィファーがその猛威のすべてを獲得する前のクリシュナであったのですから。このときはまだ、私たちが昨日描き出しましたように崇高なに姿を見せたクリシュナのかたわらに、クリシュナの左右にアーリマンとルツィファーが立っているということを、善き神性が覆っているのです。人間がまだ物質のなかに下降していなかったので、古い霊視にはこれが可能でした。もはや覆うことはできません。魂が単にヨーガを遂行するなら、魂はアーリマンとルツィファーに直面し、これらとの闘いを受け入れなければならないでしょう。そして魂は、単にタマスとラジャスのみならずアーリマンとルツィファーを打ち負かしてくれる盟友[Bundesgenosse]を持つときにはじめて、クリシュナのかたわらに身を置くことができるでしょう。これがキリストなのです。このように私たちは、英雄クリシュナが登場した当時、体的なもの[Leibliches]がいかに体的なものから自らを解き放ったか、あるいはこうも言えるかもしれません、いかに体的なものが体的なもののなかで暗くなっていたかを

見ます。しかし他方において私たちは、魂が自らに身をゆだね、闘いにさらされるもっと圧倒的なありさまも見ます、ゴルゴタの秘蹟が起こった時代に魂の領域でのみ見えるようになる何かを見るのです。

誰かが次のように言うであろうことも私はじゅうぶん想像できます、メンシェントゥム（人間存在、人間性、人間の本質[Menschentum]）の最高の理念、メンシェントゥムの最高の完成がクリシュナにおいて我々に見せられるときより以上に圧倒的ものなどあり得るだろうか、と。もっと高次のものが存在しうるのです。そしてそれは、私たちが単にタマスとラジャスに対抗するだけでなく、霊のなかの勢力にもはじめて対抗してこのメンシェントゥムを獲得せねばならないとき、私たちの側につき私たちに浸透しなければならないものです。それがキリストなのです。そして、誰かがクリシュナ表現にのみ最高のものを見たいと思うなら、もっと偉大な何かを見ないのはその人自身がそうできないからです。

さらに、キリスト衝動がクリシュナ衝動に優ることは、クリシュナ衝動の場合、クリシュナに受肉した存在がクリシュナの人間性[Menschheit]全体に受肉したという点にも現れています。このときクリシュナはヴィスヴェーダの息子として生まれ、成長します。けれども彼の人間性全体にあの最高の人間的衝動が体現されます、私たちがまさにクリシュナとして知っている衝動が受肉するのです。私たちがルツィファーとアーリマンに対峙するときにーーこのように対峙することはようやく始まったばかりです、例えば私たちの神秘劇に描写されているすべてのことは、未来の人間にとって魂的に把握できるものでしょうからーー私たちの側に立つ衝動、これは人間性自体がその衝動にとってはあまりに小さいものでなくてはなりません、ツァラトゥストラ（ゾロアスター）が宿りうるような肉体にさえも直接宿ることはできず、このような肉体でもその進化の高みに達したときにのみ、つまりこの肉体が三十歳に達したときにのみ宿ることができたようなそういう衝動なのです。ですから、キリスト衝動は生涯全体を満たすことはなく、人間の生のもっとも成熟した期間のみを満たすのです。ですからキリスト衝動はイエスの肉体に三年しかとどまりませんでした。キリスト衝動がより高次のものであることはさらに、キリスト衝動は、クリシュナ存在が誕生のときからそうであったようには人間の体のなかに直接生きることができないと言う点にも現れています。このクリシュナ衝動に対するキリスト衝動の卓越がさらにいかに示されるか、これについてはさらにお話ししていかなければならないでしょう。けれども今までに特徴づけられたことから理解し感じ取っていただけるでしょうが、それは事実、私たちの前に現れてくる偉大なギーターとパウロ書簡との関係のようなものであらざるを得ないのです。つまり、ギーターの描写全体は、それが過ぎ去った多くの時代の成果であるために、それ自体完全でありうること、そしてパウロ書簡は、それが次の、とは言えもっと完全なもっと包括的な時代への最初の萌芽であるために、ずっと不完全なものであらざるを得なかった、ということです。このように、宇宙の経過を呈示するひとは、なるほどギーターに対してパウロ書簡の不完全なところ、これは非常に重要な不完全さで、もみ消されることがあってはならないのですが、この不完全さを認めなくてはなりません、ただ、なぜこのような不完全さがそこになければならないのかも理解しなくてはならないのです。

□編註

☆１　東洋の伝説：太古のインドの神々と英雄たちの伝説は紀元前500年から紀元後500年の間にいわゆるプラーナ[puranas]に書き留められた。膨大な18篇のプラーナは全インド神話を含む。プラーナの多くはヴィシュヌ神とそのさまざまな化身に捧げられている。ヴィシュヌークリシュナ伝説はバガヴァッタ・プラーナで語られる。

☆２　クリシュナがアルジュナに、アシュヴァッタ樹[…]の性質であるものを[…]明らかにする：第10の歌の冒頭。

＊アシュヴァッタ樹は通常菩提樹とされる（yucca）。

☆３　以前の講義で、人間はある意味で反転させられた植物です、と申し上げた：シュタイナーの連続講義『神殿伝説と黄金伝説』（1905年5月29日ベルリン GA93）、『キリスト教の秘儀』（1907年2月16日ライプツィヒ GA97）その他を参照のこと。

☆４　[…]力は断念だ：第15歌ー３参照（字義通りではない）。

第５講

1913年1月1日、ケルン

私たちはこのチクルス（連続講義）で、二つの重要な人類の記録に魂の前を通過させましたーー限られた講義日数のなかでできうる限りのとても短い特徴づけにすぎませんがーー、そして、この二つの重要な人類記録、崇高なギーターとパウロ書簡が成立しうるためには、どのような衝動が人類進化に流れ込まなければならなかったかを見ました。私たちの理解にとっておそらくもっと重要なのは、ギーターの全精神とパウロ書簡の精神の間に根本的な相違を示すことです。

ギーターにおいては、クリシュナが弟子アルジュナに与えることのできる教えが私たちに向かって現れてくる、と私たちはすでに言いました。このような教えは、あるひとりの者に与えられます、あるひとりの者に与えられなければならないのです、と申しますのも、まさにギーターにおいて私たちに向かって現れてくるようなこういう教えは、根本的に言って、内密な教えだからです。とは言えこれに対して、これらの教えはギーターのなかに見られるのだから今日どんなひとにも近づきうるものだ、と反論できるように思えます。ギーターが記された時代においてはむろんそうではありませんでした。これらの教えはすべての耳に達していたわけではありません、当時こういう教えは口頭による伝授の対象だったからです。あのいにしえの時代にあっては、師はしかるべき教えを伝える弟子の成熟を見通すことに心をくだいていました。このような成熟に常に目が向けられていたのです。

現代においては、いかなるしかたであれいったん光のもとに公開されたあらゆる教義教説について、もはやそういったことは不可能です。私たちは霊（精神）生活がある意味で一度公開される時代に生きています。現代にあってはもはやいかなる神秘学[Geheimwissenschaft]も存在しないかのように、というわけではないのですが、この神秘学は、たとえばこれを印刷させないとか普及させないといったことによって神秘学であることはできません。この現代においてもじゅうぶん神秘学は存在しうるのです。たとえばフィヒテ（☆１）の知識学[Wissenschaftlehre]は、誰もが印刷されたものを持つことができるのにも関わらず、まさに秘密教義です。結局のところヘーゲルの哲学も秘密教義です、これに精通するひとはきわめて少なく、秘密教義であり続けるための多くの手だてさえ内に有しているからです。今日の時代においては、多くのことにこれがあてはまります。フィヒテの知識学あるいはヘーゲル（☆２）の哲学、これらは秘密教義であり続けるための非常にシンプルな手だてを持っています、たいていの人は最初の数ページ読んで理解できず眠くなる、というように書かれているからです。それによってこういう事柄自体が秘密教義であり続けます。現代において、多くの人々が知っていると信じている非常に多くのことについても同様です。
人々はそれを知りません、人々に知られないことによってものごとはまさに秘密教義であり続けるのです。そして結局のところ、ギーターのなかに見られるような事柄も、たとえそれが印刷によってきわめて広汎に知られることができるようになったとしても、秘密教義であり続けます。と申しますのも、今日ギーターを手にするあるひとは、そのなかに自分の人間としての内面の進化に関する偉大で圧倒的な啓示を見、また別のひとは、そのなかに単に興味深い文学作品のみを見る、するとギーターのなかに表出されるあらゆる概念、感情は、そのひとにとって単なる陳腐なものに変わるからです。なぜならやはり、誰かが、ギーターのなかにあるとは言っても自分からはかけ離れたものであるかもしれないものを、たとえばギーターの言葉を用いて自分で表現するすべを心得ているにしても、ギーターのなかにあるものをその人がほんとうにその人のなかで消化し理解し尽くした、と信じてよいわけではないからです。このように、多くの点で事柄自体がその高さにより、共有されることから守られています。

このギーターのなかで詩的に仕上げられている教えは、あるひとりの者がそれを通じて魂のなかで上昇し、ついにはヨーガの主クリシュナとの出会いを体験したいと思うときに自ら実行し、体験しなければならないような教えです。つまり、それは個別的な（特別な[individuell]）事柄、偉大な師がひとりの者に向ける何かなのです。ーー私たちがパウロ書簡の内容をこの観点から観察してみるとき、事情は異なります。ここでは、すべては教区（民）全体の問題[Gemeindesache]、すべては根本において多数に向けられた事柄だ、ということがわかります。と申しますのも、クリシュナの教えの本質であるきわめて内密な神髄に注目するとき、私たちはこう言わざるを得ないからです、クリシュナの教えを通じて体験するものを、個々の魂の厳しい孤独のなかでひとは自ら体験する、そして孤独な魂の巡礼としてクリシュナと出会うことが

できるのも、この道を原初の啓示と原体験へと立ち返って見出すときにのみである、と。クリシュナが与えることのできるものは、どのひとりひとりにも与えられねばなりません。

キリスト衝動を通じて世界に与えられた啓示の場合はそうではありませんでした。キリスト衝動はそもそも最初から、全人類に向けられた衝動と考えられます、そしてゴルゴタの秘蹟は、ただひとつの魂にとってのみ価値を持つ行いとして成就されたのではありません、私たちが全人類を地球進化の起源から終わりまでよく考えてみるなら、ゴルゴタにおいて起こったことはあらゆる人間のために起こったのです。これは最大規模における共通事項です。ですからパウロ書簡の文体は、すでに特徴づけされたことすべてを度外視するにしても、崇高なギーターとはまったく異っているのです。

ひとつクリシュナとアルジュナの関係を生き生きと思い描いてみましょう。クリシュナはアルジュナに、ヨーガの主として、クリシュナを見出すためにいかに魂において段階的に上昇していくことができるか、いわば明解な指示を与えるわけです。これに対して、パウロ書簡のとりわけ重要な箇所、ある教区民が、あれこれのことが真実であるかどうか、パウロが教えたことに対してこれらが正しい見方として有効であるかどうかをパウロに向かって問いかける箇所を思い浮かべてみましょう。すると私たちは、パウロが与える教示のなかに、その大きさにおいてはもちろん様式的、芸術的にも、崇高なギーターのなかに私たちが見出すものにまったく匹敵しうる箇所を発見します。けれども同時に私たちは、まったく異なる調子（トーン）をも見出します、まったく異なる種類の魂的な感情からすべてが語られているのがわかるのです。これは、人間の集団のなかに存在する人間のさまざまな天分（才能）がいかに共同して働かなければならないかをパウロがコリント人たちに向かって書いている箇所（☆３）にあります。

クリシュナはアルジュナに言います、お前はかくかくしかじかであらねばならない、かくかくしかじかのことを為さねばならない、そうすれば魂のありようにおいてお前は一段一段上昇していくだろう、と。ーーパウロはコリント人たちにこう言います、あなたがたのうちのひとりはこういう天分を持ち、また別のひとりはああいう天分を持ち、第三のひとはこういう天分を持ちますが、これらがひとりの人間の身体の部分部分のように共同して働けば、これは霊的にもひとつの全体を生み出すでしょう、霊的にまったくキリストに浸透されうる全体を。ーーつまり、事柄そのものを通じてパウロは共同して働く人間たち、つまり人類に照準を定めています。そして重要な機会に、彼は多数に向かいます、つまり、いわゆる異言[Zungenreden]の天分が問題となるときです。

私たちがパウロ書簡のなかに見出すこの異言とは何なのでしょうか。異言とは、新たなしかたで、しかも人間の意識全体をもってこの現代に再び私たちに現れてくる古い霊的な天分の名残にほかなりません。と申しますのも、私たちが私たちの秘儀参入方法のなかでインスピレーションについて語るところでは、現代においてインスピレーションにまで突き進むひとは、ちょうど明瞭な意識を日常的な知性と感覚知覚に結びつけるように、明瞭な意識をこのインスピレーションと一致させる、ということだからです。古い時代においては事情は異なっていました。当時、当の参入者は、高次の霊存在たちの道具のように語りました、高次存在たちは参入者の器官を用い、高次の事柄を参入者の舌を通じて言い表したのです。当時はひとりひとりが、その人自身にはまったく理解できないことを語ることができました。道具が直接理解する必要のない霊的世界からの報せがやってきました、そしてまさにコリント人たちのところでそのようなことが起こったのです。何人かの人々がこういう異言の天分を得る、という状況になったのです。こうしてその人々は霊的世界からあれこれのことを告げ報せることができました。

さて、このような天分については、人間がこれを持つとき、このような天分を通じて啓示できるものがいかなる状況においても霊的世界からの啓示である、ということです。それでもやはり、ある者がこう言い、別の者がああ言う、という場合もありました、霊的な領域というのは多様なものだからです。ある者はこの領域から、別の者はまた別の領域からインスピレーションを与えられるという状況もあり、それで啓示がまったく一致しない、ということもあり得ます。全意識をもって当の世界のなかに赴くことができてはじめて、一致を見出すことができるのです。ですからパウロはこう警告しています、異言を語ることのできる人たちがいますし、異言を解釈することのできる別の人たちもいます。彼らは右手と左手のように協力して働かなくてはなりません、単に異言を語る人の言うことを聴くだけではいけません、異言の天分は持っていないかもしれないが、それぞれがあれこれの霊的領域から何を降ろしてくることができるか解釈し、認識できる人。そういう人の言うことにも耳を傾けなさい、と。ーーこのようにパウロはここでも、人々が共に働くことによって実現する教区の事柄を奨励しています。

そしてまさにこの異言に結びつけて、パウロはあの説明を語ります、申し上げましたように、ある関連においてはすばらしい、その力強さにおいては昨日議論されましたのとはまた別の点でギーターの告知に匹敵しうるほどすばらしいあの説明です。

パウロは言います。「霊感を授かった兄弟たちについては（☆４）、私はあなたがたにぜひ知っておいてほしいのです。あなたがたが異教徒であった頃のことを覚えていますね、もの言わぬ偶像があり、盲目的な衝動のままにその偶像へとあなたがたは引き寄せられたでしょう。ですからあなたがたにはっきりと言います、神の霊のなかで語る人は、イエスは呪われてあれ、と言うことは少なく、聖霊によるのでなければ、イエスを主と呼ぶことはできないのです。

さて、恩寵の賜物（天分)[Gnadengabe]にはさまざまなものがありますが、それは《ひとつの》[原文は斜字]霊です。人間の仕事にはさまざまなものがありますが、それは《ひとりの》主です。ひとりひとりの人間の持つ力にはさまざまなものがありますが、これらすべての力のなかに働くのは《ひとりの》神なのです。けれどもひとりひとりに役立つ霊の告知はいかなるひとにも与えられます。このようにある人には預言を語る力が与えられ、別の人には学問の知識が与えられます。さらにまた、信仰のなかに生きる精神たちも見出せますし、別の人々は癒しの天分を持ち、また別の人々は預言の天分を持ち、別の人々は人間の特徴を見通す天分を持ち、別の人々は異言の天分を、さらにまた別の人々は異言を解釈する天分を持ちます。しかしこれらすべてのなかには《ひとつの》霊が働き、この霊が各人にふさわしいものをそれぞれに分け与えているのです。

と言いますのも、体は《ひとつ》でも多くの部分から成り、これらの部分がすべて一緒になってひとつの体を形作りますが、キリストの場合もこれと同様だからです。と言いますのも、ユダヤ人であれギリシア人であれ、奴隷であれ自由民であれ、私たちは皆、ひとつの体のために霊によって洗礼を施され、私たちは皆、ひとつの霊を飲まされたからです、ちょうど体もひとつの部分からではなく多くの部分から成るように。たとえ足が、私は手ではないから私は体の一部ではない、と言っても、足はやはり体の一部でしょう。たとえ耳が、私は目ではないから私は体の一部ではない、と言っても、耳はやはり体の一部でしょう。全身が目だけであったら、聴覚はどこに宿るというのでしょう？全身が聴覚だけであったら、嗅覚はどこに宿るのでしょう？そこで神は、神が良しとされるままに、各部分をひとつひとつ特別なものとして体に置かれたのです。ひとつの部分しかないとしたら、体はどこに残るというのでしょう？けれども多くの部分があっても、やはり体は《ひとつ》だけです。目が手に、お前はいらない、ということは許されません。頭が足に、お前はいらない、ということも許されません。むしろ、体のなかで一見弱い部分のほうが不可欠であり、私たちがあまり注意を払わない部分がとくに重要であることが明らかになります。

神は体を組み立てられ、取るに足らない部分に意味を与えられました、体に分裂が起こらず、あらゆる部分が調和的に共同し、互いに気づかうためです。それでひとつの部分が損なわれれば、すべての部分が共に損なわれ、ある部分が健康であれば全ての部分が共に歓呼の声を挙げるのです。けれどもあなたがたは」ーー

パウロはコリント人たちに向かってこう言います、「キリストの体であり、そしてあなたがた皆がその部分を形作るのです。そして神は教区のなかで、ある人々を使徒として置かれ、別の人々を預言者として置かれました。第三の人々を教師として、第四の人々を奇蹟による癒し手として、第五の人々を別の助力をする者として、第六の人々を教区に統制をもたらすために、第七の人々を異言のために神は置かれました。すべての人々が使徒とされるでしょうか？皆が預言者とされるでしょうか？皆が教師、皆が癒し手、皆が異言を語らされるでしょうか？あるいは皆が異言を解釈させられるでしょうか？ですから、さまざまな恩寵の賜物が共同して働くのが正しいのです、多ければ多いほどいっそう良いのです。」

それからさらにパウロは、ひとりひとりのなかにあるけれども、教区全体においても働き、体の力が体の各部分を集め結びつけるように教区の個々の部分全部を集め結びつける力について語ります。パウロがさまざまな部分としてある人類に向かって語った以上に美しいことを、クリシュナといえどひとりの人間に語ってはおりません。さらにパウロは、体が個々の部分を統一しているようにさまざまな部分を統一するキリストの力について語ります。どの部分にもある生命力のようにひとりひとりのなかに生きることができるけれども、やはり全教区の全体のなかで再び生きる力、この力をパウロは力強い言葉で特徴づけます。

「しかし私はあなたがたに他のどの道よりも高い道を示したいのです（☆５）。

私が人間の舌であるいは天使の舌で霊から[異言を]語ることができても、愛が欠けていたら、私の話は音を立てる銅鑼（どら）、鳴り響く鈴です。
そして私が預言をすることができ、あらゆる秘密を明かにし宇宙のあらゆる認識を伝えることができるとしても、そして私が信仰の全てを身につけ山をも動かすことができるとしても、愛が欠けていたら、すべては無に等しいでしょう。
そして私が霊の賜物のすべてを分け与え、そうです、私自身の体を捧げて燃やし尽くそうとも、愛が欠けていたら、すべては無駄でしょう。
愛はいつも在り続けます。愛は慈悲深く、愛は妬みを知りません、愛は驕らず、愛は自惚れを知りません、愛は礼儀を知るものを損なわず、愛は利益を求めず、愛はそそのかされず、愛は誰も恨まず、不正を喜ばず、真実のみを喜びます。
愛はすべてを包み、あらゆる信仰に流れ込みます、すべてを望み、どんなところでも忍耐するのです。
愛があるなら、愛はけっして滅びません。何かを預言しても、それが成就すれば預言は去ります、何かを異言として語っても、それがもはや人間の心に語りかけることができないなら、異言は止みます、何かを知っても、知られるものが尽きてしまえば、知ることも止みます。
認識はすべて半端なもの、預言はすべて半端なものだからです。
ですからやはり、完全なものがやってくると、半端なものは去るのです。
私が子どもだった頃、私は子どものように話しました、私は自分が子どものように考えている、と感じていました。今私は成人し、子どもの世界は去りました。
今、私たちは鏡のなかに暗い輪郭しか見ませんが、いつの日か私たちは顔と顔を突き合わせるように霊を観ることでしょう。今のところ私の認識は半端なものですが、いつの日か、私自身がどのようであるか、完全に知ることでしょう。
さて、信仰は残り、希望は確実に残り、愛は残ります。けれどもこれらのうちでもっとも大きなものは愛です、ですから愛は上に置かれるのです。
と言いますのも、あなたがた皆に霊の賜物がもたらされるにせよ、預言を知っている者も、愛を切に求めなくてはならないからです。
と言いますのも、誰かが異言を語ろうとも、彼は人々のもとで語るのではなく、神々のもとで語るからです。彼が霊の秘密を語るので、誰も聴き取ることができないのです。」
このように、パウロは異言の本性を知っています。パウロは、異言を語る者は霊的世界へと連れ去られている、と言うのです、異言を語る者は神々のもとで語る、と。
「預言をするものは、教化するために、戒めるために、慰めるために、人々とともに語ります、異言を語るものは、ある意味で自己満足していますが、預言を語る者は教区民たちを教化します。
あなたがた皆が異言を語るということになっても、あなたがたが預言をすることのほうがはるかに重要です。教区民に理解させるために、異言を語る者が自分の異言を自分でも認識できる、という状態でないなら、異言を語る者よりも預言をする者がまさっているのです。
兄弟たちよ、私が異言を語る者としてあなたがたのところに来ても、私の異言が預言として、教えとして、啓示としてどういう意味であるかをあなたがたに言わないとしたら、私はあなたがたにとって何の役に立つでしょう！
音が明瞭に分かれていないなら、私の異言は笛やツィターのようなものです。ツィターや笛が区別できる音を出さなかったら、ツィターの演奏か笛の演奏かどうやって区別せよと言うのでしょう。そして喇叭（らっぱ）が不明瞭な音を出すなら、誰が闘いの支度をする気になるでしょう。
あなたがたも、異言に明瞭な語りを結びつけることができないなら、これと同じです、すべては空中に向かって語られることになるからです。」
これらすべては、さまざまな霊の賜物が教区の成員たちに分け与えられるべきこと、教区の成員は個人[Individualitaeten]として共同して働かなければならないことを私たちに示します。同時に私たちは、パウロの啓示が、それが登場してくる人類進化の時点によって、クリシュナ啓示[Krishna-Offenbarung]とは根本的に区別されなければならない地点に立っているのです。
クリシュナ啓示はひとりの[einzeln]人間に向けられますが、結局のところ、ヨーガの主が手本を示してくれるような魂の道を上へと辿ることができるまでに成熟した者には誰にでも向けられるのです。このとき

私たちはますますいっそう人類の太古の時代へと遡っていくよう指示されます、クリシュナの教えの意味において、霊において、この太古の時代へとひとは再び立ち返ることを欲するのです。その頃ひとびとはまだあまり個別化されて[individualisiert]おらず、どのひとにも同じ教えと指導で良い、と前提することができました。

パウロはひとりひとりの差異が現れた時点、特別の能力、特別の天分を備えたひとりひとりの違いが実際に出てこなければならなかった時点で人類に対峙していました。もはや、個々のどの魂のなかにも同じものを注ぎ込むことができると予想することはできなくなりました、不可視的にすべての上に君臨するものを示唆しなければならなかったのです。この、ひとり特別の人間としての人間のなかにはないけれどもどのひとりひとりのなかにも存在しうるもの、これがキリスト衝動なのです。キリスト衝動とは人類の新たな集合魂のような何かではありますが、この人類によって意識的に求められるような集合魂なのです。

このことを明らかにするために、そうですね、霊的世界において、クリシュナの弟子の何名かがどう見えるか、そして自らの内奥でキリスト衝動に心動かされた数名の人々はどう見えるか、ちょっと思い描いてみましょう。クリシュナの弟子たちは、ヨーガの主から分け与えられた同じ衝動をそれぞれ自らのうちに燃え上がらせています。霊的生活においてある人は別の人によく似ています。ある人にも別の人にも同じ指導がなされたのです。キリスト衝動に心動かされた人たちは、肉体を去って霊的世界にあっても、ひとりひとりが特別の個性[Individualitaet]を、異なった霊の力を備えています。ですから霊界にあってもある人はこの仕事、また別の人はあの仕事、というふうに責任を負っているのです。そして、ひとりひとりがこれほど個性的であろうとも、ひとりひとりの魂のなかに自らを注ぎ込む指導者は、キリストです、ひとりひとりの魂のなかにあると同時にすべての上に浮かぶキリストなのです。ここでは魂が肉体を去ったときにもなおさまざまな教区があるのです、他方、クリシュナの弟子たちは、魂がヨーガの主から導きを得ると、ひとつの一元的なもの[ein Einheitliches]となります。しかしながら、人類進化の意味とは、魂がますます多様なものになっていくことなのです。

ですから、クリシュナは別のしかたで語らざるを得ないのです。クリシュナは、根本においてはーークリシュナがギーターで告げ知らせるようにーー弟子に語ります。パウロは異なった話し方をします。パウロは本来どの人間にも語りかけています、ですから、ひとりひとりがその成熟の度合いによって、あれこれの受肉段階において顕教的なものにとどまるか、あるいは秘教的なものに入っていくことができ、秘教的キリスト教にまで自らを高めていくかどうか、ということは個々人の進化の問題なのです。キリスト教（クリステントゥム）においてひとはさらなる進展を重ね、秘教的な高みにまで達することができます、けれども、クリシュナの教えとは別の何かを出発点とするのです。クリシュナの教えにおいては、自分のいる地点から人間として出発し、個として、ひとりある者として、魂を高めます。キリスト教においては、そもそもさらなる道を歩む前に、キリスト衝動と関係を得ること、この衝動がまず第一に他のすべてに先行することが出発点となるのです。

クリシュナへの霊的な道を歩むことができるのは、クリシュナの指示を守る者だけです、キリストへの道は、どの人も歩むことができます。キリストは、およそ人間であって秘儀への関係を得ることができるすべてのひとのために秘儀をもたらしたからです。これはしかし外的な何か、物質界で成就された何かです。ですから、最初の第一歩は物質界で起こる一歩なのです。これが本質的なことです。

キリスト衝動のこの世界史的な意味を見通すなら、あれこれのキリスト教的信仰告白から出発する必要はまったくありません、まさにこの現代においては、まったくキリストに敵対する立場から、あるいはキリストに対して無関心な立場を出発点とすることすら可能なのです。現代の精神的生活において真に与えられ得るもののなかに深く沈潜するとき、唯物論の矛盾と愚昧さを見抜くとき、最初から特に信仰告白を出発点にしなくても、現代においてはあるいはもっとも純粋にキリストに導かれるとも言えるのです。ですから、ここでは特別なキリスト信仰告白を出発点としている、と私たちのグループの外部のひとたちに言われるなら、それはとりわけまずい中傷とみなされてよいのです、と申しますのも、問題は何らかの信仰告白からの出発ということではなく、精神生活そのものの諸条件から出発すること、そして回教徒であれ仏教徒であれ、ユダヤ人であれヒンドゥー教徒であれ、あるいはまたキリスト教徒であれ、いかなる人も、キリスト衝動を、人類進化にとってそれが持つ意味全体において理解することができる、ということだからです。しかし同時にこれは、パウロの見解と叙述全体をもっとも深いところで貫いているものであり、この点においてパウロはまさしく、世界においてキリスト衝動を最初に告知するための音頭取りをす

るパーソナリティなのです。
サーンキヤ哲学がいかに形態変化、プラクリティに関連するものと取り組むかを私たちが述べたとき、私たちはこう言ってよかったのです、パウロはその意味深い書簡の根底にあるすべてのものにおいて、まったくもってプルシャを、魂的なものを扱った、と。生成について、人類進化全体を通じてさまざまに展開していく魂的なものの運命について、パウロの場合私たちはまったく明確で深遠な説明を見出します。
東洋的な思考がまだ成し遂げることができたものと、パウロにおいてすぐさまかくもすばらしく明瞭に私たちに向かって現れてくるものとの間には、根本的な違いがあります。すでに昨日指摘されたことですが、クリシュナにおいてはすべてが、人間が形態変化から抜け出していく道を見出すということにかかっています。けれどもプラクリティは魂とは疎遠な何かのように外部にとどまっています。こういう東洋的な進化の内部では、東洋的な秘儀参入の内部においてすら、あらゆる努力は、物質的な存在[Dasein]から自由になること、自然として外部に拡がっているものから自由になることを目指すのです。と申しますのも、自然としてそこに拡がっているものは、ヴェーダ哲学の意味ではマーヤー（幻影、仮象）として現れるからです。外部にあるものすべてはマーヤーであり、ヨーガはマーヤーから自由になることです。私たちも示したことですが、人間は、為し、行い、欲し、考えるものすべて、欲求や思考の対象となるすべてから自由となり、外面性であるものすべてに魂として勝利することがまさにギーターにおいては求められているのですから。人間の行う営みをいわば人間自身から落とし、人間は自ら自身のうちに安らい、自身のうちで自足せよ、というわけです。このように、誰であれクリシュナの教えの意味で進化したいと願うひとの念頭にもあることは、根本的に言って、いつかパラマハムサ[Paramahamsa]、すなわちあらゆる物質的存在を離れ去り、彼自身がこの感覚世界の内部で行為として行ったすべてに打ち勝つ高次の秘儀参入者のような何かになることです、純粋に霊的な存在のなかに生き、感覚的なものを克服してもはや再受肉への渇望がなくなり、営みとしてこの感覚存在に習熟したものすべてにもはや関わりを持たないまでになった秘儀参入者のような何かに。つまりそれはこのマーヤーから抜け出すこと、いたるところで私たちに向かってくるこのマーヤーに勝利することなのです。
しかしパウロにおいてはそうではありません。パウロの場合はこうなのです、彼がこういう東洋的な教えに向き合ったとしたら、彼の魂の深い奥底において何かが次のような言葉を呼び起こすことでしょう、いかにも、お前は外でお前を取り巻いているすべて、お前がかつて外部で行ったすべてからも抜け出して進化したいと思っている。お前はすべてを置いていきたいのか？いったいすべては神のみわざ[Gotteswerk]ではないのか、お前が抜け出そうと欲するすべては神的に霊により創造されたものではないのか？お前がそれを軽蔑するなら、お前は神のみわざを軽蔑しているのではないか？いかなるところにも神の顕現が神の霊が生きているのではないか？まずお前自身の営みのなかに愛し信仰し帰依しつつ神を示そうとはしないのか、それでいて、神のみわざであるものに勝ち誇るつもりなのか？
パウロによって語られてはいませんが彼の魂の底で働いているこの言葉を私たち自身が魂の奥深くに書き記すのが良いでしょう、と申しますのも、そこには私たちがまさしく西洋的な啓示として知っているものの重要な神髄が表現されているからです。パウロ的な意味においても私たちは私たちを取り巻いているマーヤーについて語ります。なるほど私たちも、いたるところでマーヤーが私たちを取り巻いている！と言うでしょう。けれども私たちはこう言うのです、いったいこのマーヤーのなかには神の顕現がないのか、すべては神的ー霊的なみわざではないのか、いたるところに神的ー霊的なみわざがあるということを理解しないのは冒涜ではないのか？と。今や新たな問いが加わります、なぜこれがマーヤーなのか、なぜ私たちは私たちの周りにマーヤーを見るのか、という問いが。ーー西洋はすべてがマーヤーであるかどうか、という問いにとどまりません、なぜマーヤーなのか、が問われるのです。ここで、私たちの魂的なもの、プルシャの中心にまで入り込んでゆく答えが生じます、魂がかつてルツィファーの威力に屈したので、魂はすべてをマーヤーのヴェールを通して見るのだ、魂は魂としてあらゆるものの上にマーヤーのヴェールを拡げるのだ、という答えが。ーー私たちがマーヤーを見るということは、いったい対象の罪なのか？否。私たちがルツィファーの威力に屈しなかったら、魂として対象は私たちにその真実の姿を現すだろう。対象が単にマーヤーとしてしか私たちに現れないのは、私たちがそこに拡がっているものの根底を見ることができないからだ。これは、魂がルツィファーの威力に屈したことが原因である、これは神々の罪ではなく、自分の魂の罪なのだ。お前魂はお前にとって世界をマーヤーにしてしまった、お前がルツィファーに屈服したことによってだ。

このような定式化の最高の精神科学的理解から下降して「感覚は欺かないが、判断は欺く」（☆６）というゲーテの言葉までは一直線です。俗物や狂信者たちはゲーテを、ゲーテのキリスト教を思うさま論難するがよろしい、それでも、やはりゲーテが、自分はきわめてキリスト教的な人間のひとりであると言うことは許されるでしょう（☆７）、なぜなら、「感覚は欺かないが、判断は欺く」というこの定式に辿り着くほど、ゲーテはその本質の奥深くでキリスト教的に考えているからです。魂の見るものが真実でなく、マーヤーとして現れるのは、魂の罪です。ここでオリエンタリスム（東洋主義 Orientalismus）においては単純に神々自身の行為のようにそこにあるものが、ルツィファーとの大いなる闘いの起こる人間の魂の深みへと転じられます。

私たちがオリエンタリスムを正しく観察してみると、このようにオリエンタリスムは、まさにこのことによってある意味で唯物論なのです、マーヤーの霊性を認識せず、物質的なものから抜け出そうとするがゆえにです。パウロ書簡を貫いて脈打ち、未来において全地球上に目に見えて拡がってゆくであろうものは、魂的な教えなのです、たとえまだ萌芽のかたちでしかなく、そのため現在のようなタマス時代には見誤られることがあるとしてもです。マーヤーの特殊な性質についてこのことが理解されなければなりません、そうしてはじめて、人類進化の歩みのなかで肝心なことは何かを深いところで理解できます。そうしてはじめて、パウロが最初のアダムについて語るとき、パウロが何のことを言っているのか理解できるのです、魂においてルツィファーに屈服し、そのためにますますいっそう物質のなかに巻き込まれてしまった、すなわち誤った物質体験に巻き込まれてしまったということにほかならないのですが、そういう最初のアダムについてです。神の創造として外部にある物質は良いものです。そこで起こっていること、それは良いことなのです。人類進化の経過のなかで魂がそこで体験するもの、これはどんどん貧しいものになっていきました、なぜなら魂は最初にルツィファーの威力に屈したからです。ですからパウロはキリストを第二のアダムと呼ぶのです（☆８）、なぜならキリストはルツィファーの誘惑を受けずに世界に登場し、人間の魂のあのような指導者にして友人であることができるからです、キリストは人間の魂を徐々にルツィファーから引き離し、つまりキリストとの正しい関係に導くということです。

パウロは、秘儀参入者として知っていたことすべてを、彼の生きていた時代には人類に伝えることはできませんでした。けれども彼の書簡を自らに作用させるひとは、これらの書簡が、外的に表明しているものよりも多くを深いところで語っていることを洞察することでしょう。つまり、パウロは教区に対して話さなければならず、その教区の知性を顧慮しなければならなかったということです。そのため、彼の書簡のなかには明かな矛盾のように見えるものもあります。けれども深部へ入り込んでいくことのできるひとは、実際パウロにおいていたるところでキリストの本質についての衝動を見出すのです。

私たちはここで、私たち自身がゴルゴタの秘跡の成立（生命を得ること[das Ins-Leben-Treten]）をどのように叙述したか思い出してみましょう。私たちは時代の経過にそって、事実ふたりのイエス少年がいるために、マタイ福音書とルカ福音書における二つの異なったキリスト・イエスの若き日の物語（☆９）があることを知りました。そして私たちは、外的に、パウロの意味に沿って言うと肉によれば、すなわち物質的な血筋によれば、イエス少年はふたりともダヴィデの家系に由来すること、ひとりはナータン系、もうひとりはソロモン系から出ていること、つまりふたりのイエス少年はほぼ同じ時期に生まれたことを知りました。マタイ福音書における一方のイエス少年のなかに、私たちはツァラトゥストラ（ゾロアスター）が再び受肉しているのを見出しました、そしてルカ福音書が叙述しているもう一方のイエス少年のなかには、人間の自我、とりわけ、ツァラトゥストラの自我のように高度に進化した自我を宿したもうひとりのイエス少年のような人間のなかにあるような自我は本来入り込んでいないことを強調しました。ルカのイエス少年のなかには、本来、人間のうちで地上の人間進化には入っていかなかったものが生きているのです。

この点において正しい表象に至るのは少々困難です。とは言え、いわばアダムのなかに受肉した魂、つまり私の「神秘学」（☆10）の意味でアダムと呼ばれるものに受肉した魂、この魂が、ルツィファーの誘惑に屈するようすをちょっと思い描いてみてください、聖書においては象徴的に楽園における堕罪によって叙述されているルツィファーの誘惑に。これに加えて、アダムの身体に受肉したあの人間の魂性のかたわらに、当時受肉せず、物質的体に入り込まず、魂的なままであるひとつの人間性（メンシェントゥム）、人間存在を思い描いてください。人類進化の内部に物質的人間が発生する前に、その後二つに分かれるひとつの魂がある、と想像してくださりさえすればよいのです。共通の魂の一部、一方の後裔がアダムのなか

に肉化し、それによってこの魂は受肉へと入っていってルツィファーに屈服するなどします。もう一方の魂、いわば姉妹魂[Schwesterseele]については賢明な宇宙統治によって、この魂も受肉するとよくないということが予見されました。この魂は魂的世界にとどめ置かれます、つまり人類の受肉のなかに生きることはなく、そこに引き留められるのです。この魂とは秘儀に参入した者のみが交流します。ですからこの魂はゴルゴタの秘跡以前の進化の間には自らのうちに自我体験[Ich-Erlebnis]を受け入れていません、なぜならこの自我は人体のなかへ入って受肉することを通じてはじめて体験されるからです。それゆえしかしこの魂は、土星紀、太陽紀、月紀を通じて体験することのできたあらゆる叡智を有します、この魂は、およそ人間の魂に可能であろうあらゆる愛を有しているのです。つまりこの魂はいわば、人類が人類進化の受肉の経過において自らのなかにもたらし得る罪のすべてに対して無垢であるということです。この魂はつまり、外的に人として出会うことはできず、いにしえの霊視者（見者）たちによってのみ知覚されることのできた魂なのです。霊視者たちによってこの魂は知覚されました。この魂はいわば秘儀のなかで交流したのです。このように、人類進化の内部、しかも上部に、とも言えるでしょうか、そこに私たちは、最初は霊的にのみ知覚された魂を、ひとりの前人間[Vormensch]、超人間[Uebermensch]を有しているのです。

この魂が、ルカ福音書のイエス少年のなかに自我の代わりに受肉した魂です。みなさんはバーゼル講義（☆11）のことを憶えておいでですね。そのときすでにこのことは述べました。つまり、これは単に自我に似た[Ich-aehnlich]魂であり、これはイエスの肉体のなかに入り込むときにはひとつの自我のように働きかけるのはもちろんなのですが、この魂が示すすべてはやはりほかの通常の自我とは異なっています。私はすでに、ルカ福音書のイエスが生まれてすぐに、彼の母にも理解できる言葉で話すことができた、ということを強調しました。彼の場合似たようなことはほかにもありました。さらに私たちは、ツァラトゥストラの自我が内に生きていたマタイのイエス少年が十二歳まで成長したことを知っています、ルカのイエス少年の方も成長したのですが、こちらはとりたてて人間的な認識や学問は持っておらず、神的な叡智と神的な供犠の力を自らのうちに担っていました。

このようにルカのイエス少年は成長し、外的に人間的に学ぶことのできる能力はとくに示しませんでした。さらによくご存じのとおり、ツァラトゥストラの自我はマタイのイエス少年の肉体を去り、ルカのイエス少年が十二歳のときにこのツァラトゥストラ自我がルカのイエス少年の肉体を所有しました。この瞬間は、ルカ福音書の十二歳のイエス少年について、両親が彼を見失ったとき彼は神殿の賢者たちの前で教えていた、と語られることによって暗示されます。

さらに私たちが知っていることは、このルカのイエス少年が今や自らのうちにツァラトゥストラ自我を担って三十歳にまで達し、このときツァラトゥストラ自我はルカーイエスの肉体を去ること、そして今や覆いの性質であるものすべてをキリストが所有することです、高次ヒエラルキアの超人的存在であり、そうですね、十二歳の年まで最初は前人間的な叡智の諸力、前人間的神的な愛の諸力に浸透されていて、次いでツァラトゥストラ自我により多くの受肉において秘儀参入を通じて獲得されたすべてのものに流入され浸透された体、そもそもそういう体が彼のために提供されたというような状況においてのみ人間の体に住まうことのできたキリストが所有するのです。このキリストの自我がそもそも人類のなかへと入ってくることができるためにはどんな肉体性が必要だったかを理解しようと試みるとき以外には、いかなるものによっても、キリスト存在に対する正しい注意、正しい畏敬、要するに正しい感情全般は得られないかもしれません。

このキリスト存在について近代の聖なる秘儀から与えられるこういう叙述のなかに少なからぬ人たちが見出したことは、こういうキリスト存在は、さまざまに思い描かれて多くの人が敬うキリスト・イエス、家族のように親しく、人間の身近にいて、通常の人体に受肉し、ツァラトゥストラ自我のようなものを内に宿すことのない、そういうキリスト・イエスほどは、いわば親密にも人間的にも見えない、ということでした。私たちの教説は、キリスト・イエスが宇宙のあらゆる領域からの諸力から合成された、と言っているということで非難されました。こういう非難は単に人間の認識の怠惰、感受性と感情の真の高みへと上昇しようとしない人間的感情の怠惰に由来します。最も偉大なものは、最大のもの、最高のものをいくらかなりとも魂に近づけるために不可欠の、感情と感受性のあの内的な強度を得るべく、私たちの魂が大いに刻苦勉励して把握されなければなりません。このように最初の感情は、私たちがそれをこのような光のなかで観察するときにのみ高められるのです。

さらにもうひとつ私たちは知っています。「神の力は高みにおいて開示され、善き意志の人々のもとに平

和が広がる」（☆12）という福音書の言葉をどのように解釈しなければならないかを知っています。ご存じのように、この平和と愛の知らせは、ルカのイエス少年が現れるとき、ルカのイエス少年のアストラル体のなかに仏陀が、当時すでに、ゴータマ・ブッダとしてのその最後の受肉を成し遂げ完全な霊性にまで上昇した存在のなかにあった仏陀が介入することによって鳴り響きます、ルカのイエス少年のアストラル体のなかに、地上でのゴルゴタの秘跡の出現まで前進していた仏陀が自らを開示することによってです。

このように私たちは、いわば今日はじめて神秘学の基礎から人類に与えられることのできるキリスト・イエスの本質を私たちの前に据えました。パウロは、秘儀参入者であったにも関わらず、その頃の時代にとっても理解しやすい概念で語らなくてはなりませんでした、彼は、私たちが今日心になじませることができるような概念をすでに理解できるような人類を前提とすることはできなかったでしょう。けれどもパウロのインスピレーションを完成させたものは、実際、恩寵によって引き起こされた彼の秘儀参入を通じて呼び起こされたのです。パウロは古代の秘儀における規則正しい行を通じてこれに到達したのではなく、復活したキリストが彼に現れたダマスクスへの途上で恩寵によって到達しました、それゆえ私はこの秘儀参入を恩寵により起こされた秘儀参入と呼びます。けれどもパウロはこのダマスクス現象（☆13）に直面し、それによって知ったのです、いかにも、ゴルゴタの秘跡において復活したもの、それはゴルゴタの秘蹟以来地球領域に結びついて生きている、と。パウロは復活したキリストを認識（識別）しました。このとき以来、彼はこの復活したキリストを告げ知らせました。なぜパウロは彼が見たようにキリストを見ることができたのでしょうか？

ここで少しばかり、この種のヴィジョン、ダマスクスでのそれのような現前[Manifestation]に入り込んでみなくてはなりません。と申しますのも、何と言ってもそれはまったく特別な種類のヴィジョン、現前だったからです。オカルト的事実について実際にいささかなりとも学ぼうという気持ちがない人々だけが、ヴィジョン的なものすべてを単純に混同し、パウロのヴィジョンのような何かを、後の聖人たちに現れたようなほかのヴィジョンから区別しようとしないのです、例えば「平和の知らせ」の著者（☆14）がしているように。この著者はまさしくオカルト的事実について決して真に何かを学ぼうとはしない人たちのひとりです。

これはほんとうに何だったのでしょうか、なぜパウロはあのようなしかたでキリストを知覚することができたのでしょうか、ダマスクスを前にして彼に現れたキリストを？なぜパウロはそれについてこれは復活したキリストである、という確信が持てたのでしょうか？この問いは私たちを別の問いへと引き戻します、キリストの本質全体が、ヨルダン河でのヨハネの洗礼として暗示されるあの出来事の際にナザレのイエスのなかに完全に入り込んでいくことができるためには、そのとき何が不可欠だったのか、という問いです。ーーさて、私たちはたった今こう言いました、キリストの本質が降っていくことになったあの肉体性を準備するためには何が不可欠だったのか、と。けれども、復活した者が、パウロに現れたほどに濃密に魂的に現れることができるためには何が必要だったのでしょう？ダマスクスを前にしたパウロに現れたキリストがそのなかにいたあの光輝[Lichtschein]とはいわばいったい何だったのでしょう？それは何だったのでしょう？それはどこから受け取られたのでしょう？

私たちがこれらの問いに答えたいなら、私が以前に申し上げましたことにいくつか補足しながら付け加えなければなりません。私は皆さんに申しました、このとき人間の世代の系列のなかに入っていったアダムの魂のいわば姉妹魂というものがあった、と。この姉妹魂は魂的世界にとどまりました。この姉妹魂はルカのイエス少年のなかに受肉した魂でもありました。けれどもこの魂は、言葉の厳密な意味では、物質的人間のように受肉したのはこのとき初めてではありません、この魂は以前一度すでに預言的に受肉したことがありました。以前にももうこの魂は聖なる秘儀の使者のように用いられたのです。私は皆さんに、この魂は秘儀において交流を持たれ、いわば秘儀のなかで育み養われて、人類において重要なことがあるときに派遣された、と申し上げました。しかしこの魂は、エーテル体のなかへの出現としてのみ存在することができたのであり、厳密な意味では古い霊視が存在していた限りにおいてのみ知覚されることができました。実際以前の時代には霊視は存在していました。つまり当時このアダムの古い姉妹魂は、人々に見られるために物質体にまで降る必要はなかったのです。とはいえこの魂は、秘儀の衝動により派遣され、地球進化において重要な事柄が為されるべき時にはいつも、地球の人類進化の内部に繰り返し実際に現れました。けれどもこの魂は古い時代には受肉する必要はありませんでした、霊視というものがあったからです。

この魂は、昨日お話ししましたアトランティス後第三期から第四期へと移行する際この霊視が克服されることになったときはじめて受肉する必要がありました。このときいわば補足としての受肉、もはや霊視がなくなった時代に対応できるための受肉を引き受けたのです。このアダムの姉妹魂は、クリシュナのなかにいわばただ一度だけ受肉しました、物質的にも目に見えるようになるために姿を現さなければならなかったのです、この魂は次いで今度はルカのイエス少年のなかに受肉しました。こうして今や私たちは理解します、クリシュナがなぜかくも超人間的に語るのか、なぜ人間の自我にとって最良の師であるのか、なぜクリシュナはいわば自我の克服を示すのか、なぜクリシュナはかくも魂として崇高に現れるのか、理解するのです。なぜなら、私たちが数日前に魂の前に出現させたあの崇高な瞬間に、クリシュナは人間として現れるからです、まだ人間の受肉のなかに下降していない人間として。

その後彼は今度は、ルカのイエス少年のなかに受肉するために現れます。したがって、十二歳のイエス少年のなかでアジアのきわめて重要な[ふたつの]世界観（宇宙観）が、つまりツァラトゥストラ自我とクリシュナ霊が結びつくときに、あの完全さが実現するのです。今や神殿で導師たちに語りかけているのはツァラトゥストラのみではありませんーーツァラトゥストラは自我として語りますーー、ツァラトゥストラはかつてクリシュナがヨーガを告知した手段をもって語ります、彼はさらに一段階高められたヨーガについて語ります、彼は三十歳まで成長していくために、クリシュナの力と、クリシュナそのひととひとつになるのです。そしてここで初めてキリストによって所有されることのできたあの完璧な肉体性が得られます。このように人類の霊的な諸潮流は合流しています。こうして、ゴルゴタの秘跡が起こるとき、まことに人類のもっとも重要な師たちの共働、霊生活の統合がなされるのです。

パウロがダマスクスを前にして出現に遇うとき、このとき彼に現れるのはキリストです。キリストがまとう光輝[Lichtschein]はクリシュナなのです。そしてキリストがさらに働きかけを続けるための自分の魂の覆いとしてクリシュナを受け入れたので、輝きを放つもののなかに、キリストのなかに、かつて崇高なギーターの内容であったものすべてもまた含まれているのです。

新約聖書の啓示のなかに、ばらばらに散らばっているとは言え私たちはいにしえのクリシュナの教えに由来する多くを見出します。けれどもこの古いクリシュナ教義はこれによって全人類の要件となったのです、なぜならキリストそのものは人間の自我及び人類には属さず、高次ヒエラルキアに属するからです。しかし同時にまたキリストは、あの時代にも属します、今や物質的存在として人間を取り巻いているもの、人間自身のルツィファー的誘惑を通じて人間にとってはマーヤーのなかに覆われているものからまだ人間が切り離されていないあの時代に。進化全体を振り返って見てみましょう、すると、あのいにしえの時代にあっては、霊的なものと物質的なものの間のあの厳密な区分がなく、物質的なものがまだ霊的で霊的なものもーーこう申し上げてよろしいならーーまだ外的に顕現しているようすが見えます。サーンキヤ哲学において私たちに向かってくるプルシャとプラクリティの厳密な区別のようなものをまったく退けるような何かが、キリスト衝動のなかで人類に歩み寄ることによって、キリストは人間の指導者となります、自発的なしかも神の創造のための指導者に。さらに、私たちの罪によって私たちにはマーヤーが自明のもののように見えるということを認識したなら、私たちは絶対にマーヤーを去らねばならないなどと言うことが許されるでしょうか？　否です、と申しますのも、そんなことを言うのは宇宙（世界）における霊への冒涜（ぼうとく Laesterng）というものでしょう、それはつまり、私たち自身がマーヤーのヴェールを負わせてしまった物質の特性のせいにすることでしょうから。むしろ、私たちは望まなければなりません、私たちにとって物質をマーヤーとしているものを私たちが自らのうちで克服するとき、私たちは再び宇宙（世界）と和解していくであろうことを。私たちを取り巻くこの宇宙から私たちに向かって響いてはこないでしょうか、この宇宙はエロヒムの創造である、そして創造の最後の日に「そして見よ、すべては極めて良かった」（☆15）とこのエロヒムはみなした、と。

これは、クリシュナ教義のみが存在するとしたら、成就するであろうカルマでしょう、カルマが成就することなしには宇宙には何も残らないからです。クリシュナ教義だけが永遠に存在するとしたら、地球進化の最初にエロヒムがそれについて「そして見よ、すべては極めて良かった」と言った神の顕現である周囲の世界の物質的存在に、つまりこの神の顕現（開示）[Gottesoffenbarung]に、「それは良くない、私はそれを去らねばならない！」という人間の判断が対立させられるでしょう。人間の判断が神の判断より上位に置かれることになってしまいます。これは、進化の出発点に秘密として書き留めてある言葉を理解することを学ばなければならない、ということです。これは、私たちが人間の判断を神の判断の上位に据えない、

ということです。私たちに罪として付着するかもしれないすべてが、いつかいたるところで私たちから落ちていくこともあるでしょうが、私たちがエロヒムの創造を誹謗するという罪がひとつ残るとしたら、ーー地球のカルマは成就しなければならないでしょう、そして未来においてすべてが私たちに襲いかかってこざるを得ないでしょう。このようにカルマは成就せざるを得ないでしょう。

これが起こらないようにするために、キリストは世界（宇宙）に現れたのです、私たちが世界（宇宙）と和解し、その結果私たちがルツィファーに対して誘惑の力を克服するすべを学び、そのヴェールを突き抜けていくすべを学び、神の顕現をその真の姿において見、私たちを神の顕現の真の姿へと導く調停者[Versoehner]として私たちがキリストを見出し、私たちがキリストを通じて「そして見よ、すべては極めて良かった」という太古の言葉を理解するすべを学ぶことができるように。決して宇宙のせいにすることを許されないものを私たち自身の責任とすることを学ぶために、そのために私たちはキリストを必要としています。すると、そのほかの罪もすべて私たちから取り去られ得るでしょうーーこの罪はキリストを通じて私たちから取り去られねばならないのです。

これが道徳的な感情に変化すると、これがさらに新たな面からのキリスト衝動を与えます。同時にこれは私たちに、高次の魂のようなキリスト衝動がクリシュナ衝動で覆われることが不可欠であったのはなぜかを示します。

愛する友人の皆さん、このチクルスで意図されたような議論が、単にひとつの理論として、私たちの受け入れる概念と理念の総計としてのみ受け取られることは望みません、こういう議論をぜひとも一種の新年の贈り物として受け取っていただきたいのです、この新たな年に入り込んでいき、この年から先さらに作用し続けるひとつの贈り物、この地球創造の太初の出発点において私たちに響いてくるエロヒムの言葉、私たちはこの言葉を理解しなければならないのですが、キリスト衝動がこのエロヒムの言葉を私たちに理解させる限り、キリスト衝動の理解を通して感じ取られ得るものとしてさらに作用し続ける贈り物として。そして、意図されたものを同時に私たちの人智学的な精神（霊）潮流の出発点とみなしてください。この精神（霊）潮流を通じて、人間が自らのうちでいかに完全な自己認識に至りうるかをますますいっそう認識してもらいたいという理由からも、この精神潮流を人智学的なものにしていただかなくてはなりません。人間が、自分の魂のなかで作り上げるべきものを、自分と外的な自然との間で演じられる問題[Angelegenheit]のように観察する限り、人間はまだ完全な自己意識に到達できません、アントロポス[Anthropos]はまだアントロポスの認識に、人間は人間についての認識に到達することができないのです。

私たちが世界（宇宙）をマーヤーに没していると見ること、これは神々が私たちに準備した問題です、私たちの魂そのものの問題、高次の自己認識の問題です、これは人間がその人間であることのなかで自分で認識しなければならない問題なのです、これは人智学の問題です、人智学を通じて私たちははじめて神智学が人間にとってそうであり得るものを感じ取ることができるようになるのです。人智学の運動に参加しようと決心するとき、人間が衝動として感じ取るものは、最高の種類の慎ましさ[Bescheidenheit]でなくてはなりません、自らにこう言い聞かせるような慎しさです、私が人間の魂の問題であるものを飛び越え、神的なものの最高の歩みのなかに一挙に入り込みたいと思うなら、いともたやすく私から謙虚さは消え去るだろう、謙虚に代わっていともたやすく高慢が現れるだろう、虚栄心が容易に起こってくるだろう、と。ーー願わくば人智学協会がこの高次の道徳的領域における出発点でもありますように。最高の存在たちであるものを受け入れるときに、高慢、虚栄心、功名心、不誠実のかたちで神智学運動のなかにかくもたやすく忍び込んできたもの、とりわけこれを人智学協会が回避しますように、人智学協会がその出発点において、マーヤーとともに形成されねばならなかったものをこの人間の魂そのものの問題とみなすことによって、避けることができますように。

人智学協会を人間のもっとも深い慎ましさの成果としよう、と感じなくてはなりません。と申しますのも、聖なる真実に対する最高の誠実さ、私たちが超感覚的なもの、スピリチュアルなもののこの領域に赴くとき聖なる真実のなかに入り込んでいくべきこの誠実さは、この慎ましさから湧き出してくるであろうからです。ですから私たちは、「人智学協会」という名称の受け入れを、真に慎みをもって、真に謙虚に理解し、自らにこう言い聞かせましょう、神智学という名称がなおも不遜さ、虚栄心、功名心において引き起こし得たものが消し去られますように、ーー慎ましさというしるしと標語のもとにーー神々と神々の叡智を慎ましく仰ぎ見ることを始めるとき、けれどもそのために人間と人間の叡智を責任を持ってとらえるとき、つまり敬虔さをもって神智学に近づき、責任をもって人智学に沈潜するときに、消し去られますよ

うに、と。この人智学というものは私たちを神的なものと神々のところに導くでしょう。そして私たちが人智学を通じて最高の意味で謙虚に真に私たち自身の内を見ることを学び、そしてとりわけ、厳しい自己教育と自己陶冶のなかであらゆるマーヤーとあらゆる錯誤に対して私たちがいかに格闘しなければならないかを私たち自身のなかに見るとき、青銅の銘板に書かれたように「人智学」が私たちの上方に掲げられますように。そしてとりわけ私たちが人智学を通じて自己認識を、自己に対する謙虚さを求めること、そして私たちがこのようにして、真実に基づいた建物を建てる試みを、なぜなら自己認識が最高の誠実さをもって人間の魂のなかに確立しているときにのみ真実は花開くからですが、そういう建物を建てる試みをすることができること、このことが私たちを強く促しますように。あらゆる虚栄心は何に由来するのでしょうか、あらゆる不誠実は何に由来するのでしょうか。これらは自己認識の欠如によるのです。真実は何から芽吹くことができるでしょうか、神々の宇宙（世界）と神々の叡智に対する混じりけのない敬虔さは何から芽吹くことができるでしょうか。これらは真の自己認識、自己教育、自己陶冶からのみ芽吹くことができるのです。人智学運動を通じて流れ出し、脈打ってくるべきものがこのために役立ちますように。この理由から、この人智学運動の出発点にほかならぬこのチクルス（連続講義）が置かれました、問題は何か偏狭なものではなく、私たちはまさにこの運動とともに私たちの地平を、東洋的な思考も把握しているあの彼方を越えてさらに拡げてゆくことができるのだ、ということを証し示そうとするこのチクルスが。これを謙虚に人智学的なしかたで把握しましょう、自己教育し、私たちのなかで自己教育と自己陶冶への意志を強めながら。愛する友人の皆さん、人智学が皆さんによってこのように手がけられるなら、人智学は有益な結果に至ることでしょう、どのひとりひとりにもどの人間社会にも癒しを与える目的に到達するでしょう。

そのために、この言葉が語られますように。これをこのチクルスの最後の言葉としたいのですが、この言葉について、何かを魂のなかでこれからの時代に携えていくことができる人たちもいるかもしれません、そうすれば、愛する友人の皆さん、皆さんはこの運動のためにここ数日間にいわばはじめてお集まりになったわけですが、この人智学運動の内部でその何かは実りあるものになるでしょう。願わくば私たちがいつも人智学のしるしのもとに集い合い、そして今終わりに際して名づけたい言葉、私たちが今まさにこの瞬間における理念として魂の前に置くことが許されるであろう慎みという言葉、自己認識という言葉を私たちが正しく礎えとすることができますように。

□編註

☆１　フィヒテ：Johann Gottlieb Fichte 1762-1814
『全知識学の基礎と輪郭』（Jena1794 ）参照。

☆２　ヘーゲル：Georg Wilhelm Friedrich Hegel 1770-1840

☆3　…パウロがコリント人たちに向かって書いている箇所：『コリント人への手紙 １ 』12章

☆４　「霊感を授かった兄弟たちについては…」：同上 12章 1-30 Carl Weizsaecker の翻訳に準拠。

☆５　「しかし私はあなたがたに…道を示したいのです」：同上 13章 シュタイナーによる自由な翻訳。

☆６　「感覚は欺かないが…」：第２講の註☆５参照。『ゲーテ自然科学論文集』第５巻349頁。

☆７　それでも、やはりゲーテが…：この言葉は、宰相フリードリヒ・フォン・ミュラー相手のゲーテの発言に関連している：「私がどんなにキリスト教を尊敬しているか、あなたはご存じでしょう、あるいはご存じないかもしれない。今日、いったい誰がキリスト自身が持ちたいと思ったようなキリスト教徒なのでしょう？もしかすると私だけかもしれませんよ、あなたは私を異教徒だと思っていらっしゃるでしょうけれども。」この発言は1830年4月7日の『宰相フリードリヒ・フォン・ミュラーとの対話』（C. A. H. Burkhardt 編　Stuttgart 1870）に見られる。

☆８　ですからパウロはキリストを…：『コリント人への手紙 一 』15章 45

☆９　二つの異なったキリスト・イエスの若き日の物語：これについては、シュタイナー『人間と人類の霊的な導き』（1911 GA15 第３講）；『ルカ福音書』（Basel 1909 GA114)；『マタイ福音書』（Bern1910 GA123)；『イエスからキリストへ』（Karlsruhe 1911 GA131）参照。

☆10　私の『神秘学』の意味で：シュタイナー『神秘学概論』（1910　GA13)の「宇宙進化と人間」の章（259頁）参照。

☆11　バーゼル講義：『ルカ福音書』（GA114）
☆12「神の力は高みにおいて…」：『ルカ』2,14　シュタイナーによる翻訳。
☆13　ダマスクス現象：『使徒行伝』9,1-6
☆14　「平和の知らせ」の著者：ヴィルヘルム・ヒュッベシュライデン博士 Dr. Wilhelm Huebbe- Schleiden 1846-1916　彼についてはシュタイナー『わが生涯』（1923-25　GA28 32章）及び連続講義『人智学協会との関係における人智学運動の歴史と諸条件』（Dornach 1923 GA258 第６講）、さらにシュタイナー『書簡集第２巻』（Dornach 1953）参照。小冊子のタイトルは "Die Botschaft des Friedens" 1912年6月19日ハノーファーで神智学協会のために行われた講演。Leibzig 1912
☆15　そして見よ、すべては極めて良かった：モーゼ1. 1,31